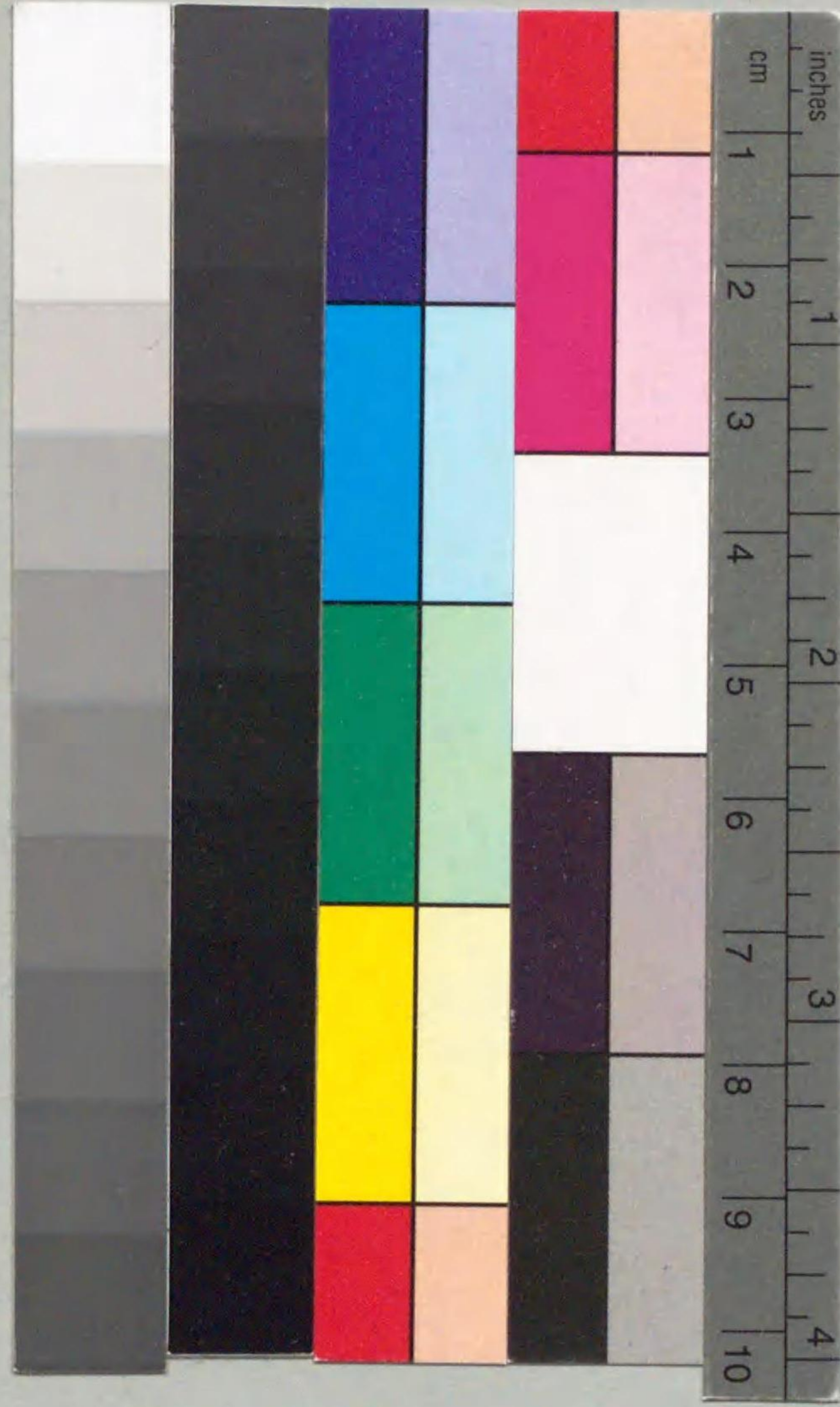
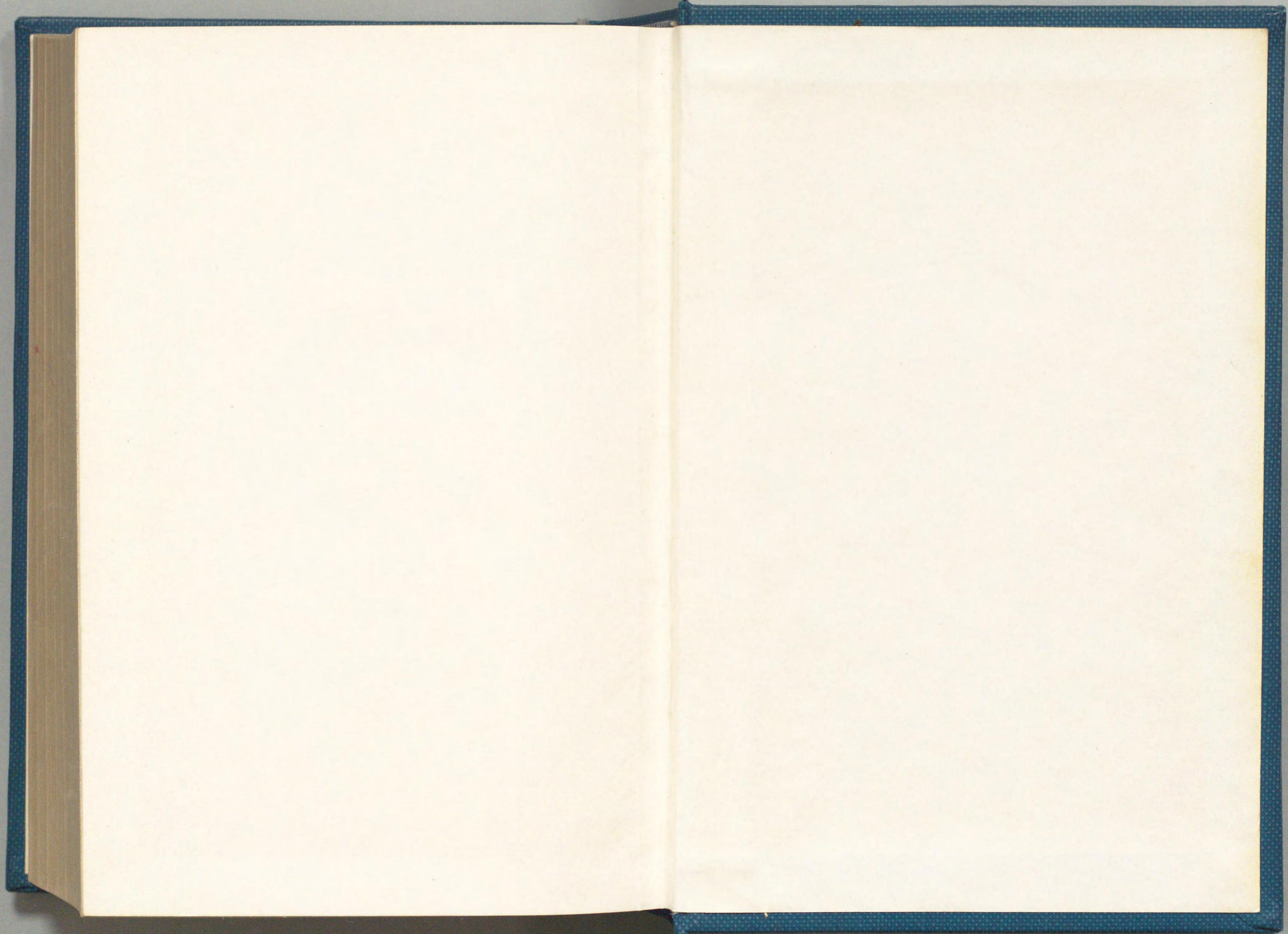


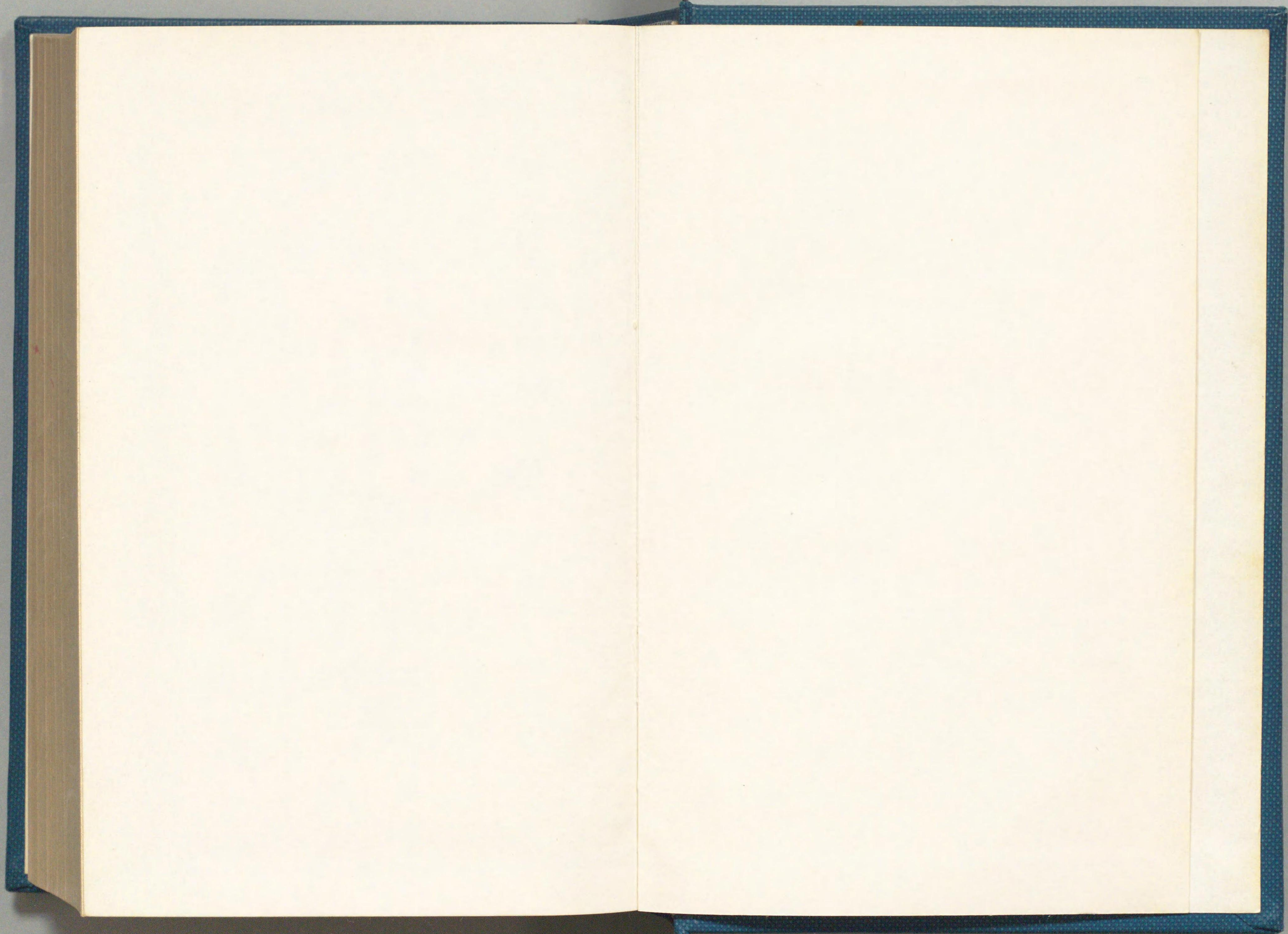
913.54
H135n
H



口
複
写







IT 29 83

博文館編輯局校訂

校訂
人情本傑作集

卷下

東京 博文館藏版



913.56
Si 498

913.54
H135a
H



285301

人情本傑作集下卷

解題

解

人情本、また浮世小説ともいふ、時の人情世態を模寫曲盡して、風俗史文
明史の料に充つべきものなればなり、その傑作なるものに至ては、優美な
る寫實小説とも稱すべく、彼の誤つて誨淫素俗の筆を弄するものゝ如き
は、編者の取らざる所なりとす

題

當世虎之卷 一に傾城買虎之卷と稱す、田螺金魚の作なり、金魚は實名詳
ならず、神田三河町邊の町醫なりといふ、天明の頃吉原にありし、實話を本
として作りたるものにして、所謂洒落本の中尤も行はれたるものなり、世
にありふれたるは、卷尾の廓言葉十八大通傳授などいふを缺きたるもの
あり、本編は古版によりて之を補へり

寒紅丑日待 原本二卷、振鷺亭主人の作なり、振鷺亭の事は珍本全集中に出でたれば贅せず

氷縁奇遇都の花 三卷なり、作者菅垣琴彦の傳は詳ならず、蓋し名を包める人の戲著なるべし

梅之春 原本十二卷、爲永春水の作なり、春水の傳は曩に出せる梅曆春告鳥の卷首に詳にしたれば今は省く

戀之花菱 三卷なり、作者平亭銀鷄は金雞の男にして、江戸幕末の頃の人なり、父金雞は醫師にして狂歌をよくし、闇雲愚抄等の著あり、銀鷄も亦滑稽の才ありて、酒取物語など戲著數書あり、金龍山海潮音記は淺草觀世音の佛徳を記したるものなり

花街すゝめ 亦三卷なり、鼻山人の作とす、山人の作る所、綺話中往々滑稽

の言を交ゆ、亦一機軸を出せるものか、名甚た高からされども著す所少からず、山人俗稱を細川浪二郎といひ、九陽亭又東里山人と號す、安政六年七十四歳にして歿せり

春色三題 河竹其水、柳亭種彦等數十人の短篇を輯めて三卷となしたるものにて、春廼家幾久輯、弄月亭有人校とあり、春廼舎は何者なるか詳ならず、河竹其水は人も知りたる脚本の作者にして、弄月亭は山々亭とも號せらる、今の採菊散人條野傳平君の戲號なり、江戸時代の作者にして今に操觚の業を専らせらるゝもの獨り君のみ

閑情末摘花 原本十二卷ありて、松亭金水の著なり、金水通稱を中村源八といふ、名は保定、書を金川といふ者に學びて生徒に教授す、已にして爲永春水の人情本を淨書すること數次にして、遂に春水の風調を覺り、自ら人

情本の著あるに至り、金川春水の片字をとりて金水とは號せり、一號を稽翠道人といひしは松亭の字に因みしならん、梅亭金鷲等と友とし善し、文久二年六十六歳にて身まかる、辭世に

むそぢ餘り六とせのけふを命にてうき世の夢はさめはてにけり

鹽梅餘史 僅々數頁の小冊子なれども、馬琴の才筆頗る味ふべきものにして、よく當時の人情世態を模寫す、采風者の料に資すべきものたり

仇競今様櫛 原本九卷、紀山人の作なり、紀山人は十返舎一九の門人にして下野の人、姓名を絲井鳳助といひ、初め十字亭三九と號せり、本書の第二編より、二代目一九作と署せるは、此頃よりして師の別を襲きたるなり

夜三月柳の横櫛 原本十五卷、梅亭金鷲の作なり、金鷲は本名を瓜生政和といふ、擊劍の達人なり、瀧亭鯉丈万亭應賀等と交り、遂に松亭金水の門に

入りて梅亭金鷲と號す、戲著多し、七偏人尤も著はる、書中の畸人は皆友人の本事を寫せりといへば、其滑稽想ふべし、維新の後、野村氏の囑に應じて團々珍聞を創め、梅亭化三の名また江湖に響けり、明治二十三年七十一歳にて歿す、曾て七偏人の解題よ翁の傳を詳にせずと記せりしが後に鶯亭

金升に聞きて頗る平生を詳にせり、金升氏は梅亭の高弟なり

娘太平記 原本十二卷の中、初は曲山人の作にして、後は松亭金水の續成する所なり、所謂人情本の作に於て、春水以外別に一門戸を樹てたるは曲山人なり、著書甚だ富まずと雖も、優に一作家と稱するに足れり、松亭金水本書に序して、「吾友なる曲山人、別名を三文舎自樂といふ、性來筆道に巧にして、文をよくし畫を能くす、且世間の人情に涉りて常に流行の書を著し其名おさく聞えたりしに、惜哉沒故してその志を果すに至らず云々」と

いへるは天保八年正月にして、かくて中巻以下は金水の手に成りたるなれば、以て山人の歿年をも知るべく、亦以て二人者の交情をも見るに足るべし、曲山人の事は本集上巻に述べたれば今復贅せず

明治二十八年八月

蜃氣樓主人識

人情本傑作集下巻

總目錄

當世虎之卷	一
寒紅丑日待	四五
氷縁奇遇都の花	八九
辰巳梅之春	一二七
清談	
蔦蔓戀之花菱	二八一
花街壽々女	三〇五
春色三題嘯	三四三
閑情末摘花	三八一

戲聞鹽梅餘史……………五八一

夜三柳之橫櫛……………五九九

娘太平記操之早引……………七七七

仇競今樣櫛……………九三九

以上

叙

凡滑稽向穴探などいへる。その類世におほしといへども。これをよむに穴を探して穴をまらず。滑稽といへどもみなぶじやれなり。これを土の團子にたとふ。なにぞ青樓の曲とならんや。今や大通夫子此みちの凡夫をしてその通を得せしめむと。瀬川が傳を述て。傾城でんじゆの虎の巻となづく。よむもの或ひは感じ。或は泣き。あるひはをかしくおもしろきにほだされて。手の舞足のうつゝをぬかさず。此書のおくぎに眼をつけて。よく契情の心をうぼふとをつとめたまへ。

安永七年亥戌孟春

田にし金魚撰

二 虎のまきの綱目

○第一 鄭課の身上 瀬川か身賣

○第二 當世の風俗 大通の手管

○第三 紋日の風流 色客の忍夜

○第四 新妓の眞實 新妓の眞實 新妓の眞實

○第五 瀬川の欠落 惡頭軍次

○附たりやばを化していきとなす十八大通之傳授書

初會の鹽梅 床入の魂膽

遊の趣向 息子のいましめ

傾城のあやなし 身請のいくたて

傾城の産子 瀬川か魂魄

當世虎之卷

武藏野を湧てながるゝすみだ川。たが庵崎や待ち山。花に涼に月に雪。四季のながめも日の本に。まつさきかけし風色なれば。日本堤とよぶならし。昔此あたりはすべてよし薄のみ茂しゆ。すだの吉原といひしとかや。其頃此廓今の大門通に在しを。寛永のとし此所へ移りしより。春の花。秋の燈籠にわかのかきやうげんなど物して。よく人をむらからず。廓にかよふ風俗も。物かわり星うつれば。えもん坂にてえもんもなをさず。あみがさ茶やも名のみ残りて。頭巾も今は手ぬぐひの。米やかぶり。かぶるとはきんくなりとて。肩に手ぬぐひおきなんし。すがや色どるにやけ男扇はちく。そり立あたままがへ八丈。かきざらささらしあえさび上州はかた。これらの類ひはみなにた山の本田にして。當世のいきにあらず。いわんや郡内じまみぢか羽織に大たぶさ。ふと袖口の類は傾城甚だこれを賤む。凡そ世の中にゑらんとすればとる人ぞ。まこれに金あるはやばにて。いきなるは貧なり。色男のうぬぼれ。不男のまつとき。かわい男はなせまゝならぬ。金といきじと男ぶりと。かねそなへたらんこそ。志んの色男共いゝつべし。其中にいきにしていきをみせず。穴を志つてあなをいわず。はでにして志つぱりと。にぎやかにしておとなしく。なさけありいきじありて。よく志やれよくかなしめ。よくよろこばせよくを

かしがらせ。いふ事みなせつにあたり。一千言のむだ矢なく。人品大やうにして威有て猛からす。森羅萬象。そのほどを得たらん人こそよく馴よく修行なさば。眞の大通にも至るへし。傾城を論する事もまたくまかり。凡女はたやをかにして顔形めで度。なさけふかからんこそ貴けれ。ある人の評にをとなしきはさみしく。賑なるはふざけ。發明なるは醜く。美しきに馬鹿あり。顔と心と風俗と。三ツびやうし揃ふたるが。中座共なり立ものともよばるといしは。宜なるべし。まことに客の中にきやくなく。傾城の中にけいせいまれなり。

こゝに松田やの瀬川か生れを尋るに。千石を領する人の娘にて。初の名はおやえといしけり。まだ十六の薄ざくら花もおよばす溢る愛敬。みる人なづまさるはなかりきと。かしこにどなる一かまへは二千石を志るよしせり。其末子たる生駒幸次郎此とし十八なりけるが。たくひすくなきはつめいにて。世にもまれなる容色は。源氏の君かなりひらの再来ともいふつへし。とても女に生るゝからは。あんな男にあまへて見たら。志んに命はを志鳥の。思ひをかはす者ならばと。おもはぬ女はなかりけり。梅と柳と北南むかひあふたる物見の亭。互にみかはすながしめに。亂そめにし娘氣の。あいみるともかためなみ。よる晝となくふし芝の露の命もたへく。飲まよく絶し病の床。上野のみくじ目黒のごま。良薬更に志るしなく。名醫もあぐむ折からに。戀に手なれの腰もとおまき。帷幕にめくらす謀。隣の若黨なる者に

ひそかに伴のやうすをたのみ。取かわさせし玉章も。まきが手管や手引のいと。引ばひかる戀のやみ。おやえは聞へ志のぶ草。幸次郎が一夜のりやうじ。百薬にもまさりけん。日々快氣なす。幸次郎はいしなづけの叔父の家督をきらいしが。親と親との武士のやくそくにならざる折からに。おやえもかねていしなづけの。夫をきらう心から。夜半のあいづに忍いで。なれし館をあとになし。あゆみならわぬ道芝の。露と涙を袖裾つまどる縁もふか草や。あさくさ寺の花川戸に。めしつかふたる浪人ありと。覺束なくも尋しに。その人は去年の秋無常の霧とそらに消へ。あとに残りし地震の甚入りあるくゆへ地しんさいふ親には似さる大悪どう此頃まのわるかつたによい鳥が加しりしと。此やうすを聞よりも。鬼の目にもそらなみだ。でもせぬ眼をこすりながら甚八「そりやおこまりなさりやまうどふするとも當分マアこつちになアかゝア幸次郎」それは忝い。志かし貯もないとなれば何につけても甚八「ハテそれもふかこふかなりやせう。おあんどなされやすなど。いふ内ぶつたくり中まさそひにくる。甚八は着たる單物をぬいで女房にきせ。女房の布子とわが布子をあげさげ志て。帯を尻のはづれにむすび。手ぬぐいを肩にかけ甚八「吉やめしやアどふだ。吉いんや今くつて來た甚八」そんならサアいかふ。モシ旦那ちつと山へでもいつておいでなさりや志。おあやうさまはかゝアとおはなしなされや志。そんならわつちやアいつてきやす。コレかゝアおだいちに志る

も跡に世や「おきくど」とやら。此上はおまへがちからまき「なんの御堂よ才にぞんじませう
 それに付ても志うとこのそく才の内ならばお心やすめもあるうのに。どふらくな夫のみの上
 ほんにわけしいまはござりませぬ。モウ四ツを打そふなおつかれ遊したらう。さアおやすみ
 遊ばせといふもいはれぬござ一まい。これはた壁にやぶれ戸をまれて吹こむさよあらし。幸
 二郎が着物をおとんにして。おやゑが着物を夜ぎとなし。ふたりは玄ゆばんに志ごき帯。寒
 さまかせに〇〇〇志め。志めからみたる朝貌の。花のつばみやひらき戸の。志めておきくも
 やすみしが。夜も明ぬれば。やくわんをはづし百八十にうりはらひ。それを米とも汁のみと
 も。あらわれわたる貧家のすまい。みるに志のびす幸次郎は。ゆうゑようが細工の小柄を拂ひ
 これにてよぎ布とんふた通り調へ。一ト通りはおきくにやりけり。かゝる所へ甚八は。一ツ
 布子も打まけて。湯に入りしふりにてぬれ手ぬぐひをさげながら。玄ゆばん一まいにて立歸
 り。はだ帯にはさみし四文錢をなげ出シ甚八「それ米があるまい。何程まけても波鏡一トすづく」此
 のよぎふとんをあなたがたからいたいきやした甚八「つがもなひおよしなされやし。錢をおつ
 かひなさつちやアなりやせぬ。それにわつちらアきつけないよぎふとんをきると。風をひきや
 す。かゝアそんならマア戴ておきやれ。ト甚八おきくに。そのよぎでおれとおのしがきものをだし
 たら。のこりで二七の日なしをきりかへておきやれ。ト甚八はおやゑと女房をむり。甚八「モシ旦那こん

やはちつといふことがござりやす。今からかしもどにいきやすが。二兩あるときつと五兩に
 なりやす。おまへの夜ぎふとんおはをり。二兩はかしそふなもんだ。それほどにならずと
 もいゝが。五ツまへにやア玄きにもつてめいりやす。ちよつとおかしなされや志幸二郎そふ
 志たがゑい甚八「そんならどふぞトへや子の喜介にかつがせていせやへ行しが。女房が湯より
 歸ると玄きにあとよりおつかけて。ほうくどさがせしが。やうく翌日あいそめ川の。三
 が所に。まけて裸で居る時は玄ゆばんはみじかし夜はながしと。はなうただき火鉢で居る所
 へ。おきくはふみこみこゝにてふうふ大とりあい。はては甚八おきくをくらせる。一座と
 も引はなし。おきくをだまして歸まける。あはれむべし幸二郎鑿をはなし。目貫をうり。一
 月あまりくらせしが。いつまでかくてはつまらずと。劍術の師南をおもひ付しが。ふと引風の
 こゝちより。まだいにつのる寒ねつ往來勞疫の傷寒と見たての藥一貼に大人參三匁ツ。毎
 日の人參代にくしかんざしはいふに及ばず。せつばはいきふちかしら。悉くうり志ろなし。
 けふまではつゞけしが晩から入る人參の。あても志あんのあらざれば。とほうにくれし折
 からに。甚八は歸りしが此病躰をみるよりも。人目見あわせ志めころ志。おやゑを賣てあた
 たまらんと。ひとりうなづく心のゑつば。おきくはていしゆに物をもいはず。藥取にと出て
 行。おやゑはあまりの當惑に。傾城に身を賣てりやうじ志て見たいとに。甚八はおもふゑつ

ぼまつくりあいし嬉しさを。氣の毒顔にまかめてみせて甚八「おまへは年ににやわないきどくなおこしろだ。まんざらみごろしにもなりやすまい。これにつけてもアノかゝアめが。人なみでもあるなら。おまへにいつともせまいに。なにをいふにもあめあがりのあひるとききて居るから。たゞやるといつてもうれやせぬ。せめてこんなときばかりも。きれいなかゝアがほまうござりやす。まかし幸さんはあいつにかんがくさせやすから。おあんなされやすな。そふいふ内あいつがくると。またやかままひ。さアはやくえいびなさいトいふより。おやゑは病人に薬をあたへ。かきつくろいその身も帯を引まめて。かみをむすんで顔もせず。吉原へいそぎゆき。松田やへ目みへする甚八「此をんなはわつちが妹でござりやすが。今まては屋敷奉公をさせておきやまたが。こんどおやじが病氣についてつとめをさせとうござりやすから。どふぞ相談してやつてくんなんし松田や「親のびやうきのたつきにもつとめするは。そりやアきどくな事だ。そまていゝきりやうだコレだれぞせげんの權二をよびにやれトせげんの權二「此女中でござりますか。珍らしい生れつきだ。まづなたまめからたちの。きつかいもなしと。そして小まへで。足の五指はそるし。いゝぶんなしの玉だ。一年かカフトはらぐらいでよかるふさ甚八「腹の上をめのじにまてくんなんし權二「いんやはらが山だ甚八「そんなら證文を極てくんなんトおやゑは一年ぎりのつもりを三年の證文にきめて六十兩請取おやゑと引かへ

歸りあしにかしみにまけこみけり。おやゑは瀬川と名をあらため。ないしよより取立られ。中三の位をふんで。其夜みせからつとめしに。容儀たいはいうつ高く。顔をそむけてすわりしは。武藏野の月かげに。はらの志ら雪吉野の花を。あつめてながむる風情なり。もと深窓にそだちし身も。夫へたつるていせつに。斯もろ人に顔さらす。其はづかしさかなしきはきへもうせなん夫の命。あんずるほど猶あるにもあられず。おきくが方へ多認め。幸次郎を廊へ引とり看病志たきあらましを。よみもあわらずおきくが仰天。留主をとなりへたのみおき。瀬川が方へはしり行。身うりの事と甚八が加へらぬとをくりかへし。むねんのはがみをなしにけるが。瀬川が頼みにせひなくも。向のうちにおきくがめいすまいまておりけるとなり。さいわひなるかな明き店なれば。此所へ幸次郎を引とらんとおもへども。先達ての身の代は。甚八に残らず奪れまた一年の身をまづめ。此身の志ろにて店をまづらへ。やまふの人を引とつて。日と夜とに身あがりして。少しもはなれず看病なすに。人參代と身あがり。日ごとに一兩三分ツ。十日たゝぬにまた一年。かくまで深く身をまづめても。夫の命たすけたく。夜の目もねずにあらゆる立願。其かひもなくおも湯もとほらず。そらめつかひとこなで。悪しやうあらはれ。志だいに落ち入。幸次郎は十八にて。淺草野邊の夕けふりと。立てもいとも瀬川はあられず。打ふして身をふるはし。今よりはたれを便り。何たのしみにながらへん

と懐劍を扱はなせばやりては目ばやくいただきとめ。賣なした其からだ。おまへのまゝにははるまいと。刃をもぎ取り晝夜の番志ばしもゆだんはせざりけり。かくておきくは夫を見かざり親元に歸りしが。四五日たつとやみ付甚八。もとよりの悪黨なればたれおとづる人もなくのたれ死せしはいんぐわの車。廻りけいせい。新ぞうやりて瀬川がざしきに寄りあつまりから獸「さだまらぬは人の身とぬしもあれまでのさだまり事だとおもつていなんしアレ花のさんおいらんの髪を取あげてあげなんしは山おいらんへ幸さん許り色男でありいます。あんまりおなげきなんすなへの風は山さんはきついぢやうなしさ。わつちもまげさんにきれた時は。四五日なんにもたべいせぬ。おいらんも身につまされいすせ川そんなにみんながわたしが心を。はらしてくれなんすは。うれしうありいすが。どぶぞわすれやうとおもふ程。なぜか猶かなしうなりいすはなしあふ内はやひるみせのすがしき。

第二

こゝに五郷といへる大通の色男あり。いろこまやかにすきとほり。鼻筋唇眼の中すしく瘦るにあらず肥るにあらず。中ぜいにしてのつしりと。黒はぶたいを上になし。中着はくろ出のかはり八丈。其下に重しはかんとどうじまに古わたりさらさ。もみの袷の半袖玄ゆばん。

皆くろなこのはん襟をかけ。鶯羽二重の羽織長く茶どんすの帯をむすび。中ばへのさかやきに少し大きくひたひをかつかせ。ゆいたてならざる水髪本田。裏付ぞふりをきよらかなるすあしにはき。さも大やうにあゆみくる。取つくろはぬうづ高さ。志せんと威あつて猛からず。かみ二三人ひきつれて。升やがもとへ入ぬれば。斯と見るより廓のかみども。たちまち四五人つけこみて。茶屋がざしきど賑はひける。支那唐はいざ志らず。我日の本にならびなき。中の町の夕げしき。ゆきかふ全盛こぎませし。中に秀しけいせいは瀬川。ふたへまぶちもなきはらし。顔おとろへし其風情。紅粉は粧ざれども。艶なる事玉のごとく。かざらぬなりのゆしきは。天よりなせる容色にて。せきりうくんをひるがへし。たをやかなる其道中。駒下駄はまりぐつのごとく。てうちんはけるににたり。對の禿は志んぞうに。花やかに付きたがひ。升やがのきをよぎりゆくを。こゝにむれ居る五郷がかみ目早くもかみ。是は瀬川さまちよとちよりなされまし。こゝす通りはなりませぬせ川「どふしなんしたへといひながら五郷をア／＼ちつとおかけなされませ。只今ちよつと一げいをお目にかけますせ川「そりやアよふありい志やうとにっこりといへどさすがによりかねて。心を跡にあゆみ行かみ「旦那なんでもあれは捨おかれぬありさまでござります。なんでも一矢五郷「いんや女郎かひより新ぞうよびの

みんなとかう酒でものんでいるほふが。ましだらう。トいへ共かみ共くちん／＼になんでもあれには一もつありと。そばからきしにやるよりはやく立歸る若もの。かみ／＼と／＼若者瀬川さまはお心持がわるいとて今中の町から御歸りなされたからどふだらうかと申すすから。達て聞てもらいしたら。新ぞうさんがたがさきの客人なら。つれ申せとおつ志やりました。さてこそかみ共は。いやがる五郷をむりにともない。松田やへいさみゆく。瀬川は五きやうを中の丁でちよと見志より過ゆきし夫の事のいやまさり。志やくをおさへて立歸り。夜着引かぶりうちふして。せめて夫よにた人の顔でもみたら氣もはれうかど。まつにほどなく大ぜいどし／＼。物ずきなせる瀬川がさしき。火鉢の火氣は室にみち。そらだきの香にてよく心をとらかす。盃の其中に女げいしやは歌のつれ引。かみたちは何がなと志やれをひろふ初會のさしきの事なれば。さして入組し事はなけれど。一席かくべつは／＼と。萬事まがつてうきやかた。ちよつ／＼と女郎のきをとり。たゞ何となくその興深し。ことに五郷は一りの氏神なれば傾城のなつむ事は。猫にまた／＼び焚にひとし。瀬川も此夜は物忘まばしは興に入けるが。ほどなくさしきも引けぬれば。風流つくす圍の床。志よくきんの夜着。呉綾のふとん。ゑぞのまくらにせきとめる。涙ぞつねにみつせ川。狂言も見れどもみえず。とへどこたへぬ口なしの。花ものいはぬうきおもひ。五郷は見るより此女うきことありてひとすじ

に。何をおもふやと思ひながら。うと／＼まどろみしを。おこして見てもいらへなければ。瀬川はそろ／＼とおきあがり口をすゞ。燈みやうか／＼げ俗名幸次郎そんれいと。志るせし位牌を取出し。水をたむけぢゆづつまぐり。まばしるこうなしけるは。一ツの羽織を取出し。いだきまめてふしまづむ。五郷はふつと目をさまし。扱は此ころまたしき人に死わかれなしけるが。かゝる愁のものに沈み。さこそつとめのつらからめと。そいろにあはれをもよほせしが。目さめたりと志るならば。嘔氣の毒に思ふべしと。ぬぶりしふりに夜も志らみ。升や來れば帯引まめ。ことばすくなに別るれば。衣ぬ／＼おしき瀬川が風情。合點ゆかざる事共なり。うらはむだ花。若者やりて。新ぞう山ぶきの床花。衣くわんくわつのさすが東の大通に。わかりかねたる瀬川がふるまい。うらも初會もかはらねば。今よいかざりの三會め。高天が原にあらねども。よものかみ／＼寄集り。風りうの遊をつくし。その興いともふか／＼りまが。入相のかねにはなはちらねども。ひけ四ツのかねに人はちつて。煮花にさめぬ酒の志ひ。五郷は床に入るよりはやく。せうたいもなく打ふしぬ瀬川もしへおきなんし。よくねなんすといひながら聞ぬいき。またも位牌を取出し。めい木くゆらす卓のうへ。くりかへしよむふもんぼん。第廿五日の夜は。とりわけ逮夜となれば。山鳥の尾のなが／＼しき。ゑこの内に五郷がぐつさめ。瀬川とはつと打おどろき。とう明志めし位牌をかくし。

の外。見さげはてたるせうわるもの。夫のかほよにたものが。ほかにもあつたらそれにもほれるか。とばかりわすもけがらわしい。ト聞より瀬川たんすより。まもりがたなを取いだし。思ひつめてぬきはなす。五郷はとびあきいだきとめ五郷何ゆゑにまがいのだ瀬川何故とばかりはきこへませぬ。たとへ似たかほあればとて。顔やかたちにはれられうか。だんくのちなさげに。ふつと迷ひし私しがこころ。ぎりもちぎよくも打わすれ。道にそむきしばちあたり。思ひのまゝにはぢしめられ。何めんぼくにいきられませう五郷さほどにおもふこころなら。改めてまんどらみようか。トいはれて瀬川は守刀を取なをし。小指をきりし切くちにて。きせうの文字もあざやかに。生ては室を同じ。死ては穴をおなじうせんと。二世の誓をなしにけり。

第三

夫より五郷は雪のあした。あめの夕のいとひなく。片ときあわねば三ツ秋の。たがひにおもひをかこち志に。月日をふせく關守なければ。暮にし年もあら玉の。松にかいやく初もん日。瀬川か其日の出立には。黒びろうどの打かけに。程よくぬひし銀糸の八重菊。ふじ色あゆすをうらとなし。これには金糸のみだれ菊。きつきはぬいなきあさきあゆす。裏にはきんく

べたぬいの車ぎく。その下に重ねしは。五ツ同じき白あゆすむく。うらも表も一様に。金糸銀糸のすそもよふ。或は野菊九りん菊。黄菊白菊かむる菊。そのいろくの菊づくし。一ト足毎にひるがへる。帯はもへたつせうくひ。これにはりん菊をほどよくぬわせ。柳のこしをかいやかせ。きよらかなるみどりのちすむは。大たぶさのつくぬ志まだ。白き元結を二ツまはし。ちよつとむすんで。もきどにゆひきり。たいまいのくしかうがい。松ばうつせみことじのかんざし。あるひはこくもち。かひなりあしのは。數もかぎらずさしかさす。ゆきをあざむく。かよはき足には。緋びろうどの。ぼうばなをの朱ぬりの高きこま下駄はいて四尺のき折の。ながえをさしせ。ついのかむろに。新ぞう八人皆一やうの。はでいせう。まばゆくもまた目ざましく。茶屋の家内もおしなべて。たいこげいしやにいたるまで。裏菊の紋のそら志きせ。これぞ淵明がいにしへを。またへるにもあらず。五郷が。かへもんうら菊なるゆゑなるべし。かく風流によそほひなし。瀬川は茶屋に待居たり。五郷は元日二日の禮もそこくにして。三日の夕ぐれにぜんごに大ぜいのかみを志たがへ。大門に入來る新ぞうあいらんへあそこへ。五郷さんがきなんしたといふに皆々いでむかへ。中にもちや屋のかしていしゆ。初はるを志ゆくす廓のたみたち。五郷がつれしたいこのぶんでつ。これはきつい菊づくしだ。コレハ瀬川様どふいふ御志ゆこうで。ござります。瀬川わらひながら。私しは。きく

がすきでありいすぶん鱈あやまりましたと。あたまをさげる 大勢「やんや。これはおまやう一ツ志めませうやちよん」ト人さし指でさみせん箱をたたく。取かへ引かへ着吸物呑こともやゝ志ばらく。是より松田やへともなへば。ぜんなるかな瀬川が風りう床にかけし一ぢくは周文の畫たる終南山のはるの色一角の花いけには。梅と柳を折入る歌書たんす香道具。其外きたいの茶きのかずかぞふるにいとまあらず。燈下にならぶはいゆう朱儒。山彦が三絃は雲にひいき。あざしの松風はかりうが琴のねにかよふ。らん志う。かどうが妙音には九郎助いなりもかんじ玉ふらん。淨るりおはればこれより福引。先一ばんにあたりしは。きのじや喜助おかざき米五拾俵。かどさきせましとつみかさね。二番にはかむろの志げは。大すりこぎをとりあてゝ二かい中をのめらす。三番に。すいふる桶。これにあたりしあんなのりやうたい。にわか薬湯のおもひ付。四ばんに大豆五拾俵。御へいかつぎの。此家の亭主。四ばんくしを氣にかけしが五拾俵の豆にあたり。鬼はほか客はこちへの豆志やうばい。家内もまめに子供らまで。豆で大この持遊と。くちあいいふてさがりける。五番にいもじのひぢりめん。大この喜八にあたる。六番のめばかりづきんは。新ぞう花づるこれをとる 喜八「花鶴さん。おまへの頭巾と此いもじとどりかへてくんなんし 花鶴「イ、エわつちも頭巾が。いりいす喜八「何女のに其頭巾が加ぶられるものだに。きこへたそのづきんでかゝの

をあげる。つもりだな。そんならかしやせう。其かわりに。此いもじをたつた一どおまへ。志めてくれなさい。なぜといふな。そこを頭巾に志て。かぶりたい花づる「そんなむだをいゝなんすから。せんどもかしてふられなんしたぞやアねいかへ。うきふね「花鶴さんは。頭巾かへ。島のすけさんはとつくりをとりなんしたよね衣「おや松風さんはさしやい。道具にあたりなんしたト。どつゝとわらふ大さわぎ。其ほかまき炭。下駄からかさはふき。八丈縮緬。どうざんおもひゝに。取あてゝ。二かいに夜市のごとくなり。廊中の遊は。此夜はこゝにつくせり進鼓退金の例にまかせ。八ツのかねを相圖として。みなくさつとぢんを引。あどは瀬川が戀の志がらみせきとめられし。五郷がねすがた。越王西施が浣沙のむつごと。二世三世とはいせのなだ千ひろもゝひろ床のうみ。まくらが物をいふならばいさとはんもゝ千鳥。夜もまらゝとふる雪に。三日三夜ぶちながす。當頭儀兵衛は兼てより。たくみのほそを。養母にあわせ。これ幸ひとくるわより。にわか五郷を呼び寄せしが。養母のふきやうといゝたてゝ。竹もんの下やしきへ。志ばしの内と移しける。こゝにあつまるともがらは。通りのみばへ子分子かた。其ほかげいしや大こ持。三座の役者はやしまち。或は志ゆしやいしやはいかいし。入かはりゝ酒の志たみで。池をなま。肴のほねで山をつく。ほうらつものゝかくれさと。こゝにまじはらざる人あれば。かへ名してさとゝよぶ。山ざとの人といふ心な

るにや。類をもつてあつまる友。所の名さへ竹もんの。虎にはあらぬぞらむすこ。今はたれにかはゝからん。雨降よべも風吹く朝も。通ひはたせしちやゝさん用。かしこやこゝにせがむもうしの今は昔に引かへて。松田やもせかれつゝ。ある夜の志ゆびはふしみ町。ちよとたのんであげや町。人目を志のぶ茶やのうち。ひとかたならぬ物入も。今は瀬川がひとりのやりくり。さなきだに傾城はないしよせつなきものなるに。猶いやまさる質のかず。やる種もなき五郷が志がなさ。悪事千里と養母番頭またも相談志めしあひ。ざしきろうを。ひそかに志つらひ。養母病氣といつわつて五郷を呼寄。くらまされに此牢獄へだましけれ。戸を締きつて錠きびしく。格子のすきより食事をはこび。見る目いぶせきありさまなり。股脛耳目とよばれたる。かん兵衛物吉兵助も。皆つけのぼしになりければ。獨りかんきよの五郷がいんくつ。萬病氣より生ずると。氣ぶん甚だむすぼれて。此二三日は食事もすまらず。形容日く枯槁して。すでにあやうく見えにける。此家のばゝは五郷が血すじのおばなれば。深くもこれをかなしみて。きをはらすならばやまひも治んと後家番とうに。命ごひして。向ヶ岡の志るべの方へ。さすらへのみとなりけり。

第四

瀬川はかくとも白雲の。便りなければ新ぞうに打むかひ。瀬川五きやうさんはどふ志なんしたか。いつそくろふだよ。は山ほうくがふざりだともひなんして。それでおほかたきなんすまいの風そんならちよとたよりでも。志なんしそなもんでありいす。は山おいらんへ。どふぞ五きやうさんのほうくといよふに。はらつておあげなんし。いつそくろふでありいす。せ川みんながよくそなにやさしくいつてくれなんす。私しもあんどいていすが。相談をするよふな客人はなし。きがきじやアありいせぬの風もしおいらんへアノ伊勢屋の御亭さんがたのみなんした。桐山さんとやらは。かねをかしなんすがせうばいとやらいすから。客人にしてかりて御ろうじませ。せ川野風さんと志た事が。其人は目が見へぬじやアないかへの風目が見へい志ないどつて。それにかまひなんす事はありいすまい。かねさへかしなんすど。よふありいすはな。は山おいらんへよしなんしそれ志やア中の町で。がいぶんがわるうありいす。うきはしは山さんのいゝなんすもむりでもありいすまいが。おいらんへどう志なんすも。五きやうさんのためだともひなんして。おいやでもありいせうが。野風さんのいゝなんす通りにして。おくなんしといふ所へ。伊勢やのてい志ゆ来て。うきはしを呼出しいせやせんぞお咄し申た桐山さまといふが。瀬川様のところへあがりたいた。たつてのお頼みで。迷わくいたします。目こそみへぬぞ官位の高い御醫者だから。ちつとも外聞のわるい

事はござりませぬ。どふぞ此わけを瀬川さんへ。よつく御咄しなさつて下さりませ。うきはし
 しばらく志あんして、うきはし「おいらんはなんといへなんせうか志れいしねいが。まアつれ
 てきて見なんし、いせや」それでもつれ申して来たときに。間違ができちやアうきはし「そんなに
 ねどひ志なんしたら。できる事も出来いすまい、いせや」そんならつれ申てめいりやす。なんで
 もおまへ御頼み申やすト。よろこんでゆく、うきはし「おいらんへ。わつちやアぬしのお志かり
 なんすとをいししたせ川「なんだへうきはし」今アノ伊勢やの御亭さんがきて。きり山さんとや
 らの事を頼みなんすから。つれてきなんしと挨拶志てやりいした。松山「よく志なんしたそれ
 はおいらんへきしなんしても。得心志なんすこつちやアありいすめい。モシおいらんへ。な
 んぼうおいやでも。今さらいやといへなんすと。うき橋さんもちいすまへしハテ金さへ
 おかりなんしたら。あとぢアどふともなりいせう。マアつもつても御ろうじいし。五きやう
 さんの爲だとおもひなんしたら。どんなこつても。なぜなりいしねいかへトよつてたかつて異
 見する所へ。伊せやは志きに桐山を先立て。かみ大ぜいはしどばた〜。元來この大志
 んは。ひどかね高利をあつむれば。わかるがごとき金のいづみ。實さかつている時は。さか
 つて仕ふざしきのさわぎ。志よく臺の火はかゝやけども。やみをかゝぐる目なし鳥。されど
 も氣がるな此大じん桐山「なぜこんな金があるやら。やれ〜かね持も太儀なもんだ。おら

アもふいやだそソレやりてもよべ。若ものもみんなよべ。ヨシ〜〜〜そのめ〜ト
 小判のみぞれ小粒の雨。はなのお江戸のくわんくわつ大じん。歌もいやだぶんどもいやだ。子
 供狂言をき〜たい〜と。よぶよりはやきひしやの子供。これより狂言の初まりちよん〜
 〜〜。野風はきり山がほうをゆびさしての風「ぬしにあの志よさをひとめ^{トいつてくちきり山}
 「いんやあらアその所作より。太夫が顔をひとめみたい。ほんのみれどもみへずとはおれがと
 だトいふ内に。はやひけ四ツのひやう志木に。かみは皆〜歸りける。きり山大じんはく〜
 り頭巾にやにさがり。床の上に大あぐら。むせうに手ばかり打ならず。志んぞう共どもなひ
 來ては山「もし〜。おいらんは今つかへがこりい志たから。わつちらがまいりいした。なん
 ぞおもしろい咄しでも。おきかせなんしきり山「癩はよつほどの事か。は山「おこりいすど。き
 つくありいす。そしてめつたにやアおさまりいせぬ。きり山「ハテこまつたものだ。おれがはり
 をしてやろふかの風「ぬしやアそのはりがきらひでござりいすきり山「そんなら。此藥を酒でと
 いてむなさきへつけてやりなの風「こりやアなんでありいす〜きり山「いわみぎん山のむみや
 ういだは山「そりや鼠とり藥じやアありいせぬか〜きり山「成ほどねづにとる客にもい〜は山「す
 かやあがみいすによ^{ト志んぞう共はなす内もはや}きり山「瀬川はどふだ。ちつともい〜か。みて來
 てくれろ^{トいふ所へうきふ}野風さん。おいらんはまだよくありいせん。どふ志いせうく^{れかけきたり}

ろふでありいすの風「あんぞなんすな。もうおつしけ納まる時分でありいすきり山てまへは中くかうまやだ。醫者になればいすの風」ばかりまうありいす。それでも持病だからていげいは。まれいすものを。とやかくしてある内にも茶やむかひもこず。ごうはらにふせうくと歸りける。それよりも此の大じん杖にまかせてかよひまが。ある夜のこと瀨川にむかひきり山「コレおれがこれ程きをもむに。ヤレせんきだのかつけたのだ。一度の帯もどかぬとはそりや聞へぬぞ」瀨川の君せ川「たどへ。うそにもわたしがやうなもの。そのやうにいづてくれなんすは。どふやら嬉しいやうでもあれど。わたしやばからまゐい事をまゐして。ぬしにかざらすどの客へも。とくにどかれぬ結帯。今ぢやア後悔致しますきり山「今どき帯をどかぬ女郎はめづらまゐ。その譯きゝたい。まてくどふぞやせ川「なんぼう聞たがりなんしても。あんまりばからしくつて。はなされいせぬきり山「聞にも及ばぬまぶへのまんどらう。それがまたなせ後悔だせ川「其まぶがまぶで通ればよけれども。今では互にあいそがつきて。心のゑんはきりいしたが。書て渡した起證の中に。外のきやくへは肌ふれじと。神くさんへちかひした。ちしほのけがれがおそろまうおさんすきり山「ヤあつまやつたり。かたいなくたどへにさへ傾城の千まいぎせうせ川「外のおかたはまらぬ共。そらせいもんをするやうな。此瀨川とおもひなんすか。どふぞせいしを取もどし。きせうほどきをまゐしたならば。ハテそのときはどう

なりともきり山「そう思ふ心なら。なぜ取りかへしてきせうはほどかぬせ川「サア取かへすはやすけれど。そうする時はこつちからもかへさにやアならぬ物がありいす。それもかへさず得手勝手も。きり山「かへす物とは金の事か。ソレくそれがかたい。女郎にかして取やつもなものである。今の世は首のどぶかねでさへかへさぬ中に。馬鹿りちぎな者もある者だ。それも生れつきだせうとがない。そして借りた金はいくらだせ川「たしか百兩とまた五十兩かでありいしたきり山「そんなら。おれがかしてやるから。金をかへして起請とおつとれどかねをなげ出し。起請ほどきをした上は。のつびきはさせないぞせ川「疑がひなんすな。くどうありいすきり山「そんなら。はやくたぐりかへせ。またあさつての晩にくるぞ。みんながさらはだど立歸る。あとによりあふまんどうどもまはし「早く此金を。五きやうさんに渡して。ほうくの拂を志なんすやうに。まどふごさんす。それにつけてもどこにいなんすことか。なしもつぶても志なんせんは山「竹もんのうちを。なぜままいなんしたやら。どこを尋ねさせてもまれいせぬといすはなせ川「此ごろゆめみがるくつて。どうもきにかゝるから。あしたほういんさんに。みてもらつてくんなんしとあんじる瀨川が志んせつも。せつなる戀ぢの習ひなるべし。かゝるそいろの折からに。金でまやくばる一客あり。秋にあらねどきり山大盡。戀にまなこもくらまへを。かやうも九そん十どくの。ほうろく頭巾まゆも杖。つくく物をあんず

るに。瀬川がふるまい心ならず。今夜はなんでもばけあらはさんと。よみせの鈴をきつかけに。登る二かいのはしごより。のぼりつめたるきり山大じんきり山「今夜は坐敷をつとめずとも。みんながはやく歸れ〜トかみものこらずおつかへす。酒をもそこ〜。さがりいすの聲。まわす床。大じんのはやふどんのうへ桐山「せ川はどこにいたるのだせ川」こゝにいすはな。きくなんし。その起請をまだかへしいせぬから。また多を書いてやりいすが。なんといつてやりいせうへきり山もどしてももどさないでも。五きやうとそなたの其中は。起請誓詞でうたがいはらす。かり染めなわけではあるまいがなせ川「エ、トあどろくきり山」ハテあどろく事はない。おれが目無いかわりには。廊の内へめみを入れて。何もかも知てある。おれがやつたあの金も。五きやうにやつてつかわせるつもりであらふが。コレあのべらぼうめもな。こげと番頭が。ちくくりあひの。やちもちをやきやあがつて。さしきろうへほいこめられ。くたばりかゝつた大病で。むりにいなかへぼつこくられたが。おほかた今ごろは寂滅爲樂のはたてんがいで。地獄で色事ひるぐであんべいせ川「それはほんのことでありいすかへきり山」「おれも桐山うそをつかふかト。聞よりさてはとむねに釘。はつと思へどさすがはせ川「あのまア。きり山さんとまた事が。いろ〜の事をいつて氣を引なんす。五郷さんの事も。ねつから形のない事でもありいせぬが。今ぞヤアさつぱりと。きれてしまいいしたものを。それだか

らどんな事をいしなんしても。ねつから氣にヤアかゝりいせぬよ。そしてわつちがきれてから。五きやうさんところやすく志なんす。女郎しがありいすが今いしなんすやうな事があつたら。その女郎衆のほうへさたでもありいせうにきり山外に念頃な女郎といふも。外ではないやつぱりぬしさ。夫にあいつがかみどもは。のこらずつけのぼせをくらつてしまひ。友だちめらが尋ていつても。留主の病氣のといつて。とりつぎもせぬ者を。それで便りが何あるものだ。おれはまたどうして志つたか。五きやうめがぼつこくられたところは。おれが家來の軍次が在所だから。あなのあなまでト聞いて。瀬川はとどろくむね。人をやつてもよふすも志れず。便りのないをうらんであたに。それがほんならなんとせうと。あろ〜してせ川「其軍次さんの在所は。なんといふ所だへきり山」そりやそろ〜ときた山志ぐれ。あいつが在所を尋るは。やつぱり五きやうをたづぬるのだ。ぬしはつゝむとあも〜ども。志せんとくるふ五音のてうし。ほかのきやくは化すとも。此きり山はア、つがもないせ川「そふ思ひなんすのはうたぐりなんす氣のまよひ。きれて志まつた五きやうさん。誰にでも聞いてみなんしきり山」だれに聞ても。まぶだといふはせ川「そりやアきれぬまへ」とさ。よくむりばかりいなんすきり山「そんなら。なぜ帯はとかぬせ川」起請ほどきも。志いしないではきり山「ばちがたるといふ事か。ばちもならくもいとわぬが。此みちのいきぢやないかせ川」そのいきぢもぬ

しの氣も。まだ志れもせぬ内からはきり山「己がこゝろを疑ふならば。さつぱりと身請をせう。せ川おどろく桐山」わたりかゝつた此せ川。あさかろうがふかゝろうが。金といふ舟いかだ。さかさ水をながしてみせう。それはやく茶やを呼べト聲のまたより茶屋伊勢屋とび來つて。あたまをさぐればきり山「おれは歸へつて金をよこす。千兩でも二千兩でも。瀬川を請て連れてこい。さらばトみえにちやんとひく。となりざしきの歌につれ。道をいそいで歸りける。後に瀬川はさつとばかり。ちいにくたくるむねの内せ川」それにつけてもうらめしい。あんまりな五きやうさん。ついに一十度の便りも聞せず。あんじて死といふ事か。そりやどふよくじやなさない。むりなみうけの此なんぎ。とひだんかうもこんなとき。頼みにおもふかひもなふ。どこに何していなすやら。思へばく此せ川は。能く親のばちあたり。神や佛にみはなされ。あるにあらぬ憂なんぎ。今亦身うけせられては。五きやうさんへ道もたはず。せめて死ぬる。身のいゝわけト。思つめたる一ト間をあけ。うきはしはそばにより。もしおいらんへ。身うけの事も何もかも。一ト間でみんなきゝいして。ないてばかりおりいしたと。なみだをぬぐひ。こんなときは。いつそ志んで志まはふと。おもひなんすきもでなんすまいものでもありいせぬが。ぬしの身一ツなら。それでもすみせうが。五きやうさんのたねをやどしなんした其からだ。はやまりなんして。どの命で五きやうさんにあひなんす。桐

山さんの御家來が。五きやうさんのいなす所を。志つたといふ手がゝりあるに。うろたへたと志なんして。人にわらわれなんせうかど。それがかなしふおぞんす。なんぼうわつちらがよふなものいふとでも。わるいとはかりもありいすまい。聞わけてくれなんしせ川「たのもしい事よく氣をつけてくれなんした。わたしや氣がうるたへて。すでに死のふと志いしたに。志んみのいけんを聞からは。五きやうさんに今一度。あい見るまでは此からだ。どんなうきめもいとひや志いせぬうきはし」それでわつちも。おちつきいゝした。サアきばらしに酒でもちつと。おあがりなんしといふうち。茶屋はきり山より金受取。瀬川のみ代九百兩に。諸事の入用五百兩。つごふあわして千四百兩にて。根引の一件相すめば。茶屋のはたらき内志やうのよろこび。志るも志らぬも瀬川さま。ほんの千兩箱の玉のこしと。其よろこびに引かへて。せ川はなみだせきあへず。志んぞうをよびあつめせ川「わたしやモテ請出されていきいすから。みんながまめでつとめなんし。たやさずきうをすへなんして。身養生を能志なんし。かならずわづらひなんすなへ。それにつけても五きやうさんが。もとのやうで居なんして。身請でも志なんすなら。おまへ方もよかるうに。世話にばかりなりいして。たんとくろふをかけいして。わたしが着ものもくしかんざしも残らずみんなにやりいすから。いゝよふにわけなんし。半ぶさんにあいなしたら。委細のこを。頼みいすト。いゝもあへぬに伊勢やの

てい志ゆが。サアおはやうとせりたつれば。かごに乗るより志がみつぎ。なくこそを志らせじと。たもとを口におしあてる。はをくい志ばり身をふるわし。せきくるなみだをのみこみく。馴し廓をあどになす。王昭君が其昔。夷狄の單子におくられて。えんしの月をなげきしも。おなじ思ひと志られたり。

第 五

桐山は瀬川をうけ出し。我が者としてくどけども。虚病の床にふりつけられて。一度のはしもこころみず。いよくもがくお家の志つこさ。ともぞむらひ軍次には。きびしく五きやうがありかを口どめ。瀬川がそばをどをさけしが。かねてでだての瀬川が氣に入り。きり山があるすなれば軍次はそばへさしよつて軍次「もしおまへさまは。志んから旦那をおきらひなされますかせ川」きらふくらいで請出されてこよふかへ軍次「もしおく様。是程おめをかけ下さるわしたしに。なぜお心をおかれます。御身の大事になるとを申やうな。けちなやろうでもござりませぬ。おまへもまたつがむない。むきみのひたひをぬきあげたよふな。あんなばうずといつせうつきあふつもりかへ。それにあんなにわづらつてゐる。五きやうさんへおとづれもなさらぬとは。あんまりせうがござりませぬぞへせ川」こなたの所在とやらに。ほんにその五き

やうさんとやらはいなんすかへ軍次「やらとはどふだ。ちくせうめなせわつちにかくしなさる。またおまへもこころにおいでなすつて。いかに志せうがないとつて。かねはわきもの。その氣つめにかへられるものか。もしわづらつて死でも志たらどふ志なさる。ゆめで暮す世の中に。去りとはわるいおもひ付た。たどへ水をくみ。手なべをさげても。思ふ男とおもしろくくらしたら。それほどたのしみなどは御ざりやすまい世川「こりやおかしい。旦那と一ツになつてこなたまで。私しが氣を引て見るのかへ。人のおもふよふでもない。つらにいくいともたしかくれば。ぐんじは小ゆびのつめをはなし。これでもわしをお疑ひなされますかせ川」どふゆふえんか其方の志んせつ。そんならどふぞつれ立て。五きやうさんにあふてだてはぐんじ「サアその手だては。おまへと志志な半ぶどのが。あすは上方へのぼるうわさ。そのいとまごひに行ふりで。道からずいとわたしが案ない。志めし合する折からにお歸りといふこゑに。ぐんじは勝手へにげまりぞく桐山歸ればせ川「けふはおはやうありいした。エレさんやおちやをあげや。松やばうさんをよんで。お足をもまじや。そしてもし旦那へ。アノむかふの半ぶさんが。あしたかみへのぼりなんすから。ちよどあいたいとつて文が参りました。わつちもけふはちつとは心ようありいすから。ちよつといとまごひを志いせんじやア。きがすみいせぬまり世川「ハテちよふほふな病だ。今朝まで死にづら志れたものが。もふあるかれるよふに

なつたかせ川そんなによくもありいせぬが。ついむかうだから。さんがかたによりかゝつても。いかれそうなものでありいすからさきり山たどへいかれるとても。やみほふけた其さまで。ひとのみるめもあるものだ。よしやれく。おれも今から。又おやしきへいかにやならぬ。ナニとも志たくはいかた。すいかけしきせるをはたき。またもやしきへ出にけり。きり山は兼てより。せ川がにげんと世のとりさた。ぜんびやうもあるものと。やうじんきびしく。大の坊主を三四人つけおいて。ちよつとてうずゆくにさへ。件の坊主を右左。たもとをどらへはなさねば。のがれがたなき折からに。むこふの半婦が琴のねに。せ川がたもとも引ならば。なぞきれざらんとこのひとふしに。坊主がどらへしたもとをふりきり。足にまかせてにげ出れば。軍治はあとよりおつかけるふせいにみせて。やうくおひつき。鎌倉河岸より駕籠をとり。いそげば程のふやうがのくぼか二旦那壹盃のましねんし。さつきからやつとこらへてめいりやしたぐん上「さきへいつてのませらアいそいで下されか二のまねいでいそがれるもので御ざりやすか。そんならかご代をくんねんしぐん上「サアく壹貫の所がだ壹分やるか二こりやアなんで御ざりやす。夜かごでござりやす。おらしなさりやすなぐん上「サそれではいさなしの一貫トきめたじやアねいかか二「おまへもやばなとをいひなさるこれがマア志らない人でものせやアままいし。はて一貫のきめなら百貫百かんならとちまんぐわん。てい

げい割のきまつたもんだ。仲間のやつらが。あとからついてくるを。のみこんでやりやした。あいづらにもませにやアなりやせぬ。ちつと氣をきかせてくんなんしなぐん上「壹分のうへア五文もならぬ。これそんなゆすりでいくのじやアねへよ志やれか二「コレナかつたるい。志やれなさるな。なんぼつよみをでなあつても。此かごをでんどへかつきだしたらな。ぼろくみぼうくみ「むだアねい。かつぎかへしてちよびるべい。この内より二兩あたへ。せ川「これでのみなんして。かごをいそいでくれなんしか二こりやアあんまりたんちんだが。おまへのよこしよふがきれいだから。おとなしくもらつてやりやす。コレあつたまるやうにもらひやうも志つているが。それもばらだ。あつたら仕事をやすく志たサアあねさんあいでいきなぐん上「さきまではやくやらぬいか。こりやアどふするのだか二「べらぼうめ。こゝ迄来たが。おほきな事だは。たわとをつくとあまさけだぞ。たれだとおもふい。きんこしむらさきひげといふかごかきだは。志りやアがらぬいか。はなつたら志めサアぼうぐみ。あいべく。トせ川をひこりより花うたにぐん上「どろぼうめ。地獄を見せるやつらたが。折がありなら志かたがねい。志かし。これからわたしが在所も。ついちかふ御ざります。ちつとおひろいなされやし。またおくたびれなさつたら。おふい申やせうせ川「かごにゆられた故か。だいぶんこゝろわるくなりいした。ちよつとあるいて見いせうと。たどる所も大くらばら。草花々たる大野にして。北は武

藏野南は玉川。ゆきしぞたへて晝さへも。さも物すこき所なるに。目さすも知らぬ志んのみみ。千草にすだくむしの音と。そら吹くかせを聞のみに。あゆみならわぬうき旅も。戀しき人にあふうれしさに。いつか程なく玉川の。松原にこそさしかれせ川私しや志きりに腰がかぶつてきいしたぐん上「おまへ。こいらでうみなさつちやア。どふもならぬがせ川なアに。五きやうさんにあふまでは。氣を志めている程に。きづかひに志なんすな。志かし久しぶり。五きやうさんにあふと思へば。あんまりの嬉しさに。氣がわくく志てあゆみにくい。アノさきもちつとだといやつてから。もふよつばどきたやうだが。これからぬしの居なんす所へは。どれほどあるぐん上「おれも知らぬが。たいがい二三十里か。四五十里もさせ川此方もマアいたづらな。こんなこわい所へきて。おどしてみる事はないぐん上「おどしはせぬ。能きくな。おれがおまへを日頃から。大事にかけたはなんの爲だへ。コレつめまではなして。志んぢうみせたよ。いやでもおしでも女房ども。コレやぼめくぐん上「おれも知らぬが。コレつめまではなして。うさんにあわせるといやつたは。みんなうそかへぐん上「志れた事。こなたをつり出す。はかりごとだト開てはつこはおもへごもだせ川「それがほんなら嬉しいが。此子を志ゆびよくうみおとし。ぬしに渡した上からは。ハテどふなりと心まかせぐん上「イヤそこまではまあるまい。そのちよちよらもふるし。色事はたんべいきう。だらくどくはきらひな男。とくしんならず

に女房。いやとおしやると志めころす。舌のかへるが生死のさかへ。いやおふの返事を志なさいせ川「イヤ、いやではないが。そりやそなたあんまりであらふぞへ。五きやうさんにあふた上は。ころすなりと女ぼうになりと。勝手次第にならふ程に。はやうあわせて。これおがわぐん上「五きやうくとのたまへど。あのべらぼうめは。あとの月。のたれ死にくたばつて。七本とうばになつて志まつたせ川「そりやそなた。ほんの事かぐん上「墓まゐりして疑ひはらしなトいふにせ川はどふわくして。大地にどうとたをれしが。身のてんどうに子がへりして。玉のよふなる男子をうみおとせしが。身心のうらん折なれば。血暈とて血の道あがり。せ川は。惜しや十七の。花の盛も玉川の。夜の嵐に吹ちりて。此松原の露霜と。きえてはかなくなりけり。強悪無常の桐山軍次。せ川が死がいへ手をさしこみ。懐中せし一つのみ。ほね折ちんは此金と。帯と腹との間にぼつこみ。せ川が死がいとみどり子を。むざんなるかな玉川の。うづまく水へさらひこみ。あと志らなみとなりけり。

瀬川が一念

武藏野の向岡に名も高き。ますかみ山といひけるは。きり岸俄々として岩石をばだち。玉川のながれは麓をめぐる。みわたせば平蕪渺茫として。すべて天外につらなる。東には青

海原。西を望めば富士淺間。かうべをめぐらせば蒼々と山つらなつて。波濤のごとし。此の山の形方にして。升のかたちのごとくなれば。ますかゝみ山をあやまりて。升方山とよびならし。此山さらに外物のひく事なく。風色また天外の賞なるべし。五きやうはこゝに浮世を遁れ。秋にさびある虫の音の。切々たるにきをすまし。月にうそぶき。香をたき。琵琶かきならず折こそあれ。俄にそらもかきくもり。そよ吹きよする風につれ。萩の折戸をおどづるは。なまめいたる女の聲にて。五きやうさん。こゝあけてくんなんし。トほのかに聞こゆびわ五きやう「人りんたへし此みねへ。まんやにおよび女のこゑ。きつね狸の所爲なるや。かゝみにてらして姿を見やうかせ川」そんなものぢやあざんせぬ。私じやわいな 五きやう「ヤ、そのぢやとはせ川」瀬川であざんすわいな 五きやう「ア、其瀬川が深夜といひどふしてこゝまでせ川」ふもとの人にきいてきいした 五きやう「ハテよく尋てきた事じやな。そしてあのしの。其だいてあやるはせ川」アイ此子はぬしと私しが。浮中に。もうけいまた子でありいす 五郷「コレやい。其子までなすほどのぢりをすてゝ。あがないおれと。見かぎつて。わりやよくきり山とやらに請出されたな。おれはうぬに引かわり。さまざまのうきなんぢ。わづらつて死ぬ所をやらしくと。此ふもとにて養生なす。其内にもア、あの瀬川めは。さぞあんにて居るであらう。互に便もといかぬ身の上。うらんでもあをろうかど。此ふもとへくるやいな。そうく廊へ

人をやつて。やうすを聞ば。そのせ川はきり山とやらに請出され。ごぼうのやうな尾を振て。きのふ廊をでつたど。きいた時のおれが氣は。どのやうにあらふとおもふ。おのれにほれてそふいふ心は。あるまいと思ひしに。あいそも興もつきはてた。むねんのなみだをこぼしたわい。此身は親の不興を請て。此所に世をのがれ。雲を友とす心にも。おのれをみるとはらがたつと。たぶさをとつてひきよせて。たゝいづぶんづらみのこぶし。せ川はなみだにくれながら。わけまりなんせん上からは。いちづにおもひなんすのも尤ものやうなれど。段々の其わけは。神や佛のよく御ぞんじ。むりな身請のうきなんぢ。あのゝものゝとまざらして。一度の帯はときやしいせぬ。身請せられし折からも。とひ談合をする人も。なくく廊を受出され。死る命をながらへしも。どぶぞ此世で今一度。あふて顔みて此子を渡し。修羅の妄執はらし度。一念ばかりできたはいな。また此やゝはくる道で。やうく産おとし。死ぬる所をかいほうして。つれてこゝまでくる内も。並たいていや大方の。なんぢなこつちやござんせん。ういとつらいとかなしいと。一トあしづゝにふみませて。やうくと來たものを。あふて嬉しい顔見せもあんまりむごい其おことば。わたしやかなしいかなしふあざんす五郷「なんだかむせうにかなしがる。コレ其涙ももふふるい。なんぼ其やうに無理の身請の。ヤ帯とかぬのと口かしくぬかしても。ツツや身うけされたりやきり山が女房。こりやヤイ

つたへ聞く三うらの高尾は。むりな身請にいきむをたて。三ツまたでさげきりになつたのは。
 傾城貞女のかいみと。今の上までもいふではないか。猫におとつたおのれが魂。一時もはや
 く立てうせろせ川「イエ〜わたしやアノおまへの女房。起請誓紙が互の證據。またきり山が
 むりの身請も。はだけがさぬがみのいひわけ。まぬる命をながらへた。おなかにやどしたお
 まへのたねを。産でみたいが山〜で。いきていたゆゑ此はむしめ。あやまりのない私ごと
 しろ。おまへはなぜそのやうにむりといふむりいゝなんす。そりやあんまりで御ざんせう。
 うたがひはらしてたつた一言。女房といふてくれなんし。それがこの世のいとまごひ。未來
 のみやげコレ申かけて頼むは此子がと。せいじんするにまたがつて。嘸わんばくをまかせう
 から。あさなゆうなも側はなさず。手ならひ學文せいださせ。おまへにも孝行な。かあいら
 しいと。よの人にほめさせてくれなんし。アノおまんまがすぎいと。脾胃虚とやらをしい
 すとやら。かならず〜そんなわづらひを。させてはしくんなんすな。あしげな人と友なら
 ば。麻の中なるよもぎうを。教へてやつてくれなんしと。なみだをふいて。ほんにわたしと
 また事が。ぬしに如才もあるかのやうに。くど〜いふには及ばぬと。かあいゝ子ゆゑのや
 みじやもの。ぐちをまかつてくれなんすな。ト子ないだき。コレばうや。そなたがほんの母志らさ。
 おつ付おほきうなつたとき。友だちの子の其は〜に。あまやるのをみやつても。うらんでた

もんなや。そなたをそだてるかゝさんを。おしより百ばい大せつに。末のすえまで孝行つく
 しやア。他人氣など。だしやるといふと。冥土とやらから此母が。かんとふをまますぞや。
 とはいふものゝこれがまア。なんともみすて〜いなりやうぞ。あじきないは此みどり子。名残
 おしいは五きやうさん。またも浮世へでなんしたら。秋の千草のいろ〜に。うつろいやす
 き人心。其あだ色のたのしみを。草紙のかげからみるやうな。事があつたらなんとせう。い
 つまでも此所に浮世をのがれてくんなんし。わたしが忌日をひよとして。思ひ出してもくれ
 なんしたら。おまへの口から一遍の。ゑかうの聲が冥土のたのしみ。巫山のむかしにあらぬ
 ども。朝たの雲夕べの雨を。わたしと思ふてくれなんし。遠寺の鐘に「はやうしみつのかねのこ
 ゑ。あれ〜閻王の使まげければ。語るも問もかなわぬかや。こはらしの牛頭馬頭や。ア、
 おそろしの炎の車。名残りはつきおさらば。トいふかと思へば一おんの五きやうはあわてゝやれま
 て女房。何國へやろうぞはなたうぞ。うらんだはおれがあやまり。かへせもどれ。ト物くるわし
 られて立たりしが亂る。扱は瀬川は死去て。幽魂こゝに尋きて。此みどり子をわたせしか。ト子なだき
 ら心か氣海におさめ。扱は瀬川は死去て。幽魂こゝに尋きて。此みどり子をわたせしか。ト子なだき
 まも。今うみおとせし此うぶ子。ふしぎといはふか奇妙といはふか。非ごうのさいごはなさゝ
 るやト。まばしまろんでなげきしが。伐木空谷に倒して。さらに鳥雀のねぐらをおどろかし。
 旭日潮とも生して。まづ數峰のぞくをてらす。こゝは名にあふますかゝみ。亂れし妾取

なほし。手水むすんで口すしぎ。名香たむくる井花水。北にむかひて手をこまぬき。瀬川幽魂頓生佛果と。まばし念してなみだをはらひ。産子をいだきふもとに下り。まるべのかたへあづけ侍りき。

やほに示す傳授の事

〇新造やりて若者。此面く心に付べし。兎角端をよくすれば。志せんと女郎も能者。また極りきらぬ内端より。悪さまにとりなす時は。女郎の情も失ふ事あるもの。〇色男はせくべからず。まかしせかぬも情のなきやうなれば。不男か。おやまか。けちなやらうをせいて見すべし。色男はせくと。女郎の心あじになりて。つひに變化またがる者。〇傾城はもちろん。新造。其外に至るまで。兎角口ぎたなくいふべからず。ちよつと用をいふにも。うれしがるやうに遣べし。〇兎角かみを引つれべし。〇床花はたとへ少しなりとも。はやくやるべし。三會目といへど。おほかた。うらにやるがよし。初め三四度の内は。間をぬかず遣ついでゆくやうに心懸べし。勘當の身。叔父かゝりなぞといはい。何につけても利方よく。亦けいせい情おこるすじもあるべし。〇口中身たしなみ第一の事。去ながら薄化粧匂ひ袋の類ひは。大の御めんよ。〇いやみらしきと。けしきばふ事。同断〇みへほう大のきんもつ〇すべて。まつこきかたよからず。まか

し内まんに情ある風情を合べし。〇物ごと大やうにして。さしいのことにかゝはるべからず。〇色またてなぞなら。其夜すが。たがひに寝るやうなどにては。いかぬ事。〇かみどもにうわさのいはせやういろく有べし。〇一ツたい愛敬ありてさつぱりと。いやがる事氣に當る事をいふべからず。なれども。手づよききみよし何ぞはらを立て見る事ありて。其女郎をそしるにも。なんぼうらぬがきりやうがいしとてなど。さきのきにうれしがるやうなせりふにて。あくたいもいふべし。〇雷子が狂言のごとく。諸事こまかにきを付べし。〇かりにもけちな事を。いはざるやうに心かくべし。〇其傾城の氣をさつし。それくのきいにあふやうに。つきあふべし。

廓言葉

チヨイトサ金澤さんお聞なんしたか。もめが出来ているそふぎますが。かうなりんしたがお聞なんしたか金澤。どなたと思たら奥州さんごますね。いし所へきなました。マアおはいんなまし。徳さんと長さんの事は。わたしもうすく聞んしたが。全躰徳さんも。少は手扱もあんなすそうごますけれど。それはまだおぼこごますから。無理もありんせん。長さんも少しの事をとつこにとつて。いろくの難題をいひかけて。こまらすそうごます奥州長さんも年がひもない。いしかげんにしますすがよふごます。夫に徳さんの親ごたちからは。色々世話になりん志

た事も。あるそうぞます金澤、奥州さん。主はなんと思ひなんすかまがりんせんけれど。わちきや
つら／＼考へて見やしたが。なんでも是は太鼓持の一橋さんの細工ぞますとさ。あの人がみん
な色々の中口を聞なんすそふぞます。にくらまうぞんす。夫に徳さんの本店が上方にあるとさ
奥州、夫にわちきもきいておりんすが。其上方の本店のわるい番頭さんたちと。一橋さんはらを
合せ。なんでも徳さんの越度を見ては。大旦那にいつけて是非徳さんを勘當でもさつしやるや
うに。色々と讒訴をいふそうぞます。金澤、何をそふなに彼是いはれなんす事もありんすまいに
奥州、ナアニ金澤さん主も志つていなます通り。又さんを徳さんがこゝろ安く志なんすもんだか
らさ。あんな女郎衆を内へ入なんす氣も。ありんすまいけれど。先から無理に起請迄。取替を
志なん志たそうだから。今更志よふもないのに。いやになつたから。なんでも人情でそふも出
來いすまい。夫を上方の大旦那がなんでも。互に切れてまへとおつまやつて。そうして徳さ
んがわるいからだ無理計り。年が若といひながら。少しは腹も立いん志たそうぞます。ばか
／＼しいとこんな□す内居るても志て(此處數語讀べからず)氣まめに暮すほうがいといふき
で。本丸屋の家をゆづる氣になりん志たぞます。其替りに内の御新造さんをば。上方へ返すと
いひなましたもんだから。さすがに上方の大旦那も氣がつかしつたと見えて。志きりに若隠居
を止めなんしたそうぞます。そふして是から萬端徳さんに任せて。内のをさまるやうに志ろと。

いふつげがあつたと聞んした金澤、チヤそれじやア。無徳さんも安心さつしやるだろふ。およば
ずながら。うれしうぞます。モシわちきや迎も座敷の御客さま。そばから少し御あんにてをり
いした。ほんにおもはず長咄しをいたしいした。おやかまうあすと。我身は只にてもかへり
んせう。

當世虎の巻終

寒紅丑の日待

序

寒紅丑日待上册

五四

京極黃門卿小倉の山莊に在て百人一首の詠歌を
 撰たまふ予繪入百人一首を閲て百人女藤の品定
 を擇むかの紫媛が源氏名を竈の前の阿三どんに
 なづけこれが戯作の談柄とし清女の枕の策子に
 倣ひいみじき事をいきにして眞世話のとりくみ。
 狂言綺語の戯を三佛乗の因縁とすこやつは一番
 鳥が啼あづまつ子に持て來いと勢女がものがた

りに本づきいせもの見せんと云爾。

時

文化丙子孟春題于鹽濱別邸一圓窓下

振鷺亭主人



をむすぶといふころにて。丑と名づけて十二月にあてたり。易にとつては良の卦にて。萬物のをはりをなすところにて。又始をなす所なり。時は夜八ツの刻。これ大陰のきはめにて。一陽きざすはじめなれば。此時一心に觀念すれば。一生の身の上を志るとさらに疑ひなしとて。坐敷の中央に壇をかざり廿四行の供物。廿四の燈明。十二本の幣をたて。四種の名香をたき。丑の神の秘法を行ひける。六十人の女中達は身をきよめ。坐敷の四方にならび。無言の行にて。燈明のきゆるに志たがひ。一心に念じてあたりしが。既に丑みつすぐるころおいに。いづれも身のうへの行末ありくと見えたるこそ不思議なり。

〔花の宴〕 おもしろい事

先源氏の花の宴によせて。名をもお花といひし女中は。容色すぐれ。その身もきれうぶまんにて。美男ならでもつまじとの心願。親里もそうおうなりしが。てゝ親なくなり。母おやは酢にもさかまほにも娘一疋たのしみに。わづかの賃仕事してくらしけるが。おもしろも三月宿ありの逗留。せわやきばいふは。日の出の志ん志よう大學屋できれうさへよくば里にはかまはぬ。十六七の嫁がほしいとの事。見合は芝居でまたいとの好み。息子の氣にさへいれば。かさまもうかみあがるといふもの。なんと芝居へやらぬかとのすゝめ。おふくろは志ん志ようの

よいが耳より。お花は又芝居見るがうれしさに。つい見逢の約束かれこれ通じ。女形の青髭。ぬれ事師の沙面の穴までかぞえるには。前土間のちかいがよいと。三人舞臺まへに割込。こゝでは水仕合があると廷をかぶらねばならぬがど。着物をあんゑるばかりなり。かの大學屋の息子論五郎の棧敷は。東の二階太夫の三四とかりきり。實も大盡風と見ゆるこしらえにて。牽頭藝者などひきつれ。幕のうち何かおほきに志やれながら。毛氈によりかゝり。こなたの落間を志ろりくと見おろす。媒人は「ソレ」お花さんいつそ此方を見るはなお花「わたくし志やアいつそ顔がてか」いたす。トはなみのかへかほをいれて。ば「此子はや。うつむくこたアね」氣のよゑへ。おもいれ見てやんな。おふくろ「ドレ」おらもたつてよく見てやらう。ヤレほんにいゝ息子だ。先第一鼻すぢがどをつて色白で。そしてまぢりが上ツてりこうそうだの。とんと半七になつた役者にせうだば「役者はつくつてゐるからだ。木地素顔でほんにいゝ男といふのだおふくろ」なるほどさうよ。年はかうと二十一二でもあらうか。いかにしても人がらがいい。いひぶんなし。どふもいえねへ若旦那だ。イヨ親はないかおやツかな土瓶をひつくりかへしたば「ソレお花さん立な裾がぬれるは。お花」わたくしやアいやあつかさんとんだことをおしだよいかな事おふくろ「いゝ氣な。あつかさまがうかれけるやつさアハ、「ちやはよしかな」「おこしまんちうよしかな」お花半七道行新上るり狂言の繪はん番づけ。さうき道「アイおべんさう。おせま

からうに高土間にすればよかつたチイ。志かしもうひとまぐさば「このつぎはなんだへさつき番
 「お花半七の道行さおふくろ」半七が道行かこらアよからう〜「おめいよつほど半七がお氣に
 いつたの おふくろ」いつたどころか。志かしさきじやアなんとおもつてゐるやらどふもくらうだ
 ば「あんまり噂を志なさんな。くしやみをしてひよつと風でもひくとわりい おふくろ」ハ、ど
 うまはつてもくらうしようだよ。酒でものみやしよう。モシおめへちつとよこしてくんない
 き番「瀧水に蛇の目ずしといふとこがよからう子ば「ナニサ志かけたつぶりのものがい、はな
 さつき番」どかく志るけがなくツちやアはじまりやせんチイト云すておふくろ「サア〜ばあさんおべ
 んどうにしなば「ヤレ〜こりやア六阿彌陀まありこのかたの奢だのう。サア〜お花さんマ
 アおまへおあがり 花「ハイトおしゑいのはしきしから。ぞうげに銀のふくりんをかけたばしをいだば「どん
 だおちんじようだなう。ハア、きこへたおむこさまが見てござるからか。なんのかまうこたあ
 ねへ。志こたまたべなせい。さういつても。婚禮した當座ははづかしいやうなもので。おまん
 まもくゑねへものよ。それが後にやアおはぐるくさくなつて。汗かけめしぎく〜。夜着のな
 かでおならをするやうになると。おあいそずかしだ 花「チャ〜おかしなおばさんだよチホ、
 おりからまくの「孟子問四丁目大學屋論五郎さまお宿より急用〜ば「チャ大學屋論五郎とはアノ
 賢さまのことたが「いふうちか論五郎は。の〜おしやう おふくろ「アレ〜かへるそうだ。急になんの

用ができたらうらば「かゑつてもい、はな。今朝から見たり見られたりしたら。御不足はある
 めいノウお花さん。おめへも狂言を見やうとしたり。棧敷を見やうとしたり。たいていなこつ
 ちやアねへ 花「アレ又おばさんなにおつしやいますいつそあつていよ トはながみてぬきもんのむれ
 見まはすうち。まくのあなから目と鼻ばかり出して。のおふくろ「今の役者の半七ではないかば「たしかに
 そいて見るをお花見あはすのほさかほ。きつくりすれば 花「もう幕があこうかねへ。いつそ手水に
 あれば賢さんだよ手をたたく音「パタ〜〜〜 花「おはらもつとはしより上であいび
 まありたくなつたよ おふくろ「よくいろいろいな事をいふ子だ。いくならもつとはしより上であいび
 なせい。ソレかたまたへさかりだ。糸真田はどけるものだよ志つかりしめな。エ、イいくぢのね
 へ。帯をしめてやる後をむきな。繻袴のゑりをもつとぬきだせはい。よしかつむりを氣をつ
 けたり。ソレおこそぎきん。ヤレ〜せわのやけるこつた トむすめのことをして。ちようづにゆく。ほご
 ようし水カツチ〜。お花はまくあくが心せき。東のあゆみへかれば。いつきがけのなんトよにて。おしあひへしあひ。
 茶やおまへはこぼれものをさしあげて立すくばり。おこしまんちううりはかたあし。けんぶつのかたへつツこんでつめりあ
 げられ。あさへもさきへもまわりでんぼう「イヨウ大和屋ア、引〜 いくつしたけんぶつ「ワア、イ引〜るやう
 にはやしたてる。お花はすでにおしころばされて。あゆみからおちかゝる所を。だきさ ます「マアわたしはさきへ
 める人あつて手をさり。よふ〜あゆみをわたしてくる。此人は半の頭廿四五の ます「マアわたしはさきへ
 おはいんなせいし おふくろ「さやうならちつとおをきなすつてくださりまし。ヤレ〜志には
 れにあつた。おツかない事 花「あちたらどふしようと思つて。わたくしやア泣出しそふであり
 ましたよ おふくろ「さうよ。それでもてうどよく此旦那がだきとめてくだすつたで。命びろひを

した。芭、ホソニおまへさんありがたふござります。何さおまへ。入のある芝居はこんなものサ。連がまちがつて今までめいらず。此小ぢよくひとりでさびしいから。先からいれもふさうとおもひやしたが。御遠慮もふした。モシそつちのおばさんも。こつちへおはいんなせいで。ば、あでもよぶござりますかへ。あなたトませたまたき。とんだはいりいじやくろ口だ。おふくろ。としよりのくせにしやれなさるのば。としよりだどつてしやれざらにさ。チイあなた。又あなたのめへだが御縁がなくてあつかましいはいられるものか。チイあなたむす。さやう大きに。なにも御縁さば。チヤ世事のい。旦那ヲホ、トそらわ。留場「旦那いらつ志やいまして。一ツのまつし。トいふゆゑ土間へはいり。さつきもたしむす。志つかりへいるの。留「二番目が出てからばり。いたします。隣がいた。ききましたからむす。時にアノ東のにかいの三四にあつた見物は。とんだい。男の。ずぶ半七といふものだ。此見物は。大あばたのよつぼ。留「ナニサいや身が。あ。おまへさん半七の役まはりをつけると。氣ぐれいのい。お花は。さきまようちします。むす。「むまぐいふせ。此あばたつつら。だるまやみ。づくが金主になるだらう。ば。「中村少長をおめにかけたかつた。地顔では大あばたで舞臺へ出ると。ぬれ事しの名人といふは。少長。留「少長よりみりんがよかるう。ば。「役者もだ。いふなくなりましたよ。ホソニ八百藏がなくなつた時は。女中衆が墓参で。大さわぎさ。留「おめへも寺めいりを。またらうのば。「参つた所か。かつこ

む氣でいつたが。穴がねへからよしにした。留「おきやあがんなせいで。イヤ又ほんに男のよかつたは。門之介さ。留「門之介は。いて。まりは。しよりは。どふだ。ば。「それから今の親坂三津がなくなる。イヤほんに上手なものは。坂三津さ。留「坂三津は。どうに。をくふものだらう。それから。して。ば。「それから前の佛がなくなる。し。留「それから。ば。「こんどは。おれが。番だ。ホイ。これは。またり。留「おめい。それ。から見物は。志ねへ。か。ば。「宗十郎までは。志つて。いやす。近頃。なくなつた。源之介は。だ。い。ぶ。女が。引ました。ツけが。おしい。事を。志や。した。子も。上手。といふ。ので。あつた。そ。ふ。だ。留「親も。上手。子も。上手。の。入道。さ。き。の。かん。ば。く。大。じ。よう。大。じん。イヤ。こ。いつ。は。たい。へん。に。わ。る。し。ば。「おつつけ。ま。つて。ゆく。骸。だ。から。源之介は。極。樂。へ。いつて。見。ま。せ。う。は。留「お。め。い。いつ。志。ま。つて。い。き。な。さ。る。ば。「お。ほ。か。た。盆。前。か。暮。さ。留「こ。いつ。は。ひ。ど。い。首。で。も。や。る。き。か。ば。「チ。ア。ニ。ひ。や。め。し。の。と。き。む。す。ハ。ハ。む。だ。ば。つ。か。り。お。ふ。く。ろ。さん。お。一。ツ。あ。げ。や。し。よ。う。お。ふ。く。ろ。お。盆。を。か。へ。わ。た。く。し。ど。も。さ。つ。き。あ。つ。ら。へ。つ。か。は。し。ま。し。た。が。なん。ぞ。お。肴。が。ま。あ。れ。ば。い。が。へ。う。ら。茶。屋。の。男。あ。つ。ら。へ。さ。か。の。たい。めん。を。も。つ。て。き。たり。し。が。ま。せ。を。ふ。み。は。づ。し。て。ご。つ。さ。り。お。つ。こ。ち。たい。めん。は。お。花。が。や。の。す。び。の。お。び。の。う。へ。に。ぶ。ち。ま。け。に。し。る。は。だ。く。そこ。ら。ち。う。に。う。め。ん。だ。ら。け。さ。な。り。座。敷。へ。送。さ。ば。つ。ち。り。り。り。大。さ。は。ぎ。さ。な。花。チ。ヤ。く。此。人。わ。や。わ。つ。ち。や。あ。い。や。ど。う。し。よ。う。の。う。お。ふ。く。ろ。ヤ。レ。帯。を。と。き。ナ。ソ。レ。志。み。る。は。コ。レ。ぞ。つ。ふ。り。だ。ば。「チ。く。く。志。こ。た。ま。か。け。た。は。イヤ。は。や。に。が。く。しい。事。を。志。で。か。し。した。は。茶。や。男。ホ。イ。こ。れ。は。し。た。り。留「ほ。い。所。じ。や。あ。ね。へ。ら。ぼ。う。な。男。だ。む。す。たい。へん。を。志。で。か。し

たは。そさうな男だ茶や男「へいこれは志たりホイこれはしたりトいひすてむす〜 おふくろ」せつかくあなたにあげやうとおもつた着は此どふり。おどしきまでだいなしにいたし。はらがたつて〜どふしたらよかろう 花「おつかさんいつそかなしいよば〜」なせよ 花「此帯はせつかくお部屋親さまが加してくだされた物を。こんなにつたり志みができては。どんなに鹿末に志たかど。アノむづかしいお〜やあやさまへ。わたくしやアどうもいひわけがないよトなみたむす〜」せううけたまはればいよ〜お氣のどく。トいつたばかりで帯の志みがぬけも志まい。さしあつてのさんだんは。今の幕にお花が志めて出た帯も厚板てうど同じ折形。何とこれをかりて間にあわせはどうでございす 花「左様なります事ならば。明日おやしきへもあがられ。殊にお〜や親さまは御ひいきのやくしやなればいよ〜わけ所か。それこそいつそもふあよろこびむす〜」それなれば事が志やすい。此譯を樂屋へいつてたのんでもらふ 留「御ぞんじの太夫さん。おまへの事なら志きしようち木カッチさむす〜」ぬかるな 留「がつてんだト志り七五三には志より。お花の志き上るりの口上すむさ。花道より兩人の出。本ふたいへきたり志き事いり〜ありて。くごきになる。お花半七道 半七「人をあやめた身の上なれば志なねばならぬ此の半七そなたは是より立かへりわがなきあを志ふてたもおはな」わたしひとりか〜れとはどうよくでござんすわいなア半七さん上り」お花涙の顔ふりあげてそもやふたりがそのなかはお代まのりの堀のうちおそつさんのおなかうどついなれそめた

とかいな 茶や男「これがきれるとはねますからお傘をもつてまゐりましたむす〜」そんなにふるかの 茶や男「おほきにふつてまゐりましたト聞て三人はおふくろ」どうだろうふつてきたとよば〜」いくじやあねへのうおいらあぞん〜」ばしより。男ばしよりにでもするがぶぶ濡じやア此子がのうおふくろ」たま〜」芝居がとんださいなん後生も志れたむす〜」おまへがた御遠方ではおこまりだろふが雨具ぐらゐはどうともなりやしようは 所へ 留「まんまと志ゆびよく手に入ましたむす〜」帯がまゐつたサア〜」おしめかへなせいし 花「これは〜」ホンニおありがたいと申さふかいつそもふうれしうてわたくしやあまへさん〜」どふもお禮の申あげやうがないよト申すこの顔をにらみ「まづ今日はこれぎり茶やへつれゆき。ぜんぶさま〜」お花へはあんばつをいひつけ。ふたりに番傘二おふくろ」なにかのお禮を申にもあなたの宿はむす〜」その番がさになるしてあるいり本かしければ 花「志み〜」お禮はわすれませぬト見せさきからば〜」はかほさしいれ〜」二階さじき〜やまがたに大の字さ 花「志み〜」お禮はわすれませぬト見せさきからば〜」はかほさしいれ〜」二階さじき〜の返事はどうしなさる 花「いやわたくしやあアノいもがほのお方ならば〜」おめいゆききか花「アイば〜」あんなふけいきなあばたつつらに 花「志んじつほんにば〜」チヤあきれけいらあ

かこのもの「おかごあげますどつこと志よ。かくて此か山の手さしていそぎ。孟子町四丁目大學屋論五郎が内けんくわんにかおるせは。お花はあきれてもばも出す。三々九ごうはばらしなかうごば〜」むす〜」こんなわからぬともあるまい。實は大學屋論五郎といふはおさめる間。お花夢かさばかりなり

此あばたがとにて。すなはちこれが住宅。二かいさじきにわた論五郎は役者の半七が志ろうとのこしらへにて。此あばたが身がはりにいはいそぞろ。皆そもじの氣をひき。あたつてみた狂言。片見合に傍でどつくり見物した此無男が實の論五郎。譯は是迄二十人ばかり見合したれど。みな女からことばはられ男の外聞たちがたくどふぞと思ふ一趣向。あへやあやからあびをかりられた事まで媒人ばしからよく聞しり。厚板の帯女形のお花におくり。志めてもらつた衣装づけ。あつらへのなりものもんきりがたさて又留場棧敷番茶屋の男が鯛麵を帯にかけたも。わざと志させたまないひあはせの狂言。アノ人ごみのあゆみにて抱かはしたが縁の橋。志んじつのおもいれといき。のつびきさせぬトあししいれ。此つらつきであつ板の。帯うちとけてもらひたさ。かけたる志るのめでたいめん。ハテめづらしいたいめんじやナアお花うけたまわつてさつぱりどいたしました。二階さじきの論五郎さまとやらは。男玄まんでうはきそふな。あんなお人につれそふて。當坐はよくともあきらられて。つまらぬ事やと。男はよいがいやになり。思ふにあなたの御志んせつ。むすんだ帯のお心いきまどにうれしうござりました。かならず見すていくださりますなど。チホ、わたくしやあつしいれをいたしました。見し丑待のありさまを。おはなし申上げれば。奥さま聞給ひ。さやうの縁談ならば勝手次第いとまつかはすべし。男のぞみのお花が。無男へよめいるといふも。まことに因縁。イヤモおもしろひ事であつた。

〔關屋〕 くちあし事

扱お小性よりつとめし關屋の親桐壺源次兵衛は。元正しき侍なりしが。ゆゑありて浪人し。お家流の手跡指南して暮すうち。關屋も十六の春お館をさがりしが表町の質屋の番頭圍ひたき杯いひいれしを。源次兵衛大に立腹しいかに困窮すればとて。武士たる者の娘をあなどり。ぶしつけ至極なやつと。もつてのほかの挨拶しけり。然るに又質屋利左衛門が内儀洗湯にて關屋を見こみ。きれうもよくおとなしき生れつき。嫁にしてもはづかしからぬ人から。仕度は此方からと。媒人をもつていひいれしが。源次兵衛さきには番頭が不禮をどがめ。今またその家へよめらすは義にあらざと。唯なにとなくとわりいへば。人に人をかけて懇望するにぞ。源治兵衛もたしがたくやうやく相談におよびしが利左衛門が方にては。さすが外聞なればと。仕度金として百兩送りしを。偏屈の源治兵衛いかなく受ず。さやうの義ならばとて破談になりかゝるを利左衛門が内儀あやまるやうにして。ないまようから關屋の母へおくり。やつと納得して。日柄をまつばかりになり。母親のお糸は針めどのホンニやれぞれたいほぞいそがしきけふは廿五日の休日にて。天神こうをもつてきた。こまじや おしやべり懸お關さんはお屋敷で模様物はたくさくれたむすめ。またてものい。ふき。つま。なごを見ながら。おしやべり懸お關さんはお屋敷で模様物はたくさんおもちだから。やばからぬものばかりおこしらへだよ。ほんにおうれしかるふチイおけんつう

娘「いつそあらやましいよ 女房おい」常の心ざしかたましく。女の道明らかならざると女今川にある通り女は心をすなをもつてもねたみをせぬものさ。おまへがたもお關が様に。押付かたづくのじやが。夫を大切にまましやうぞおしやべり「おましようさんのおつしやつたは。ほんに女子はいつしように。夫といふはたゞひとり。お半長右衛門の道行にもございますねいおけんつう「わたくしらあ一生をつとは飲ないよおしやべり「チャ／＼夫がのまれるかへ。此お子は蛇だそうだおけんつう「それでもアノ酒のどをおつとも申ますおしやべり「わたくしらあ。お關さんのよふに。髪はいひえず。きれうはわるし。はなつびしやけだから。をつとはもちませんおけんつう「よしおまへ。糠袋をおつかひの時。よつばどかほがながくおなりだよおしやべり「おたふくでもよいよ。うつちやつておき。おまへも白粉をおつけの時。ほつべたをおたゞきだどよいばどへこんで見へるよ。おけんつう「アイサ左様さ。おまへは丸の字ばかり一日書てお出だから。漆かきをていしゆにもちだろふ。おしやべり「わつちやあいやよ。お前は杖つきの字ばかりお上手だからあんなはりへおよめいりだろふおせき「此の子たちはすきなことをおいひだよおけんつう「お關さん。コレ／＼へあいでないか。チョット手のひらをおだしおせき「チャ／＼めめずでさつぱりよめないよ。おけんつう「アノ湯へお出でないかともふす事おせき「チャ／＼それならばかう書ものさ。そはにあるはんきりにいて見せかきかけを筆のさやてき。おしやべり「あぶない事をおしだ

よアノ子女郎のふみはきれないよふにと巻紙を唾でさばくとさ。書おきや切女は筆のかさできるだろふ子イ。おけんつう「アノ綱手車をひくと縁がきれるといふから。わつちやあならはないよ。おしやべり「わつちやあ。いつち氣が／＼りなは三のいとのきれか／＼つたのさおい「いやよ此子たちやあ。何をはなすかと思へば。きれ／＼と。縁談のあるとこではないものさおしやべり「ハイこんどから申ませんこれざり。おけんつう「ソレこれざりとはいひでない。チャわつちやあ垢摺のきれをわすれてまゐつたおしやべり「それ又きれとはいひだおせき「おつかさん。いつまよ湯へまゐつてもよいかへおい「おのまやあよしや。指をきつたに。ホイきるではなかつたおせき「それでもあの明日から。水切だと申しますからおい「そんならゆきやれぞやが。その筈はおい「ゆきな。とられるとおしい。いつそ斑がきれいでいから。ホイ切てはならぬ。娘兩人「お師匠さんハイ明日「つれだち出しおせき「どふまやつたおせき「ツイはなをきりました〇角大師湯番を志かる御姿とは男湯の様躰。女湯は作者も栢榴口の奥は志らねど。べちやくちや。くちやべちやと云こゑ。げに姦といふ字の如し。おせきはさすが手習師匠の娘とて。面をいの字なりにあらひ。膚をちらし書にみがかくもうつくしき。ふたりのおてんばむすめは。ぎやうさんにひつこすり。ながしやつておでつちにゆかたをもたせて入湯。おせきはやがてしうさめなれば。なにやらこぼれゆく。ふるの中にて入らひ。そこ／＼にめてあがる。内義は又我子のよめよ。見ぬふりして。手足にむくげのないこまでよく見とけ。湯くみかすへる定紋のこめ桶。小ぞふがはこぶ小桶の水ないき「おんばや。おんば「ハイ／＼ないき「おらアそさうな。ふるの中へ箒を

おどしたよ。たしか内からさしてきたのう おんば「ハイ」さしてお出なすつたとも。モシその
 お筈は ト小聲になり。アノ手ならひしよの娘御がふるのうちに おまへさんさ入りかふさき。そつこぬいて手ぬぐひに
 んほうのばらいせき。一口なめた。口わりのおんばをたのみしが。おんば今ふるの中で内義のかんざしをそつこぬきさり。ぬ
 かぶくるをさるつらでおかへあがり。おせきがたんでおいた。着物のたも おんば「そのお子やちつとお待せき」ハ
 イ私かへ おんば「ハイおまへさ。おまへ袂へいれて。もつてお出でのものを。こつちへおかへし
 おせき」エ、イ何をへおんば「筈をさ。わつちらが御志んぞさんの筈を。今湯の中でおめいはいきちげ
 いて。出なすつたぞやあねへかおせき」此おんばさんは。おつなとをいひなさる。筈とやら。は
 きちがいた覺はござりません おんば「覺がねへはもすさまじい。おそろしいむすめつ子だ。たつ
 た今湯の中で。ぬく所をわつちが見てゐたは。その袂にあらア出しな。出さねへと。まつばだ
 かにして。ひつふるうよおせき」あらためてないときは。おまへもおわるし。わたくしもおはづ
 かしい おんば「へいおはづかしいとかあ虫がくつていらあ。こんなふてらつこいものにかまつて
 あると。風をひかあ。いけずう／＼しい。ぬぎな トいやがるおせきがおび引ほごき。わざとそる おんば「此
 のおべんべらは。めつたにさはられもしねへ。おあいきはなんだはぎつこうか。ヤレ／＼かゝさ
 まの御たんせいだ。そらこそ筈が おせきはびつくりせきめんし。どうしてこい おんば「どなた
 もコレ御ろうじやし十五兩出た本鼈甲。手ならひぞしよの娘子には。ちとすぎもの。育がらが

貧乏なれば。親の恥まであらはすは。お里が トそまできこへるやうに 忘れておきのどくやヲホ、いふ。湯いりの女どもたち
 か、かア「すばやい子だのう。せんども此湯屋で。かぢやのかみさんが。志ろちりめんのも
 じを取れたが。ゆだんのならねへ。ぶつそふなこつた又一人が「わつちも此湯で糠袋をどられや
 したが。いくぢがねいから鼠にひかれたらうと。内で志かりやしたが。おほかたこの子がひい
 たのだらうば「アヤレ／＼」どろすけは此子かよ。ヲヤ／＼いゝ子だに。手くせがあつちやア。
 嫁にもらひてはあるまい親もいんぐわだ おしやべり「わつちらあ。あすから手習にはまゐらない
 よ。お手がながいから おけんつう「おいらもさがるよ。どろすけさまといつしよはいや。あさき
 へまゐる おんば「あんまりつらがにくい。番頭さん見せしめに。はい炭を顔へおんなすつてたゝ
 き出してくんないないき」おんばや。もうよいかげんにしや。いとしなげな おせき「はつ トなきたを
 してめりやす 五大力「たどへせかれてほどふるともえんとおせつ 質屋の内義はかへるやいな。の末を待 利左衛門にはなせば。見て來
 た通りのきすむすめ。と湯やでのもなれば。ばつこせぬうちばやくへんがえすべし。まかし仔細はいはすに。みくしわ
 いさか。なんさかきのたいぬやうに。ゑんきつてまゐるべしさいひつけしな。番頭三八くだんのこひのいしゆがへし。あすま
 したり心によるこび。まつかり手代が 桐廬源次兵衛「これは／＼よふこそお出。さてなにかとおせわくだ
 たきをやつつけるきで。くるこはまらず
 され。先あらかたまたくもとのひ。大慶いたす三八「イヤその仕度はマアやめてもらひましょ
 別義でもないお闇がづんどわるい。イヤモとつとえらうおきのどくなこつちやが。變がへに參
 つたぞや トきより源次兵衛さては水をさしたる者あり おいさ「まぎはに成て闇があるいの。なんのとは。

じがけなき災難御座候て自害いたし相はて申候其譯委しく申あげたく候へども細く申あげ候
 てはお歎きのうへお腹だちをかさね候様なる事故いさめには申上ず候もどより覺なき事に候へ
 ば申ひらきも有べきに御まかりもあらせられ候はんなれど其折から申譯もなく殊の外外聞を
 うしなひ候て死る程の事に候へば能々の事と思召被下り候とさまには支度金御もどし被
 成候半と被仰候へ共まづ敷中に御とゝのへなされ候様もなしと憚ながら御さつしあげ候まゝ私
 首をへ出すを引取り利左衛門「ナニ私首を質屋方へ御持遊し御申譯被下り候へば左様候へば犬死にも
 なり申間敷哉と存じ候私なき跡にてはさだめし世間の評判御耳に入り候はんなれど武家たる者
 の恥を忘れ申間敷と存つめ候てまみくちおしくは候へ共相果候儘不孝は御ゆるしあそばし
 被下り候へばかやうになりはて候とも思召ず御かゝさまいかふ御よろこびの中へ御歎を掛候は
 さだめし御持病の御しやくつよくおこらせられ候半かど夫のみ心にかゝり候へばまゝくれ
 も前の世のやくそく事とおぼしめし御あきらめあそばしかならず候御歎き被下まじく候たい
 たい逆さまなる御回向夫のみ悲しく存じ上り候とて書つくされぬ御名残に候へば御いとま
 こひばかりに申あげ候へども

御とももし様

せき

寒紅丑日待上册 終

御かもし様

トよみもをばらす利左衛門ふうぶぎようてんするさころへ。湯やのばんさうないにてあひにきたりしは。おんばごのふる
 からかんざしをもつて出。ましようさまの娘御の小袖のたもさへいれるをこく見うけし。これにはお内にやうす
 ざらふさぞんす。わざさひかへ。湯ばんのやくめなればおつけ申すさいふを。利左衛門きいて。いりこむもの。善惡にこ
 をつけ。ぬるいあついのかげんもまる。湯やのばんさうにはおしきものなりさて。みせのまはいにんにたのみ。番頭三八おん
 ばはすぐにい。さておせきが正道明白なれば。人の口へ戸をたてるため。すぐにそのまゝひきどり
 さまを出しぬ。わざど世間へばつとすするやうに。婚禮ぶるまひを花やかたにいたし。湯屋の番頭は又まとの白
 ねずみにて。家内むつましく繁昌いたしますと。みし丑まちの首尾ちくいちおはなし申あげけ
 れば。奥さまおふせに。いつたんよごれた身のあかも。湯ばんにみぎ出されしは。もどが正
 直ゆゑ神佛の御助。さもなくばそれはく。くちおしい事であるふに。

がありそうもないもの。ばからしうおざんすぢい「あにばかだとアイサ〜おんらア。どしやあよつても。やつべしばかさ。おすのおざんすのといふこたあ。此年になるがしりましぬい。あかしつくりいものいづぶしだが。在所はどこだんべいおさら「たしか北國とやら。あいらんどやらさぢい「アニおらんた。ハアチャどうりで唐人の寐言だとおもつたアハ、しもけたふなばんばあこいつもおわわんで。さぶろくをひつかけなばい「あヤレ〜はあ遠くからござつたに。むげつちけぬい。いたましいから。なみだをおつこさして。こんだあ。まつちろなあしやらくさただあに。鹽水におつびて。濱砂でおつこすつたら。まつくろにならつしやるべいモノおめい八本べい。み〜つくぢりぼうを。蛸の足のやうに。おつさしてござるが。おもたかんべいに。とらつしやればいし花紫こりやああみだざしともうしいすばい「あヤレありがてい。どうりて御光のさすよふだア。あんにしる金目なもんだんべいノヨおさら「こらお籠甲といふもんだアとさ。こらの海にあるしようかくぼう籠のが籠甲になるじやあ。あざらね〜か花紫「チャベつこうも海におよいでいすか〜ぼうす「あるどころか。びんさし油元結も海にあるのさ。びんさしがとれると。七里うかむ。イヤ又油もおよひであるところをどつたやつはかくべつあぶらくさいのさ。元結のびち〜はねるを。はねもつとひといひやすアハ、此坐に又きいたふうな男うすきみわさいたふう「さうものもほんもの。そとわに足のつまで。おるく花紫が手足をおるしたてはよし。か〜さま此老ものならそうだんができやすは〜トいふ此男それしやまはまきに見てこる花紫わが身のうへさすいりやうす

ささられまい「おさら「潮來のきやくじんは酒を参らね〜そうだから。サア〜飯を煮いますべいわきへちらしぢい「チ、飯がよかんべい。みなの衆。椀をさんだいて。あねさまに〜しつけてもつてもらはつせい。かつくらはね〜と佛がうかみ申さぬぼうす「どれ〜献立を見ましよう。稗飯に鯉のひや汁。平が濱猫に海雀これは海にが濱松にうみ蛇。焼物はむくぞう蟹。やかずになまで出したところがさすがりやうした。あらもぶるんの念佛を申ませう。なまだあ〜トおゆすをもつておのみ。まゆしやうらしくなをつくらふ。さていきて来たはあたまをつぶしてひつおさら「こらあはあ。わしがてんがいくるかへしておけば。うごく事ならぬものなり。その大なたなをもつてい。心でお寺さまへあげまさあよぼうす「それは御きどく只今の志なむ蛸薬師なまぐさ如來。飯がたつた十二膳なまだこ。なまがにだんぶつトこちつける所に焼物のむくぞうがに。むく〜花紫「チャ〜お焼物がいだいしんす。こはらしいよぼうす「ばあ焼物の欠落するを見るは今がはじめてたいへん〜半ごろしの焼物。鱈かなま殺冷汁の鯉がかたいきになつておよいでいらア。平から鳥が飛出そうもまれね〜。ヤレ〜〜あんまりぶるんすぎて。人ごろしが出来そうだ。御ひやうばんのばけ物料理はこれでござい。奥はせまいからおあがんなさるな〜ぢい「こりやあはア化物料理といふのか。道理よこはくつて年寄の齒にはあいましぬいばい「あ「チャ此おんぢいさまア。四角ばつたつらアして。うそをつかあ茶の飲ぬいのをけんどうに。うちくらつておいてぢい「アハ、腹がはちきれそうであれたくなつたが。大金の志もごいをこ〜おいてゆくで

もねへ皆の衆いくべいじやアねいか昔々「おらたちも内のせつちんへみやげにしますすべいよ。坊
さんサア／＼たつせいト引立ぼうす」おつとまつたり。きみやうちようらい見えねへ／＼皆々あ
にが見えねへ。たばこ入かぼうす「イヤてんがいが見えねい皆々」アニ蛸のとか。蟹といつしよに
かつばしりやあしねへかトそこらを見まはすぞ。ぜんの下からたこ八本の足でぜんをさしあ。皆々「ひやあバア、
チャアぼうす」ア、ラふしぎや。此づくにうが膳の下いつの間にかはしやつかんで。あらはれ
出たる蛸の入道。なまか。うでたか。あんにもせろ。うつたまげた。ありさまじやなあトばつて
たこをにはへほうり出し。あたまをへしつぶぼうす「こふやつてあづけておけば氣がやすまる。道で芝居を
してそのうへにそばにあるいかりをのせて。ぼうす」こふやつてあづけておけば氣がやすまる。道で芝居を
されて見たがい。ひとりでは大てこずりだ。いかさまアア蛸のあたまのおりたよみのできる
ところは。かうもあろうかトひつこみの狂歌

ふりうりのぶらぢやうちんよたこのあし礎をつけて十二本／＼
皆々「あにをいはつしやるサア、ござりやし。トてんついでいふ身にてござんくさちかいる中にもいたこのきい
ひそばなし。花むらさきは。きいたふう」なる程アノ奉公人なら手をうたふが。アノ女もつとめをしたか
わが身のうへかき立ぎげは。きいたふう」なる程アノ奉公人なら手をうたふが。アノ女もつとめをしたか
らこんなとにはじよせいはあるめい。下手をやつちやアいかねへぞおさら「アニサは急いところ
が。かつばらうが近道。定夜燈のとぼるを相圖に。駕をつらせておし込なせい。あんどんけし
てまつてあやすは。きいたふう」志かしくらやみでは人がしれねいおさら「ハテ七八本さしてゐるかん

ざしだからさぐつてもまれやすは。お金はげんなま。きいたふう「へた念だが。金はどていしにわ
たしやしようおさら」鮫藏は酒やにありやすから御いつしよにサアいさますべいよ。トつれ立ち行く。
みのよふす。めいはくにくきよりも。なんさみもよもあらればこそ。にげ出んとすれど。花茎きけばきくほどあそろ
外からかきかけたれば。しんたいこにきはまりて。なくもなれず立つあつ。花茎きけばきくほどあそろ
しい。しんせつらしく見せかけて。だまされたがくちあしい。モシへ鯛次郎さん。まよふてお
出なさりいしよう。わたくしもそのとき。いつしよに海へはいりいしたら。此思ひはあるま
いもの。せめては初七日まで。だまされて死そこなひ。まみくくやしようござりいす。まだ
そのうへにばからしい。田舎のはてにくらがへされ。なんのいきていよまようかへ。さら／＼
命はあしめいせん。いま自害をいたしすよ。ホンニぬしといもわたくしも。あんまりはかな
い非業の死。よく／＼此世でそれはれぬ縁。未來とやらがたのしみでおざんすにへと。トなきしみつ
し。かくごをきわめ。りやうしのうちにはいかりづなによりをかける。れり。まやたつさいふものあり。これをふみだいに
して。はりのうへにまごきをひつかけ。ひきほごきの穴にかしらなれんさすれども。八本のかんざしひつかければ。さつて
なげすて。すでにくびをくりりかへり。ごつさりおちたるその響。おさらはもごりかいつて。がてんゆがすさかきかれば。つし
はづれ。ふみだいはひつくりかへり。ごつさりおちたるその響。おさらはもごりかいつて。がてんゆがすさかきかれば。つし
内へはいればまつくらがり。はなむらさきにけつますき。びつくりしてつけぎをつけ。みれば花むらさきははんしんしよう。
おりしもそさから戸をほさ。たいくばあいづこ。きのせくなかでもよくばりもの。おちてある八本のかんざし。たゞあ
つらにやるでもないさ。ひろひさるうち戸を又がた。つけぎはきえてくらやみから。のたくり出たるいせん。たゞあ
りくらりさばひまはる。おさらかんざしさぐり手に。ひつさらまへたるたこのあし。花茎が手あし。思へば八本ハレめんよ
ふなごびつくりしながら。又一本二本さかぞへあげ。てうごつがう八本のかんざし。ひろひさつてつむりにさす。そこからは
まぢかれて。ごや／＼おしこみおさらかつむりのかんざしをさぐりあて。まてやつたりとまはりあぐれば。おさらはぎや
つさし。おれではないさいふ口へ。まてこひまかせさるぐつわ。かこにうちこみごつこさな。さぶがごさくにいそきゆく。
此さわきに花茎は心つき。戸のあいてるをさいわいに。そさへ出し。さりちがへて行しなれば。さつてかへす事あらん。や

つたといふこつたてふほんにか。いけふさくしいあまだ おまやべり「わたいは。かういふ氣だ
 が。人の事が苦勞になるよ。ひよつとしたとが出来て見たがい。でい。ちあめいがつまらね
 へ者にならあ。そこがあるからあめいに彼呪咀を申しへたのだホンニ又いたばしの縁切櫃とい
 つちやあ。ためして見ぬいおそろしいのだ。その葉をかくしてのませると。どんなおもふ中。
 縁切櫃をか。したがいよつと。あめいがのむと大らんちきさわざだよハ、てふ「如才はぬいは
 な。内にのませるはなんのさうさもねへが。アノ女にのませるにこまつてる所へ。ソレちようど
 今來たはの。いふとをきしぬい。店賃を勘定志ろとさ。ハイくかしてまりましたと。返事は
 かりはいいの。をはつどんにばなができた一ツのみなどまじていつたら。ハイおありがたふお
 ざいますと。すつかりいつばいのむやつさ。ハ、ハ、いまだにおかしくつてならぬいよおしやべ
 り「ウ、あの女が飲だか。なんにもまらずにのうかわいそふにハ、てふ「ナアニかわいそうな
 ものか。此うへたなつちりのふりやうが氣にくはねへと。とりころしてやらあおしやべり「チヤあ
 つかな。ぜんてへあめへがお心よしだから。下女のさつべいに。ふみつけにするといふものだ

てふ「それだからこゝがもや／＼だはな おしやべり「そふだろうよ。アノ女も山出しのくせに。わる
 くしやれるよ。あつかましいいどふだろうきしぬいきのふもわたいがかうかに居たら。吉さんが路
 次をはいつてきなはるし。アノ女は井戸ばたに米をといで。おさむうございますとわらいか
 けたものだから。吉さんが松飾のくしがきをやりなともいやだね。そいつをいたいて。つづ
 つ口をしてくらふやつさ。その種を又。吉さんが舌なめずりをしてなめたよ。あんまりだのう
 てふ「ホンニカそれをなめたかのよあきれけいらあ。いけばか／＼しいむねツクそのわりいへッハ
 ツトつばをばく所へしみたれたお おやち「アイおでんが二十本。いもだが十二本。おはらひをおもら
 ひまうしやしよてふ「大晦日しま懸どどじやあぬいよ。氣のきかねへ。こつちやあ明店でたいへ
 んができて。氣がきじやアねへよおやち「明店がどふしやしたてふ「エイ、ひつこい人だ内じやあ
 おほかた明店に。ねてあやうもしれぬい。とつ／＼かまへて懸をそんな トきまぐれをいふはしらすお
 明店の戸をあけるさ。大やの下女たくあんをもつて。いちもくさんにかけ出す。ついで吉が出る所をお
 ふはだしてるとへさんで出ていしゆのむなぐらをうなぎのよふについで。内へひきすり込ながらなる てふ「みつけた
 ぞ。がつてんしぬい／＼／＼言べらぼうめ。はなしやあがれ／＼／＼てふ「しんでもはなしやあ
 しぬへ／＼／＼ トかぶりつくやうら。つきさばすやうら。をほちをけさばし。せんわんをふんづぶし。たばこぼんにけつま
 りものいごうしんやぼうすは。せんきがおこり。よくごうしん「あけましてはけつこうな春でございやす言「こ
 れてぬたさこへかべがおちてあかりがさしこむゆゑ
 んべらぼうぼうづめ。まだ宵だア、。たわこをついてけつうさらアがるな たいふにきもをつぶして

どうしん「どろぼうがはいつたア、。 出合であひくトよばはるゆゑ。まづいちばんにかけつけるははななくた彌十しやほのおむこふのりうりばいあおつん。あんまのでかいち。此はかのていしゆた。はななくた彌十「ヒヤア、ひやべをぶつちほ。明地でもちをついてるゆゑ。このやくざものばかりかけつける中にも

こぬいたア、大事おほごとくおほや大屋さまが立あはざあわかるめい。コラマどうしたのだてふはせきでどなたもきいてくんねへ。明店あきたなでたくあんがたくあんだはな。はらがたつてならねへくやしいはなトおほぐるだらひをほうり出はななくた彌十「ひやき店で。ひやくあん。ねつからさつぱりわからぬいはいしやし。まつかになつてなく

ぼん八「明店でたくあんがどうしたと。きもつぶしなでか市くびをひれつてななをひこつせなんだかいつそたくあんくさいぜ。せむ七「此風のあるに。たくあんくさくツちやア心ならへ。明店を見よふかてふ「明店よりやあちらん内の顔かほをどなたも見てくんねへ。せむ七「イヤア吉さんおめいのかわあ。たくあんだらけだ。でたつこにちんすつてあらア。いや大わらひこいつア、わからねへはへてふ「わかつてあらアきいてくんねへ。おらんうちじやあ。とふから大屋のめしたき女に。のろくなつてあらあ。ヨシカチ今女がたくあんを出しにきた所をつけこんで。はなしやつたはなヨシカチ。わたいがいふがわりいかへ言べらぼうづらめたくあんと寝ねやあしめいしてふはせきで寝ねへもすさまじいはへ。顔中かほぢうたくあんだらけになつてゐるがまよふことだよ。まだまやあくまぢくとしてあらあ。いけどうさらしな。つらア見ろ。吉なんだこいつア、ナニたくあんだと。これエイ石いしの枕まくらじやああんめいし。たくあんを抱たいて見て見ろ。ぬかみそにかきまはされ。淺あづけはだな

なら漬つけは。おれがどこへかつこんでくらア。べちやあねへうぬがくちようを見ろ。どぶづけのふる茄子なすときてあらあてふ「なんだと。此たくあんやらうめうめのたけりたてゝこゑつ。おつん「わつちじやあたくあんくといふ事ばつかりきこへるが。このもので茶漬ちやづけとふうふげんくわは。おめへ方かためづらしくもあるめい。おてふさんおそろしい口だ。おはぐるをふいてしまひねへてふ「おつんさんかまひんなな。わつちやアいひぶんがあるによ言こつちにもれうけんがあらあへはななくた彌十「いしはなだまんねへ。おてふさんくちつばたのおひやぐろとふきねへ。吉さんおめいも顔かほのひやくあんをふきねへ。どつちもかつこうがわりいはおつん「澤たくあんがどふしたと。せむ七「たくあんはちやかましようござりましたとよ。みしつどう。つんぼの出でるまくじやあねい。ひつこんであな。時に吉さんたくあんのりけつはどふだ。吉かうよ。アノ女は明店へたくあんを出しにくるし。あらあ餅焚もちたきのまきをとりにきて出合であひたのよ。まやぼん「その出合であひたがあやしいとか。ソレおてふさんがうたぐるをつけて口をまつくろにしたも。尤もつとだ。吉きかつし。じようだんにあはつとんどふだ。けつをつめつたやつよ。まやぼん「ウ、ウあるやつだの。吉いけすかねいとぬかすから。なんだ此ぼたもちめといつたら。女がむきになつて。おれがよこつらア。たくあんでおもふさまくらアしやあがつた。せむ七「アハワハ、なんのともねいこつた。明店にぼた餅ぼたもちはいづれ店にある物だ。明店のたくあんぼたもちの夜の雨あめはきこへるか。ト此ぢぐちちぢぐちにみはくつわらふゆゑあつくなつて

「さへッ」コレあまめうぬがあかげで。ぼた餅だの。たくあんだの。むじつの難をきて。長屋の乗へごうはぢをはたかしやあがらア。けちいめへましい。出てうしやあがれて出でていけもきがつゑいは。吹矢のおたふくウ見るやうに。手がるく出るのじやあねへによ。としの餅も針だこでつきやすは直これエイこつちやあ。鐵棒だこでひきずり餅をつかあへ。ひきぶりのくせにいゝかとおもやあがつててふなんぼかなぼうひきの。にようぼになつたとつて。心までひきずりやあしねへよ直みんなきいてくんねへ。おらんうちのべらぼうと。ひきまどのせいろうぶちは。つんまがつてあるから。寝るとおきるとにおれがせわがやけて。こぢれつたくつてならねへはなこんやさらけ出してしまはアてふ「エイひきまどよりやアへつこのまつこうぶちがきいてあきれらア。どふからはなれかゝつてあらあ。あんまりけんのみをくはせなんなへこつちにも荒神さまがあらアな直荒神がこわけりやア門徒宗になるはへ。うなあよくおれが丁場からけいと晝寐をしてけつかつて。茶もわかさず。水をくんでくれるの。ぬかみそをかきまはしてくれるの。いゝきなとをぬかしやあがるも。こうべいがのろいを見て。氣をよくすりやアつけあがり。ひたいの上へ足代をかけるが。くさびがあめいと。よこそつぼう。をかけやでぶんなぐるぞ。ひようたくれめてつばくれめ。あまめ。おばあめ。おたふくめ。福茶がわひたか。いづべいのむべいトのどがいはいてちやまのちやをのむはななくた彌十もういゝゝ。高がぼたもちたくあんの出入で。さ

るのこくるもこていそうらしいぢやあねいか直ていそうらしいが。此茶釜にやあ化ものがいらアで市イヤはやとんだこつた。ぼたもち澤あんの一件がすみそうになつたら。又茶がまが化だした直ちやがまにどがはねへが。いつてい向のかゝあぞゑもんがあらんやつを。うんのろと見てまやくりかけるを。明店できいていたが。大屋の女と井戸ばたですべつてころんだの。イヤ明店でたくあんをかじりあふのと。ねへもしねいとをいふから。大屋の女はきいてゐて。くやしがつて泣出し。ふりこもうとするを。だまかしてやつたが。夫にまだ縁切榎を茶釜へまかけ。おいらにのませるたくみよ。だいそれたやつらじやねへか坂三ツがもん所ぢやねへが。大の字なりにふんぞりかへり。みつがなはでまらべにやあおかねへ。チ、イ向のてんぶらやのむねきかゝあへ。エイ内に居やあがるこたあねいはエイ。こゝへきやがれうしやアがれエイおしやべりあはわざと此ばをほつし。内に立開してゐたるが。まんきりゑのせむせおてふさんホントニおめいきのあらはれ口。かたかくふるへ出し。おてふもまつきをになつていつくも出す茶釜をまじくなつたか。吉さんおめいもそれをまじりつゝ今のんだじやあねへか直そんなおまきどうがらしじやあねへ酒屋の御用が此事を内通してきかせたから。さつきこいつがながせつちんのうち。いれけいてままつたから。ア茶釜がちつぶかつぶとわらつてゐらア。縁切榎はあはぐるつぼへ。そつといれておいたもまらず。そのおはぐるをつけやつた。向のかゝあど。おらがばか。縁きりはあたりめへだ。出てうしやがれ。いきやあがらねいか。ふりあげる。おて

ふはるへにけ出すむかふのおしやべりかあは。びつくりして目をまはし。つんの言「ナアニうつちやらかしておめつてながしへおつこちる。きやつさいふこゑに。みなくかけ引すり上るな」
 きぬいな。そんなばんくらはしものがあるぞ。長やのそうどうはたへぬい。くたばつたらさいはひだ。四十九のもちぐれいは。ついでだからついてやらあ。いひすて明地へ餅つきせむ七「ヤトナありやりやん」茶釜のおばけで目をまはしたヤレ水よふチ、まやばん「コレでか市ぼうぬしも醫者のきれつばしだ。氣つけはぬいか」で市「氣つけはぬいが。付木をのませるがいまやばん「ばかあいふなく」で市「それでもハテ氣つけをひつくるけいすと。つけ木とよみやす。目をひつくるけいしたものには。氣つけに硫黄が妙さ。まきさまいきをふきかへさあ。則功神の如しだ。氣がつくと縁切榎の同類もはくじやうすらア。はやく硫黄をのませなまやばん「そりやあ硫黄じやあねへ熊野のごをうだらうがで市「ナアニをふ」といふからせむ七「なあるほど。こいつは妙薬だ。のませてまやべらせるがい」トつけ木のいわうをこせけ。おしやべりが口ふつこせむ七「イヤきめう」。あんべいはどうだ」おしやべり「あんべいはい」が。氣まよくがわりいはな。おてふさんのおはぐるにやあ。縁切榎がいつてあたを。わつちもいつしよにつけたから。どふ氣がよりだよせむ七「きづけへぬへ。おてふさんはもうたき出されてしまつた。これからおめへのお祟のくるぶんだアハ、トわらふ所へ酒やのごようみ「アアおかみさん。それから。二文がつり。おつかひをしたかはり。悪をもちつていきやしようしやばん「かけどころ

かコレ見や死かゝつてあらアこよう「そいつあアい」。悪は香奠にするから。はやく早桶へへしこんでしまひぬへせむ七「てめへやみどあしくいふが。なんぞいしゆでもあるのかこよう」なぐツちやアさ。酒もかはぬいくせに。うざく用ばかりたのまアいめいましいかあだ。そふいつてもむねきだよ。向のかみさんをけしかけて。吉さんとかみやはせる氣だはな。おれうばばかりだとおもつて。きいてあるもかまはぬいで。アノ、縁切のきとやらをのませると。そうだんしたから。吉さんにいつつけてやつたア。そしてこのてんぶらの旦那さまがおつしやるとをきいたが。ふうたきいばつかりいふ女だから。にくまれて十三ヶ所店げいをしたとよ。どふだろ。そふして手くせがわりいとよ。てんぶらの賣溜をくすねちやあ。新道で犬のくそをふんづけたようならアしてあるとさ。いめへましいかあだから今夜おきざりにして。借金といつしよに送るといつたつけい。きびしやアねへか。白コチ、ぶちコチ、おしきくトいひながらで市「おひ出されおきざりの名號熊野の硫黄はこれより出ますめうがせんはお心もちにげてゆく」おしやべり「わりい所か癩がつつはつてきたア。おきざりにあつちやあ。わたいはかわりい」おしやべり「わりい所か癩がつつはつてきたア。おきざりにあつちやあ。わたいはいくじやねへ。はやくわつちらが内をつかまへてきてくんぬい。どなたもおたのん申やすはな」た彌「尋に出るにもあら迷子はひよべず。しやぼんやさんは。瘡であるけず。七こはせむしなりで市「目くらのおつても氣がきかぬへし。かたわものぞろひ。堀の内道といふもんだハ

あけみれば。せむしはいつしようけんめいさせなかにしよつたは。れこなればみドタ〜〜〜此さわぎに。大
 な〜あきれけいり。かめのこさうのさほりにすべつて一さうつひたをれる。屋はたかあし
 だ。ゆみはりをつけて出きたれば。せむし七「大屋さんイザしがいをおあらためくだされましよう。大屋」し
 して水ふるひをしながらまづめなつらで。つべら 太郎どんの猫と。次郎どんの猫と。こうかの屋根で。さかつてゐたが。塵溜へどびそこ
 なつて井戸へおつこちたものと相見える皆々「いかさま御尤ト見れば此れこ小判をくはへ大屋皆の衆ふ
 しんは尤。此金は町内に沽券があつてもらつた分一金さ。ふどころへいれてさつき造酒徳利を
 あらひに井戸へきた時。ついでとどした。おもはず手に入るゑんぎのきつそう。猫に小判
 もあら玉の。あくればわしも四十二の。厄おとしに此一兩。長屋中へおみきせんに進しんぜるから。
 いわふていつそ若水の井戸がへ皆の衆御たいぎながらみな「イヨ大屋大明神さま〜〜ア
 、ありがたいと申やすトはめてる所へてんぶらや歸つてくるさ二ひきだちのこおしやべり」おめい見世をしまつ
 てきなつたか。ていしゆ「しまはぬいで。屋躰がきざりになるものか。どなたもさきほどはおせ
 わでございやした。わつちらがばか。すつかりごようにあそばれるやつさハ、ついで又か
 ふもかけてふ「吉さんわたいは身をなげやうと思つて。かうかでかんがへてゐたが。猫の身がはり
 が。どふもおかしくつて死ぬにも死ねいからかんにしてくんな直べらぼうめ。猫なら一兩
 がどつくだろふ大屋アハ、なにもかもおれがもらつた。一ツメてくれシヤン〜〜と。
 めでたい春をむかへまして。おしやべり女房も是にこりて無口になりますし。わたくしもいつ

しよう女の道を守ふとぞんじつきましたら今ては表店へ出るようになりましたと。丑待のあ
 りさま。見しまゝに申あげければ。奥さまきこしめし。ヤレ〜それはめでたい事であつた
 ぞ

寒紅丑日待下册終

氷縁奇遇

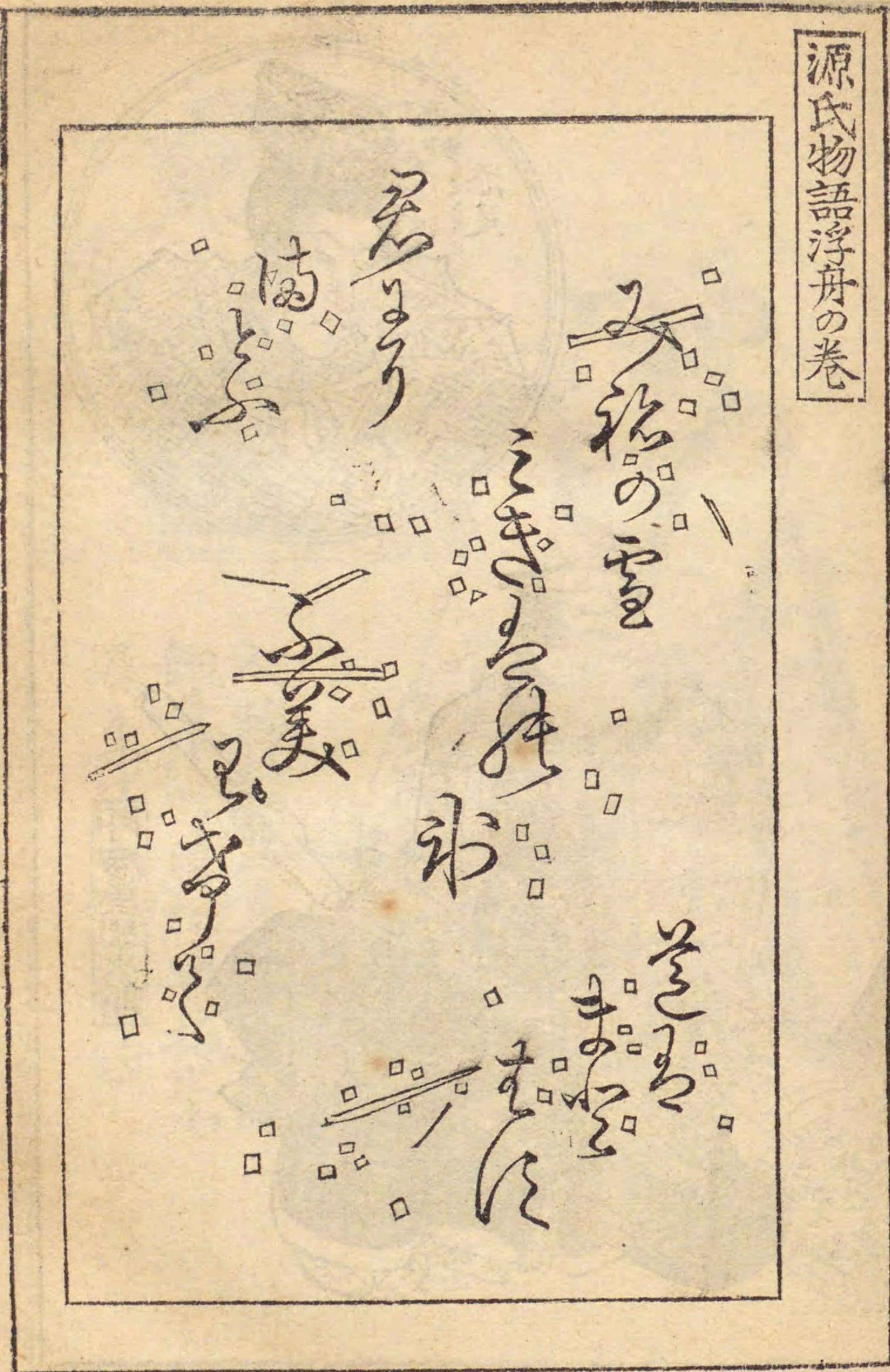
信濃國諏訪の湖は。上の諏訪建御名方命の社前より。下の諏訪八坂刀賣
 命の社の間にわたりて。その周匝三里ばかり。さゞ浪の近江の湖に。つ
 いきたる大湖なり。毎年小寒の後にいたりて。堅凍湖上を閉る時。神狐
 氷の上をはしり。土俗これを早渡と唱へ。その足跡のあるひは西し。或
 は東するに随ひ。此よりこゝを往來する事。陸地の如くなる故に。氷の
 橋とも美稱たり。かくて翌年立春のち。神狐再び渉ることあり。夫よ
 り。往來を止むれば。堀河百首に諏訪の海の。氷の上の通路は。神の渡
 りて解るなりけり。と詠しは春の氷をいへり。されば八重垣姫が狐火の
 段も。まことや當年霜月廿日。いまだ小寒ならずして。神狐さわたりを
 爲ざるにより。諏訪法性の兜を戴き。神の守護に夫の跡を。慕ひて此處

を越したるは。氷の橋の凝れる念力。それは本朝廿四孝。これは唐土の
 廿四孝に。郭巨が金一釜ならで。深い縁は堀出しもの。骨董舗の女子
 阿金が。二世の妙契とみすゝかる。信濃國の本店より。近來出鷹の下總
 に。お諏訪様の加微力さへ。かて、交たる氷縁奇遇。春のさわたり賣出
 しから。高評の厚氷を。祈ふ垂氷の太かれども。閨秀君子の御旨に合る
 や。合じを狐疑する戦々競々。薄氷を踏むこゝちなるを。道理じゃ狐の
 子じやものを。と笑はせたまふ事勿れ

文政十四年辛卯春

菅垣琴彦戲題

源氏物語浮舟の巻





朝市や妻の駒



朝市屋娘の金

人物競紛無強弱逐
 鈿車此時松與栢不
 及是倚也

神因



画蛇添足



阿膠屋琴次郎



氷縁奇遇都の花巻之上

菅垣琴彦戯作

○あら井

柳を伐ること如何ん。斧に匪ざれば克はず。妻を取ること如何ん。媒に匪ざれば得ずと。毛詩の比興宜なるかな。その良媒を以てせずして。穴隙を穿り牆を踰えて。わりなき交契を結ぶたぐひは。父母國人もみな憎めども。若男女の魂合ひて。戀慕の情に泥めるは。君長も解く事能はず。父母も軟諭めがたきものにて。或は財貨の爲に眩み。あるは權勢に阿附諂りその愛慾の情を拆て。強て嫁娶贅婿さするは。嚴親の赫威をまめすのみにて。慈悲に疎きものといはむ歟。されば主たちも色事さんしてと謠ひ。眞實をいはいこの道はと。一口文句も。聖人賢者の。垣の外なる無理のみならず。造化自然の深甚微妙。色に溺れ香に迷ふはみな是凡慮の及ばぬ地位と榮利に附く世の習風の中から戀々の情を探りて吾が好く道のひいき眼に壯士女のこりかたまりし痴情は疑れる油の上へ澆ぐ油の焚木樵る鎌倉長谷の觀音前に朝市屋草右衛門といふ骨董舖あり一人娘子のお金とて今年十七の花新婦ざかり此間より何となくこもりがちなる鬱々病症を勞の字の冠く下地にやと兩親は大かたならず案じ煩みて醫師を招き保養をどもに勸むるに母の

お駒は生さぬ中の底に物ある眞綿に針縫物敷紙を片付ながら 駒お金や其様に老なくして居ちやアならぬへヨ。この十五日には阿膠屋の方から結納も来るはづだアな。ちつと我慢をして髪でも結つたり湯へも行かやうでなくつちやアおのしが病症は他日にたゝねへから若外になんぞありでもして先月の二十八日によこさふと言つた結納をも。死したのじやアねへかどひよつと媒人の添足さんにおもはれて見な。おのしが身にも疵が付し。おれも傍に付て居なからどふも濟まねへハナ。夫だからさばくとして居てくれなくつちやア世間躰もわりいといふもの。そんな事のおからねへ一年甲でもねへにぢれつてへ子だよ。トおろりこ見る目つき三角にさかりひたいのねためつたわりからこ楯なりのかうがいばらふのまさこの楯はくぼたんに顔をふきて前齒の二三本ねけたる所を入にしておはぐる黒くべにをちよいささし玉つむぎのやわらかうらの小袖黒しゆすへあさぎ小柳をばらあはせにしたおびをしめさんさめこのんがすりの前だれひもえはひるの中かたちめんはいちんをうしろにはをりて本地るのさげたばこぼんをひかへてなきせるにゆもさみやげのひれりのたばこ入をいぢりながらおろくされめまはすさま八百屋半兵衛が後家からつりをさりそふなり女金ハイあんばいによければ浮く致しますが。なぜか此ころは食事もおいしくなし。どふも氣が重いからついでささますのサ堪忍してあくんなさいまし。トおろりこなみこま何も泣く事アねへハナ加減のわりいにもしろサちつとはこつちの氣にもなつて押すといふともある物だ。食事なんぞも我慢をして大と食べればいいに。奉公人が寐やア志めへしどかく食物をひけえらるるにやアこまるよ。それとも外に思ふ事でもあつての事なら結納の來ねへうちどふかしねへぢやアならぬへ。了簡があるならあるといふ何も泣てばかり居てわかる事ぢやアあるめへ。サ

ア了簡を聞ふサアいな、な、トせりたてられ、駒大かた見世の筆七がおのしの氣に入てゐるだろふサア
 さふなら左様といしなれ、イエ何もそんな事ではございませぬおまへさんも。あの男にわけ
 もあるとおぼしめしちやア誠にめいわくでございませぬ。とふも身軀のわるいのでございませぬから。
 いたしかたがございませぬものを。そんな事をおつしやつちやアどふいたしたらよふございま
 せうか、ト又泣く主人草右衛門、よそより草今歸つた。なんだおかねはなんで泣いだ、又こなたが小言か久し
 いものだ。よさつせへ。病氣にさわつちやアわりいに駒「おまへまでそんな事をいしなさる。そ
 れだからこの子が猶能い事にしてイヤふさぐの食がくへねへのと毎日、寝てばかり居てなん
 の事アねへ土地神さまの撫牛のやうだはね。最うやがて結納も来るのに。餘りぶらぶらして居
 るから。ちつととうきくしなと言つて居る所へ藪から棒に腰を折れちやアなをいふ事をきしま
 せんハナ草「そりやア知た事だけれど。どうと寐るやうに成つて見たがいし。それこそ元もこも
 失なふはなしだ。まあ能く養生をして事によつたら又延してもいしはな駒「そんな事を仰しや
 る。先月よこす所を延して貰たさへ添足さんに氣の毒でならねへに。どふ又延されやう。先こ
 ろもおまへが彼是いしなすつたから延ばしたのに。何ぞといふとお金がひるきばかりして。私
 しがいふ事をしつげなさる。それだからあれは彼でいふ事を聞かず。大躰氣がもめる事ぢや
 アねへハナ。それに彼女は義理のある子ぢやアあるし。おまへがそふ最負をしなさると。今流

行る芋田樂ぢやアねへかど世間の人の口に戸はたてられませぬ。右衛門はむけてまやべりつけられませぬ。
 もいとお駒がいやみらしきこをいふ。草「イヤこなたは途方もねへことをいふナいつ己がそんないやら
 い事をした。あれが病氣にさわらふと思へばこそ。ひいきもすれ。大切な事をいひかけて濟
 ふと思ふか。たしなみをれ。ト聲高になるゆゑむすめはあはてふたおやをなだむれどもきかぬ氣の。手代筆七「コレハ
 何事でございます。旦那お静かに仰しやいませし。お令政もまア、おだまんなさいませし。金筆
 七かわたしがおどめ申してもお聞なさらねへからどふぞよくおなだめ申てくんナヨ。元はとい
 へば皆わたしから起つたのだハナ駒「筆七打捨つて置つせへ。おれがお金の氣の散れるやう
 に異見をして居る所へ旦那が藪から棒にわたし計りを叱んなさる物だからつい聲も高く成つた
 のだハナ筆「何事もお静かに仰しやつて分る事。表へ人が立ちますと外聞がわるふございませぬト。
 やうやくふたりを諭勸ける。

○箱の井

その翌日は朝間より。お金が容躰よかりければ。母のお駒が無理に進めて。髪を結はせ其身は
 彼の媒人壽蛇添足といふ。鷹社司が方へ往て。相議する事あるよしにて。下女のひまといふを
 引領。巳刻よりいそがはしく。化粧粉面りて出行ければ。主人草右衛門は奥の間に娘が心をな

くさめて。浮世ばなしも偏屈き。天幸魚樂が春狂言に。としてかうして乗地になりし。折から隣家の娘お福年十七八ばかり名のさふりのあるものにてにきびの出来たあぶら顔へ舞臺香をぬりたてつ。福お金さんけふはお加減はかれ。ハイ有がたう大ききによるしうございますヨ。ふく「おツかさんはお留守かへかれ。アイ用が有て出ましたふく」そんならちつと見世へ出て御覽。いつそいゝ女中がたんと通りますヨ。おつかさんがお出だトお叱りだから誘ひ出されぬ。草お福さんほんにさふだ連れて行つておくんなさい。お金外でも見て來な。金、ハイト見世の方へ。ふく「オヤ筆七さんけふは胸悪の形印は留守かへ。筆、ハイ先刻お屋しきへ行きました胸悪だなんぞと仰しやるな。おまへに大躰惚れて居るものをふく」否よ何んぞといふと筆七さんはあんなことをお言ひだヨ。人の氣も知らないで。トいやらしき目づかひして前がみを箒でかきながら。金、ホンニお福さん筆七は子だれの氣も知らない。それでが子筆七さんなんぞは誠に憎いよ。たゞ人におもはせてばかりゐてぢらさふ。こいふ風だ。わたしどもが男だと女に氣をもませぬへ様にどふでもしてやるけれど。筆、そりやアちまいさん方のとサ。私どもが様な年季奉公人は。いくら此方で思つても。お庭の櫻で及ばぬ事とあきらめて居ます。トおれが方を。金、アレお福さんお聞。あんな憎い口をききます篤實い顔

285301

をしてゐて大かた外に約束でもして有だらうからサ。福きつとさふだヨ。ホンニお金さん此間染たのは此着物だが子。私にやア似合ますかへ。金、早く出來た子いつを能く似合ふよ。ノウ筆七、筆、さやうサ全躰何を召してもよくお似合ひなさる。ソシテ地が平だからお召茶小紋が奇麗に染つた。福、筆七さん眞實にかへ。おまへさへ似合とあいひなら誰がなんといつてもかまはな。いよ。金、きつことだ子。おまへは瘦てお出でないからとんだ着こなしが能い。わたしのやうな骨つばいものがきては見とふもなからうふく「おかねさんはとんだとを言だ。私は瘦たくツてくおまんまも此ごろは一膳づゝひかへて一度に三膳づゝしきやア食はず。地内の辨天さまへ願懸をして。瘦せたらば一生お甘藷を食べますまいと拜んで居るに。金、おつなものをお断だ子オホ、筆、その所爲か此ごろはがうぎにお瘦せなすつた。ソシテ其めしものが眞岡や。でないからいつを剛毅でなくつてよく見えます。福、なめて筆七さんおのせでないヨ。嘘ばつかりトふりをなして。筆、そのはづさ子やつぱり地鐵で太織だふく「よく上げたり下げたりしなさる。これいろ目をつ。福、そのはづさ子やつぱり地鐵で太織だふく「よく上げたり下げたりしなさる。これ」いつでも筆七は人を撈るから憎い子へ。おふくはみせに付けてあ。ふく「お金さんこりやアいゝ胸だ子此間有つた繼棹より響りそふだ。子、あはせて。福、筆七さんきのふ裏の豊齋さんに教はつたが子心い。きだから聞ておくれうた。まやうつれないほど思ふて居れど。橋なき道をばわたられぬうた。これぢやならぬと氣で氣を直し思案するほど無ふんべつ。福、この通りだよ。筆、そふいふ眞實な女に

思はれたら。嘸嬉しかろう子 嘸人の事ぢやアないは子お金さんもちつと弾いてお見い、調子
 な胴だよ 金「ホンニよく鳴ります子弾て見たいけれど心いきをいはふやうもない身だから、い
 ふさく 嘸「おかねさんふさいではないけなよサア筆七さん私にばかりいはせずとお前の心いきも
 聞たい子 筆「どふして私がおかねさんふさいではないよサア筆七さん私にばかりいはせずとお前の心いきも
 坂東の俊寛を見に行たとき稲屋の二階でそれ豊粹とかいふ藝者に弾かせて。おまへが誠に能い
 聲でお謡ひだつて。何ぞらねへもいへ子へおかねさん 金「サウサ子筆七。何ぞお福さんの心い
 きに。お返事をしな子 筆「こまつた事だト、聲「うた」大學朱熹章句で。子程子の曰く色をするな
 と書にいましめてあるツ。此通りが私の心いきサ 嘸「否よそんな異見をする心いきがあるもん
 か子へお金さん 金「左様サそれより筆七は書が上手だから。心いきを書てお目にかければい、
 嘸「それがい、サア、何ぞお書き、ト硯箱をもつて来る筆七ふしやうに紙をさり出 嘸「オヤ何だお龜の
 めんど天狗の面と。高砂のぢいさんばあさんと。坊さまの面とお書だ子これが心いきだとかへ
 筆「左様さあて、御覽じろ 嘸「何だらう子 金「されば何だか 嘸「やつと思ひついた。が子ちつ
 と自慢らしいからいふまいかおれはこゝろの内に金「どうで心いきは自慢だからよいじやアないか
 へ。いつてごらん 嘸「そんなら思ひきつていはうや。おかねさんあつかましいとお笑ひでな
 いヨ。先とお龜はお福ともいふから私が名と同じ事だからまあわたしサ。天狗のめんは筆七さ

んも大かた此鼻の高いやうだといふとだらうからおまへサ。そこで此わたしが面とおまへと一
 所になつて。此爺さん婆さんのやうに諸白髪まで添とけて。坊さまの面のやうな。坊を生ませ
 やうといふおまへの心いきかへそれなら誠に嬉しいよ 金「よくむづかしくお考へだ子。私はつ
 い口もとを案じたからすこし違つたヨ。筆七やお福さんのお案考の通りか 筆「イエ少し違ひま
 した 嘸「違つたか子そんならどうだいそふお云な 筆「よしませう腹をお立なさるとわるいから
 嘸「ナニおまへがおいひの事を腹を立ものか子氣が濟ないからおいひヨ 筆「必ず腹をお立なさ
 んなそれは面が五つありまじやうふく「アイ丁度五つあるがどふしたエ 筆「私の心いきはおまへ
 さんのやうな美しいお娘御と色情をふく「まやうとおいひのかエ 筆「イエサ五面だといふとで
 ざいますアハ、 金「そふだらふと思つたオホ、ふく「不景氣やわたしやア最ふ歸るよハイ左
 様ならトふんして出てゆく後 筆「ヤレ、いやらしい子だぞよつばど能い氣になつて居ます子
 金「こなたが餘りひどい事をいふからあふくさんが大さうに腹をたつて歸つたよ全躰こなたは
 ナゼ女にやさしくないのだノウ先へ死ぬと取付れるヨ 嘸「目に露をふくみて見やる此ごろの病氣にすこしやせ
 顔愛敬のこぼれかいるやうなるは違者でありてよくつく筆「なに私どもがたとへ此方で思へばとて末の遂ること
 りかさりたらばこれのために死ぬなこおほりねべし 嘸「でも付てごらうじましそれこそ大さわざに成た上で
 とでもありますまいし嫁入まへの金箱へ疵でも付てごらうじましそれこそ大さわざに成た上で
 たつた一人つき出され女を引返されてい、耻をかやくやうな目にあつて其女子はやつぱり他へ嫁

づいたり何かすると終活さふとか殺さふとかいふ氣に成るは男のもちまへいよく耻のかき上げをする様になるものでございませうから只かういふ身のうへになつて居るを悔むばかり中々色情どころではございませぬ。金「それはそんな水々さい女の事サもしまた添はれぬ事情になつたらたとひどのやうに引裂れても。命を捨て他人には逢ふまいと。おもふ眞實な女があらばどふする。筆「それは百人に一人も今時はむづかしうございませぬ。けれども女の情さへ大丈夫なりやア始終添はれぬといふものでもございませぬから。男子の方には随分了簡もあるものでございませぬが。私どものやうな奉公人の身分では。思ふに任せぬものではあるし。また親のいふことを聞かぬへでも成ませぬから。どうで出来ぬへ理屈でございませぬ。シタが今の面の繪がわたくしの心いき判じて呉れる人がありそうな物でございませぬ。金「五面といふことはわたしも考へたが。まだ外に判じやうがあるならいつてお聞せ。筆「ぶしつけながらまあ假令申さば。お龜は低い鼻天狗は高い鼻。高い低いも色情の道は同じ事ながら。主従といふものでは。低い身から高ひ所へは手が至ませぬから。嫁入の沙汰でもあつて高砂の尉と姥の様に。女の身が極ると。妬嫉で居てもはじまらぬへから。ぐつと世を觀じて末の面のやうに坊主にでも成らふとおもふがこゝろいきでございませぬ。金「わたしやアなんたる因果だやら頼みにおもふとこのか人は情ない事をいつて呉れるしおつかさんはあの阿膠屋の琴次郎さんのやうな否氣な人の所へ是

非行けと仰しやるしいつそ病氣が重くなつて早く死でしまいたいと只一すぢに思ひ詰たる娘心にかきくらす涙の雨にそゝがれて濡れば濡れんと筆七が心の駒も亂るゝ折節奥の間より草右衛門がおかねやくと呼立るに泣顔をまぎらかして殘多げに筆七と立別れつゝおかねはやがて障子の裏面に入りしになむ。

氷縁奇遇都の花卷之上 終

氷縁奇遇都の花巻之中

○泉の井

朝市屋草右衛門が妻お駒は。其はじめ大磯の藝妓にて。まばく夫を重ねしものなり。草右衛門前妻の亡りしころ。男の手一つにて娘おかねが養育に困りければ。かの女を媒するものゝあるに任せ。後妻として。家内の事を。すべて賄はせけるほどに。彼はよのつねならぬ革羽織にして。黠才がしこく心利て。夫の質朴風なる。氣性を甘く合點ければ。商賣の用世間のかけ合。なに事も罷り出て。牝雞が告時をつぐるになん。さればこの間雪の下なる。阿膠屋琴次郎といふ骨董同舖へ。娘が婚姻の相談も。夫草右衛門は外に家を。ゆづるべき子もなければ。嫁入はさせで召仕ひの。手代筆七が實躰なるを。婿にせばやと思ふにより。不肯なるをあながちに。嫁婦に極めしは。お駒元より淫蕩女なるに。當年既に四十三。諺のふしの四十女。七時雨の濡安く。五十を超したる草右衛門が。趣旨樂しからぬをもて。いつしか彼筆七が。身材に泥みつゝ。情をこめし心づけ。折々水を向くれども。彼原來ものがたく。まかもお駒が年にも耻ぢず。日髪日施粉小皺のよりし。顔へ箴刺も張りかねぬ。いやらしき風姿を嫌ひ。たゞ知らぬ

よしにもてなし。絶て心に任せざれば。腹立しきと類ひなく。いつも晦日被に來る。白旗明神の下社司。畫蛇添足といふものと。道ならぬ交契をこめしに。かの阿膠屋は添足が。出入場に琴次郎も。かねておかねを戀慕ければ。つひに添足にいくばくの。金子を分與へて。媒をたのみしかばひとつ穴の。古狸なるお駒と共に。此縁邊を結びし。此日お駒は結納の。相談がてら添足が。つもる思ひを延べさせんと。此所に來れば添足夫婦。酒肴をとゝのへて。奔走大かたならざるほどに。女房お嶋は銚子を換へに。庖厨へ立し間をうかいひ。お駒はすこし小音になりて。こまトキニ添足さんへ。いよく結納の日期が十五日に極つて見れば。おかねの病氣がよくないといつて。さうく延しもされすまいから。何はともあれ先十五日としましやうか子。添さ様サ先だつて廿八日を延ばしたのでさへ私が大躰骨を折て。阿膠屋の方をこぢつけたのだから最う延ばされやすめへこまソコニ一ツわけがあるのサあの筆七子。あれにおかねがよつばど氣があるとお思ひ。尤も何もまだ眞實の事はねへど。蛇のみちは何とやら私にいらんでは置たが。それだから。とかくあの子が縁談のはなしをする。ふさひで斗居ていけへ。のさ。ソコでわたしと思ふにはかねておまへと約束のどほりお金をさへ片付けてまへば。親仁はおいこむし。いゝあんべへに誑くらかしておまへを内へ直らせて。あすこの家をば二人の物にしやうし。そしてお嶋さんをばやつぱり内合にして。表向はわたしをお袋。内證のどをさ

へ。わたしを重にしてくんなされば。こんな小さな神主さまより。楽といふものだから。どふぞわの子を阿膠屋へおつ付てへが。若いものゝ事だから。ひよつと筆七めがどふか爲なけりやアいゝと思ふと。あいつがいつそ邪魔になるが子どふしたらよからう子 添「さればサそりやアかねての約束ではあるし。私もあすこの家へのりこみやア。神道者身にぼろ／＼の不浄をきなど。川流點にあるやうな白木綿の浄衣をぬいで。色絹袖の小袖にゾンの羽折でも着て。おつかさんなり女房なり。チン鴨と出かけるのは只おまへの心ひとつ。阿膠屋でも首尾よく婚禮をした上ではズツまると呉れるつもりだから。今迄の借金でもかた付て。おもしろ狸といふ譯だがナルホド筆七が家に居てひよつとおかねぼうを引ばらひでもするト大變だ。どふかしてあいつへ罪状をつけて。お核はこの肩負せようがありさふなものだ。駒「それに内では。中年もだが筆七は書をよくかく所以かして目も利いてるし。一鉢發明ものだと。がうぎに氣に入つて居るから。形八は子供立から居るやうでもねへ。才覺がねへと平生いふもんだから子形八と筆七とはてへ／＼中の悪いとぢやアねへは子。形八を玉につかつたなら甘く狂言が書けさうな物だねへ 添「お待よ。かふしてそれからかうするウ、い／＼ちよつと耳をおかし駒「アイ添」ソレ子駒「ウ、添」子、駒「アイ妙だ子添」よからう子駒「さうすりやア妙にい。成程おまへは智慧があるナゼダのう ト膝をふ添「ア痛タ、よしねへつめられる谷は志ねへヨ駒」志ねへ

もよく出来たヨわたしがやうな篤實ものをこんな水性にしたのは誰だ 添「餘りかたくもあるめへ此方は脇艦にやとばれたのだものを 駒「憎い口だぞソナ事をいひなさると口吻をつめるによ 添「またつめるのか最うごめんだ トおこまを 駒「なんだナあつかましいマアおまちよ ト立てつて見るに女房おはみはかくさまりてや酒のかんはそのま はみ「オヤお駒さんはいかりながらその銚子をお持なにしていました飯のすみをかいて居たりしッ 駒「オヤお駒さんはいかりながらその銚子をお持なすつて下さいまし。どうでもむづかしいおはなしだからお邪魔でもあらふし。そのうち私しやアこゝいらを片付ますかららひながら 駒「ホンニおいそがしからうにいつでも長ばなしをしていッそお氣の毒でございますヨ。アノひまやお主が宿はたしか直片瀨あたりじやアなかつたか。用があるならいつて來なまだおれは手間が取れるからひま、ハイ有がたうございませんそんなら一寸行て参りませしやう。おきに歸ります 駒「コレ／＼宿へ行くならこれで何ぞみやげを買て行がい、トおみつき紙の紙ばさみのあひだからそしてゆるりと用をたして來るがい、ひま「それは誠に有がたうございませんさやうなら頂戴して参りませう トおのれをきんちやくの中へよくおしこみて、ハイ左様なら此家のおかみさん行て参りますお頼み申ますヨ ト出でんさするをお駒は又 駒「オイ／＼そして行がけに奴の所へよつて早くこれだけ焼て下せへと頼んでいつてもらばう ひま「ハイ／＼畏りましたハイ左様なら駒「お蝮さん今に蒲焼が参りましたら私にお構ひなさんねへでお茶漬を上つて下さいましヨまだお晝飯前だらうに私しやア御酒を飲べるとツイ氣が付ませんハナホ、蝮「いつでもお心遣

ひを成さるでいつそお氣の毒でございませぬ不_レ斷添足が何のかの御恩になりませぬものをたまたまお出なすつたのに。おかまひも申ませぬでお心易_レだてばかりいたしてオホ、御用がございませしやうにあつちらへお出なさいませし 駒お禮は私の方から申すはづそんなら御免なさいませしト_レさしき添_レでへぶ久しく多_レ言_レてお出だその世事のいゝには誰でも惚_レれるよ 駒やかましいよ私は大さうに酔_レたよちつと寝_レ轉ばふや 添私しも寝_レやしやう 駒おかみさんが來るとわるいはナ添何_レ構_レふもんだト。二人はそこへ〇〇の。小夜の衣はかけあへぬども。重_レきがうへのかさね妻みにくき契_レをこむるなるべし

〇扇の井

朝市屋へ見舞に來る赤坐同庵といふ醫師奥の方より立_レ出れば 手代形八赤坐さま度々御苦勞さまでございませぬ。とき主人の娘も明々後日十五日には結納が参りますはづ。それ故親たちもきつう案_レじます如何でございませしやうナ同イヤ今日などは大にいゝて。凡_レ醫_レの見るといはゆる勞瘵として治すやつだか。さうでない娘子の症は寡居無陽から出たのだけれど似て非なるもので。やがて全快うけ合だが全_レ躰内にばかり居て太陽の精氣をうけぬのがきつい毒だてな形八何んだか分りませぬが全快さへ致_レせばよろしうございませぬ。どふか御丹誠をお願ひ申す同ヨシ

大丈夫さどんと案_レじさつしやらぬが能_レうござすてトキニその箱の何だナ 形へイこれは顔輝どか申す唐筆でございませぬ折紙もございませぬ丹友の添_レ状もございませぬ此間戸引町へお目にかけましたら。出來宜しくと申して参りました同ドレハハハ妙な圖を書いた墨色筆勢奇絶形その赤い面のは關羽だと存_レじますが片手を突出して。熊の傳三郎といふ身で腕を切裂れて居るはどふいふわけでございませぬ子熊の傳三郎の唐人は何と申人でございませぬ 同これは華佗字は元化といふ名醫だテ關帝が敵の毒矢に中_レつて鏃をば抜いたれども。その毒が皮肉の中に廻_レつて居るによつて華佗がその腕を劈いて筋を洗_レつて毒を抜てま_レつたに關帝はその内人と碁を圍み酒を呑んで自若として笑_レふて居たといふ事が蜀志や魏志の華佗が傳に見えてあるて。アツア今にして此英雄なくこの國手もすくないよく出來た圖だ 形へエ左様なら關羽が臂の矢鏃の毒を割_レ判_レいて療治をした所てございませぬか成程關羽といふ人は豪傑いものだ今時の人でござらじませし酒どころか直に目をまはします同サレバサそこで今の人を療治するには。いろく攻_レ劇どうぐがあるだて。金瘡や婦人の〇處に穴道のないのを割る療治などは中々そのまゝでは出來ぬものだから麻藥を以て一旦ころしておいてさて思_レふまゝに切_レたり縫_レたりするてな 形へエその麻藥とやらは服_レべると一旦死にますか子さふいふ藥でもなくツチャアとても今時の人には療治をいたし得_レますまい 同世間で麻藥といふのはたゞうつとりとさせて置くばかりで當人が痛苦

をおぼえぬばかりの事眼も見える心もたしかだか愚老が家秘の方はそふでないて 形夫はまた
 どふ致します 同「先麻薬を冷酒で吞せると一時ばかり過て全く死ぬでそこでどのやうにして療
 治をしても此方に心配が無いから妙だて 形「へい左様なら眞實に死だやうに成ますか子 同「死だ
 やうになる段かもし三日そのまゝで置くと實に死んでまふて 形「それを蘇す薬もございます
 か 同「一旦ころして療治をしてさて醒薬を服せるとおきに蘇息つて其間の事は夢のやうにおも
 つて居るものだ 形「その醒薬とかやは矢張御家秘でございますか 同「イヤ是は家方といふで
 も無いて麻仁細茶甘草三味を煎じて服ませると直に毒を解して平生の様になるだて 同「いひながら
 ふく見て箱書付の文字を ハテナこれはよく似たものだナ今までは氣が付なんだが トこしなる青銅の矢立を
 から二ツ折の小ぎく 形「氣がつかす何かあんてあたり 同庵さまへ私の宿の女房か乳岩とかやらて難儀い
 を出しうつして居る 形「しむきうに思ひだしたやうに 同庵さまへ私宿の女房か乳岩とかやらて難儀い
 たしますが右の麻薬とやらでお療治が出来ましやうか子 同「乳岩なら愚老が得手ものだ麻薬を
 服ませてさて切るといふ療治で急度治すテ 形「夫はよい事を伺ひましたナント御療治をお願ひ
 申たいものでございます 同「どちらでござす 形「ハイ遠方でお氣の毒さまでございます 藤澤在で
 ございますから 同「それは遠いナ此せつ廻り場が多くてめいわくですが仁術の事じや。行つて進
 ぜやう併しまだ四五日は行れぬテ 形「いづれ今日にも私が参りまして申聞せ置ましやうから。
 その麻薬を頂き度ものでございます 同「そんなら一所にござれ。薬は先進せるから。わしが見

廻ふ前日にこちらまで沙汰を志やうによつて。其時服ませるが能い。今にわしも歸宅するから
 都合がよくば直にござれ 形「それはありがたうございます へい左様ならお供の衆御苦勞ト同庵は
 る形「ア、是一寸行きたいものだ。小僧めは歸らず。アノ又筆七めが先刻湯へ行つたにまだ歸ら
 ぬへ。あいつめはどかく色男きどりで女にかからかつてでも居るだらう ト立て奥の入口なるのれんをく
 立てゐる故 形「筆七どんいつ歸つたのだ。人にびつくりさせた筆「おめへも何をきよとくするの
 だ 形「何よ。同庵さんの所までいつて來ねへじやならねへからおめへを待て居たんだいつて來
 るから頼むぜ 筆「よし、承知だ。此うち形八ははなりを引かけて見せの下さ 嗚呼此赤坐同庵。みだりに
 吾が術にほこり。いまだ其病者をも見ずして。輕卒しく秘薬を人に授るは。抑亦これいかな
 る不用意ぞや。もし禍害を惹起さば。仁術つひに畫餅とならん。心すべき事にこそ。かくて其
 翌の朝まだき。形八は用事ありとて。出立んとして状差なる。手紙を四五本拾ひ出し。懷中へ
 ぬちこみつ、奥に至りてお駒にむかひ。今日は他出のついであれば。お金が薬も乞ひて來らん。
 といひつ、戸棚の通ひ箱なる。薬疊紙を帛紗に包み。いそがはしく出さりぬ主人草右衛門も娘
 が所勞。平癒のいのりに日來信ずる。妙見へ詣たるその日も已に巳の刻ばかり。筆七一入見せ
 に居たるに。中間躰の男來りて。赤坐方より参りしと。さし出す手紙は朝市屋御見世中赤坐同
 庵と書たるを。封おし切て筆七「然者昨日拜見いたし候顔輝の軸。旦那懇望致され候に付此者へ

御貸し可被下候。委細拜面可申述候不具。よし／＼使何か参るさうでございます筆、エ、旦那は留守でございますから返事は上ません。モシ大切の品だから氣を付けてお持なさい。ト箱の掛物す使、畏まりましたへい左様ならト引ちがへて形八が。戸口より大聲に、形赤坐さまの所へよつたら大らんごくだつた。ヤレ／＼筆、何だ赤坐さまへ貴様よつたか形ム、トいひすて、おかみさんへ赤坐さまは昨夜急に殿様から。お國のお姫さまが御大病故まゐるやうにと仰付られて。私が参つたら。いま立うといふ所でございました。病人はきつい事もあるめへから。轉薬にも及ぶめへ。弟子どもによく云付たから。案じさつしやらねへやうに。御家内へさういへといはれました。駒、オヤそれはどんだ急な事たのう。どふも仕方がねへトいふ折、筆七も筆、形八も今のは眞實か形、知た事よ何嘘がつかれるもんか筆、それでは大變だ、形何が筆、イヤもちつと先刻斯いふ手紙が来て顔輝を渡して遣つたがどふも合點がいかねへ。形ヤそれは大變どふして同庵様の家内はそんな所ではねへ大混雜だにそれは怪しい早く行て聞て見さつし、筆、そふしやうト驚き周章で同庵方へ走行しがまばらくして歸り來り、筆、形八どん貴様のいふ通り同庵さまは今立しつたといふ所へ行たが中／＼使を出す所ではねへ人が足ねへ位だつたとして弟子衆も送に行たとして居なんだが夫ぢやアノ、形、圖頼だらう大變を仕出かしたなア旦那がお留守ならおかみさんにいふが己が歸りでも待てばよかつたに、駒、ソレハ大變だソシテ何でも人の云ふとを聞

氷縁奇遇都の花卷之中 終

かねへで手前一人で香込むから其様な事が出来るコレ筆七どうするのだ、筆、どうとつて別に致し方もございませんが是非共尋ね出しましてお詫を申ませう、駒、子供ぢやア有めへしありやアまかも阿膠屋の貨品折も折とつてお金が結納も來やうといふ前へ立て圖頼で濟むものか馬鹿馬鹿しい、筆、何分不調法はお詫を申ます是非あの品を探し出しまして、形、どふで玉をつかめへねへぢやア論は干ねへは子エお内令さん、駒、さうサトこの内草右衛門も歸りしかばお駒此よしをつぶさに告るに。草右衛門も大きに驚き。かの同庵が手紙を出してとみかう見れども是といふ。怪しきふしもなきまゝに。おこま形八がいふに任せて。筆七が宿親なる金澤の百姓芋助と。いふものを呼寄て。此由を云ひ聞せ。筆七を引渡しかの掛物のせんぎのとを。いと嚴重にいひ付れば芋助は恐れ入て吾が名にあらぬ膽を潰しつひに筆七を引取て金澤さしてぞ歸りける。

氷縁奇遇都の花巻之下

○讓の井

身をつみて長からぬ世を知る人は。ひとへに人を恨みざらん。朝市屋の娘お金は。手代筆七が柔和に。人をそらさず愛敬ありて。志かも品材よく賤劣ならぬ。發明なるにかねてより。密に心を運べども。さすがにそれと岩橋の。明ていひよるすべもなく。獨り思ひを焦すほどに。世間より母のお駒が。心に非ぬ嫁入だとも。かの琴次郎は年壯けれども。吾が富るを高き鼻に。かけまくも自賢しど。繻絆の袴で首絞る。諸事世の中はこれくゞだど。大粹めかせし未至通にて。脂下がまへの白魚張も。女子に眼の無きお先真闇。慾と色との二道に。金子でせかして手に入れんど。かの添足が媒介言を。おなしこゝろに進めらるゝが。腹立しさと否さとの。つもりくゞて臥しがちなりに。早くも結納の日限とて。母は形入もろともに着の用意酒の酺。ひまどは號へどいそがしき。下女丁稚を叱り廻し。坐敷の掃除烟草盆の。火入に活し佐倉成も。いと花やかに亭主ぶるを。草右衛門は娘が心を。汲し蕪花の醒るも知らで。默然として坐し居たる。お駒は庖厨を立出て。駒モシ旦那へ此いそがしいに何を考がへてお出なさる。私にはか

り世話をやかせずと。ちつと立て差身や吸ものゝさし圖でもしておくんなさるがい。ソシテお金は寐て居ちやアならぬへよ身祝ひだに髪でも結はなくツちやア添足さんの前がわりい。おめへがまた獨りで結ふと。家暮つたく出来るから。いつもおれがいはせる横丁のお櫛さんに結つてもらふがい。アノひまやちよつくりお櫛さんと呼んで来て呉な。内に居ざア裏町の粹田やあたり居やうから。早く行けな。お作りをせずともヨ。コウおかね起きて居なよ。日が長へやうでもそちこちすると直お晝になるによ。湯へ行くがいやなら手水でも遣ふがい。ヨ。穢れくさつて居るからトいへどもお金は吾がおもふ筆七は掛物を圖頼られて言譯なく宿預と成りたれば今更あはんよしもなく胸一ツに納めかねてさしこむ痞氣をまぎらかし。金ハイ。今手水も遣ひましやうし髪も結つて貰ひましやうから最う少し如斯しておいて下さいまし。ドウモ今日は氣持が快くございませんから。草あんなにいふものをこなたもちつと打捨て置くが能い。わナ。駒さうだらうが我慢をしな辛抱のねへ子だノウヨシ。小僧や政田屋の蕪方さんに荒蕪が出来たら食事をお上んなせへとさういへヨヤレ。ひまが婿の明ねへ事たぞ何をして居るか大かたまたどこへか寄てむだ口をたいて居るだらうほんに。どれもくゞよく世話をやかせる奴等だぞト再ひ勝手へ立出でひとりかしましく罵り居たりかくて阿膠屋琴次郎が方より結納の品々とり揃へ宰領として手代桐助晝蛇添足と同道にて。朝市屋へ來りしかばおこまが奔走大

かたならず。かねて用意の酒肴を。所狭まで排列べ。不思議の御縁いく久しくと。悦びを述べざんざめかし。荷持の小僕丁稚らへ。お定りの祝儀を呉れて。みな十分の大酔をつくし。暮過る頃歸りけるに。お金は心中樂しからず。まきりに癩聚のさしこむにぞ。おこまもさすがに驚き騒ぎ。僅にうがひ手水して。せつない時の神だきも。宗旨がらとてお諏訪さま。妙見帝釋。鬼子母神。いりもむ珠數も肝要の。玉をもしもとりとめずば。添足と相議せし。趣向がぐれて婚禮の。坐付吸のぐりはまど。變らんとを恐るゝのみ。まきりに心を碎くほどに。いさせき戻る形八は。いそぎお駒に打向ひ。形添足さんへお願ひ申して妙見さまのお加持の御神酒を頂いて参りました直にお金さんに上げましやうか子。駒大きに御苦勞だつた。ずくに頂かせてくんな。形かしこまりました。もしお金さんへそれは妙見さまのお神酒。私が大躰骨を折っていたいて來た事ぢやアございませぬ。これといふもおまへさんがぞつこんお厭しいからのこと。是をお上んなさると直にさしこみが取れますトサ。早く快くお成んなすつて御婚禮の出來るやうにしねへぢやア成ませぬ。草形八カ。さつきからお駒がいろ／＼な御符だのなんだのとつて。大分服ませたがよからうかの。形是はありがたいお神酒でございませぬものを。大事なさそうなものでございませぬ。草、そうかの。そんならお金いたゞくがい、金、ハイト茶、酒をうけみせの方へ。折から草右衛門が前妻の妹お里といふ者。武藏の方に嫁づき居たるが。かくとは知ら

で結納の。祝賀を演べんとて。やうやくこゝにたどり着しに。お金か不快なるよしをき。脚半を抜き足袋を脱りて。輕薄らしくどりはやす。お駒が指圖に洗足をして。草右衛門に挨拶をばり。お金が枕元に來たりて。黒お金やわたしたよ大分鹽梅がわりいの。金、ハイ伯母さんかよくお出なすつた此頃から氣分が悪かつたが子。とり分今夜は苦しいにさつき妙見様のお神酒を頂いたら。なほせつなく成ましたヨ。大かた是で死ましやうヨ。トいふ顔つき佛つくりてくち黒、どんだ事をいふ。まかし大分苦しうだが困つたものだぞ。トいひかけてあたアノ今までは咄さんだガノ。片付から云つて聞せやうと思つて來たからせつなくともよく聞なよ。全体おめへは草右衛門さんの實子ではない。前かた姉さんが下總の千葉といふ所の千葉介さまの御一家に原太郎太夫さまといふ御方の所へ御奉公申つてい殿さまのお手がかゝつて。おめへを身持に成た所が。奥さまのお嫉妬が強いから。そのとき草右衛門さんは霜木草助といふ若黨だつたを旦那がお頼みなすつて姉さまに金子をつけて女房に下すつたのダそれからこゝへ見世を出しておめへが産れたので草右衛門さんのためにはおめへはお主様の子だけけれど。なま中おめへは悪いとおもつて。己まで隠して居たのだハナハサテハ其でございませぬか知らぬ事とつてお爺さんを孝行にもおまなんだは産の親よりまさつた御恩を思はぬやつだと思し召たらうに夫は、おつかさんより大躰不便がつて下さることぢやアございませぬ道理こそいつぞやあつかさんが諍論をなす

つた時義理のある子だとおつしやつたが。何んの事か分りましなんだに。伯母さん大分せつな
く成つて來ましたヨおとつさん達を呼んで下さいまし。伯母のお里は大きに
驚き草右衛門夫婦と共にさま〜に介抱すれども。さるべき宿世の約束にや十七の誓の花をは
かなき風に散しける此時赤坐同菴が方へ迎ひの人と同道して。走り來る弟子小伴長珍 長ヤ如
何でござすナ先生は御存のどをり留守中ゆゑ。不佞代診にまゐりましたテ 草夜中大きに御苦勞
でございます。最早とても参りますまいとは存じますが御覽じて長ドレ〜。ハ、ア寸關尺
ともに絶して跌陽も無いナこれは御大切でござすナまさか卒病でござらんから神關勞宮の灸治も
むだでござらうて 形左様サとても御工夫もございますまい素人目でもむづかしく存じられま
す 長「デゴステ何にいたせ御愁傷志からばお暇申しやうエ〜」皆々「大きに御苦勞さまで
ございますヘイさやうならトかくてあるべき事ならねば一族家眷を呼つと〜その翌日葬式の事
どもを相議るほどに 駒ア、いふ病症で死んだ事だから火葬にせずばなるめ〜跡をひくといふ
からみな〜」大きにさやうでございます火葬がよふござらう 形憚りながら私が存じますには
まだ十七や八のお娘御を何ぼ尸骸だどつて火葬にするはあんまり情ないやうでございますッシ
テ外に御子はなし跡を引く心配もございますまい 駒ナルほどもつともだ其なら土葬にするが
い〜とつひに片瀬と藤澤宿の間なる中谷村といふ地の法華寺瑞徳寺といへるに埋葬しに草右

衛門は何思ひけん其場より剃髮して千々寺参りと志さし遂に出奔したりけるとぞ。

〇堀兼の井

朝市屋にはお金が暴死に纏て交たる草右衛門が行方知らず成りしにより家内の混雜大かたなら
ザ一族縁類より集りてとせんかうせん商量の果しも付かず區々に或ひは一先此家をた〜まんと
いふも有然しては阿膠屋より預し彼顔輝の掛物の紛失せし仕埒が付ねばともかくも表面をはり
て主人が行方を尋ねべしと船人多くて相議の山へや登りし捜させよと四方に人を走らして心
あたりを穿鑿させまづ阿膠屋へも此由を告げて騷動鼎の沸くがごとく上を下へと返す中にかね
て心に計願みたるおこまは娘を失ひて阿膠屋の因由は断れ滓十二分ならねどもかねては夫を隠
居させんと迂遠き趣向より手ひまも入らず出奔したればかの添足を引入れんに。よき圖を得た
りと愁傷も。當惑顔ももつともらしく。口の先に一族等を。丸めこみたる切口上。つひに添
足を呼よせて。なほ後々の事どもをも。みなどもに相議させ。まばらく彼に後見させて。紛失
物の穿鑿の事。草右衛門が行方の事も。ひとへにお頼み申ますと。禮をいはする奸夫と淫婦。
臍を固めし如菩薩面を。かくとまらねば。親族はいとま乞して歸りけるに。お金が伯母のお里
も。涙に咽びて吾が古郷へ歸らんといひければ 駒「ホンニ偶〜折角お出なすつたに。此通り

のさうどう。まかしお金かねが死末しにすゑにお値あひなすつたは血脈ちすうの縁えんの深いうかまるしで有ませうよ。外ほかにた
 よりも無い私わたしし。相替あひからず眞實しんみの妹いもだと思おぼしめして。折をりふし便道たよりもして下くださいまし。此末すゑはま
 アどふしたらよからうぞと誠まことに心細こころうございます。そらなみだに。黒くろイエ最もうよはりめに祟たぐりめ
 とやらでお金かねには死別しにわかれ草右衛門くさうえもんさんは行方ゆくへまれずお心細こころからうと思おもふといつそ胸むねが一いつぱいに
 なります。トなみだをぬぐひていつまでも逗留どまりして居ゐたうございますけれど。一先ひとまづ此このやうすを夫うちへも聞きかせ
 てよこしませう。直すくにおいとま申ましやう。まかし今いまからお急いそぎなすつた所ところが日ひが暮くれざアお
 歸かへんなさいますめへ。なんなら今いま一夜ひとよお泊とまなされば能よい。黒くろまかし遅おそくも今いまから歸かへりましや
 うヨまた明日あしたといつても同おなじ事ことでございますから。駒こまソソならあノ形かた八はちや。貴様きさま御太儀ごたいぎだがお
 里さとさんを。お送り申まて下くだせな。形かたハイノ畏かしこまりました。黒くろイへ何なに送おくりは入りませんヨいつ
 も歩あり行いつて居ゐるから。駒こまイへ夫それでもお一人ひとりぢやアお歸かへし申まされません形かた八はち支度しだくが出來できたら直すく
 に行いな。形かたハイ最も宜よろしうございますサアお里さとさんお出でなさいまし。黒くろそれぢやアおきのどく
 だ。駒こま何なにおまへさんお心遣こころへを成なつちやア他人たにんがましうございますヨ。黒くろ其そのならそふ致いたさせ
 う。左様さやうなら何なにれ夫うちが參まるでございませう。随ま分ぶん時じ候こうをお厭いとひなすつて。駒こまハイあり難がたうござ
 います。憚はやりながら眞助しんすけさんへもよろしうさ。ハイ申ま聞きせましやうハイ左様さやうなら形かた八はちどん大きおほきに
 御苦勞ごくろうでございます。形かたなにどんだ事ことを仰おつしやります。ハイお内令うちめいさん行いつて參まります。フ

立出たていけるその日の暮方くれがた形かた八はちはお里さとが住處すま神奈川かながわ在ある伊丹屋いたみや眞助しんすけといふ醬油屋しょうゆやへ送おくりといけ酒さけ
 を給たまへ夜食やしよくを認しためすぐさまに引返ひきかへして此宿このしゆくより藤澤ふじさわまで駕籠かこを雇やひて道みちを急いそがせ斤瀨道しんせみちにて駕
 籠かこを返かへしこより一人ひとり中谷村なかつやむらなる瑞徳寺みづとくじへおもむくほどに夜は既に子の刻こゝろ近ちかく十七日の月つき白しろく
 輝かがやけども黒こ心こゝろ形かた八はちはひそかに寺てらの裏垣うらがきの崩壊くづれより卵塔らんとう場ばに忍しのび入りて四音しおんを見みまはし
 形かたヤレノ神奈川かながわから一いき急いそいで來きて盜賊ぞうぞくにでも這入はいるやうにこんな心配しんぱいへな思おもひをす
 るもかねて惚ほれて惚ほねいて居ゐるお金かねさんに逢あてへばつかりコウト湯灌場ゆかんばに鉄てつがあれはい、がよ
 しノ鋤すきもあるナ妙たふだノドリヤ御面ごめん相さうを拜はいし奉ほうつらうか。トやがて朝市屋あさいちやさるしたる石塔いしとうの上うへへさ石
 り高たかに置土おきつちのしてある。穴堀あなほりめが手ぬきをして土つちをゆるくかけて置おいたけがうぎに早はやくほれるやつサ
 ヤもちつとだぞナルほど己おれはわが身みながら。楠くすのき孔明かうめいはだしといふ智恵ちゑ者しやだなアえて世間せけんの手代てだい
 敵かたきやア恍惚はうれたのをぶん出してやたらに娘むすめを付廻ついですもんだから綿屋わたやの二階にかいぢやアねへかびんま
 やんされてむくりをにやしていは引ひばらつてなぐさんだうへ賣うりこくつて金かねにしやうなぞと冠かん
 十じゆや淺友あさとももどきでやるやつで合卷あひまきや中本なかつほんにも腐くさるほどある趣向しゆかうだか。おれに限かぎつてついで今いまま
 で惚ほれたのほの字じもいつた事ことがなし。どこまでも信切しんせつごかしであの古狸ふるたねの小指こゆびをも一いつべへはめて。
 こいでお金かねぼうをほり出だしてかの方ほうで蘇息いそげらせて温あつたかにしてやつてそれ命いのちの親おやだとか何なんとか
 義理ぎりづくで抱たいて寝ねる。かういふ腹はらたア作者さくしやも知るめへヤどつこいしめたぞとふノお金を掘出ほりだ

しやまコレガほんの掘出しものだドレ／＼
ト瓶の中からお金を引出しおられてひきつよけいに着ておたわがきまのかけいなをひるひこみ手形ヤレ／＼大汗に成たお金さん經帷子一つでさぞ寒からうのうわづかはやく土をかけ石をなをして
 二日土の中に這入て居たんだからさ活て居るやうだと見ても美しいものだなア丁度糖味噌へざつと漬た大根をとり出しておろしにする格別辛味がきついやうなもんで。一べん土中埋た蛤りやア格別ままりがよからう是をおもへばかの薬をこゝで用ゐてへが持て來ねへで強腹だ扱とまんさら冷てへ死骸をぢかに背負ふは否氣だナ何ぞ入物があればいゝトそこらを見ればしや早おけをひきつ 是がいゝ／＼ドレ／＼お金さんやこの中へお這入りよヤレ／＼おもひの外柔かな尸骸だ死人はぎしやばつていけねへ筈だがかのわけで柔かな事とみえるもしへお金さんみんながおまへを既の事火葬にしやうとしたのを私が大躰口を酸くして土葬にしたのだよ。そして明日になるも眞實に死んでまふがら。今夜神奈川へ泊るところを駈付たわしが信切そのお禮には是から宿へ連れていつて。女夫でござんす女房ともへ、ンむまい／＼。サア／＼是がほんのおこし入れ。ちつとも早うチヤン／＼お金をせなに形八が逢瀬そぐはぬ仇夢の。イヤそぐはぬぢやア大變だ。逢瀬そぐふでもあるめへ逢瀬うれしき正夢の。うまい／＼ト行んとする後の方より。誰にかあらん早桶を。力にまかせ引戻せば。是はと驚く形八が。脊中の重みにはづみを打ちて。尻居に動と倒れしがあたりの石に臍腹をうたせ。叫と一聲悶絶すれば 筆急所でも打

たかして氣絶したと見えるヤレ／＼おかねさまの御運のつよさ。けふおれが掛物の穿索に。日を暮したを幸ひに。急にお亡なんすつたとは聞いても死期にも逢ねへから。せめてはお墓へ參らうと。人目を忍んで夜を深したが。互に盡ぬ縁だらう。といつちやア自惚らしいが。是から一まづ金澤へお連申して。先頃立聞をした。かの醒薬で。蘇息らせ申上。どふかお身の上の片付はもありさうな物。夫にしても此形八め。主人の娘を薬で殺して。娶嫁のちや／＼を入れ。後へまはつてこつそりと。吾が物にして樂しまうとは。よつばど出來のいゝ奴だナ。どふかし困らせやうが有さうなものだト形八が目をまはして居るをそのまゝに赤はだかにしてかのお早おけをせおほんさへへき 是でよし／＼。殺しても飽足りぬへ奴だけれど。かの醒薬を聞かずにおくと。此御子を全く死してまふ所だから。すこしやア答をゆるめてやらう。時のかれポチン「ヤ最う八ツだそらだどれちつとも早くお連申さう。と我身へひたとお金を脊負ひ。先刻に入りたる藪垣の中おし分けて道を求め。飛がごとくに立出つ。鱒の腮や龍の口。遁れ片瀬を忠と戀に。重き腰越ゆり揚て岸打浪も見る目なき。人目の關をこゆるぎの。磯につむてふ莫告藻や。告らでも魂は行合川尊き寺の極樂も祈らぬものを山嵐の。裂しかりける長谷の町。主人の家を横に見て。限なき月や雪の下。ひろ幡雲に舞鶴が。岡の小松の千代万代も。深き縁は荏柄の神の。誓ひに漏れぬ身の明りを。立つる心の東男が。猛者と聞えし朝夷の。切通しを夜通しに。登ればやがて

陸村。武藏相摸の境の地蔵。能化の教真直なる。大道村より待宵ならで。侍従川を打渡れば、
 袖に湊はなけれども唐船のさわぎけん。三艘川村早すきて。いつか二人が六浦がた。睦ぶ思
 ひは鹽濱の。煙と立んあの世から此世の旅へたつか弓。引越女房と人や言ふ。恩義の瀬戸に立
 迷ふ。胸は一つに二ツ橋。渡る洲崎の曉鴉も。三ツ四ツ五ツ、稱名寺の。晚鐘ならぬ六ツの鐘
 に。白む町屋を出はなれて。君が崎より吾が先へと。いきせき七つ谷村なる。戀には馴れぬ芋
 助が。家へやうやく著しころ。夜はほのくと明にけり。是より後。お金つひに蘇息りて。筆
 七と夫婦になり。添足形八再び障碍を惹すと。琴次郎が事。お駒が事。お里真助夫婦が深切千
 葉の郷士らが事に至りて。諏訪の神の加護の事をも。すべて二編三編に書著すべし。なほ上梓
 の日を俟ちたまひて。めでたく関みし給ひぬかし。

氷縁奇遇都の花卷之下終

梅之春初編の序

池の凍の東頭は。土堤の朝風度てより。解とは情の下紐をやいふらん。
 窓の梅の北面は。中田圃の雪封じて。寒うざんすの閨の中。おしげり南
 枝花始て。開くは廊の初紋日。今も庭燎のむかしを廢ず通ふ神代の春と
 も謂べし。鶯は初買の人來と告て。初衣裳の麗かな門禮者の春色を含み
 梅は總花の魁を急で。初仕舞の賑かに。松の内の景色を整ふ。一座の客
 の表徳めきたる春風春水誘ひ連しは惠方の蛤大黒舞。一時に來る繁華の
 色街。連理の門松。軒を並べ。比翼の鳥追。袖をつくねて。うかれよ
 りくる大門口。くゞれば自然と氣はざんざ。いよさの水道尻までも。曲輪
 は色の大極上代。江口神崎の野暮ならず。白女檜垣の全盛にも。遙にま
 さりて時花曲。世にうたはるゝその浮名寄を。亦あら玉の春の細見五葉

の松の木蔭からおいらんおめでたうと志かいふおいらん
 右の序言は今より廿餘年以前なりける戊寅春正月五葉の松の序文に故
 人本丁庵三馬先生の志るされし妙章なるが其頃諸君の珍重せられこれ
 をもてあそばぬはなかりしが此程ははや其冊子も世に絶えて尊をする
 人もなくなりければ本意なき事に思ひたりしが友人溪齋英泉子も同じ
 心にありしかば或時のはなし草に其冊子を出して予に先哲の勝れたる
 を評ありけるにぞいよく式亭を追慕の餘り此梅の春の作意にゆかり
 も有ば頓て寫して序の代りとはなすものならし巻をつなく四方の看官
 心得たがへして必しも故人の文を掠めたりとなそしり給ひぞ古今を不
 論親疎を撰ず他の文章がゆかしさにかゝる所爲をなす事なれば免し給
 へと願ふにこそ

天保九戌戌年正月良辰

爲永春水誌

北州千歳壽 清江先生
 此の松の木の蔭からおいらんおめでたうと志かいふおいらん
 右の序言は今より廿餘年以前なりける戊寅春正月五葉の松の序文に故
 人本丁庵三馬先生の志るされし妙章なるが其頃諸君の珍重せられこれ
 をもてあそばぬはなかりしが此程ははや其冊子も世に絶えて尊をする
 人もなくなりければ本意なき事に思ひたりしが友人溪齋英泉子も同じ
 心にありしかば或時のはなし草に其冊子を出して予に先哲の勝れたる
 を評ありけるにぞいよく式亭を追慕の餘り此梅の春の作意にゆかり
 も有ば頓て寫して序の代りとはなすものならし巻をつなく四方の看官
 心得たがへして必しも故人の文を掠めたりとなそしり給ひぞ古今を不
 論親疎を撰ず他の文章がゆかしさにかゝる所爲をなす事なれば免し給
 へと願ふにこそ





鶴の
囀

恋の
歌妓於玉

後小由井の
和歌町の
唄女五八



和歌町の
雪けしき

鎌倉真河の
酒店東七

俳名
素伯

将者
春旗
雲
傘
此
落
度



北里元日のけしきは風流ならず初着の衣裳二日の支度にて其せわしなき躰は
大晦日の如し

女藝者の宿下りに等しき他所行のみぞいと珍らしき風俗なりけり爰に玉樓志ら玉の名吟に引明
や今年の鳥去年の星。と詠し時刻を待兼て里を早出の美人達多かる中にわけて愛敬深き唄女お
玉今日を一世の晴と出立いそ〜と足を早め堤を下りて程遠からぬ春寺の白観音の裏とおぼし
き長屋へいたり針業女さんの宅の障子を明て玉おぼさん明ましてはお目出度はり「チャ〜
お玉さん能マア其様に早く支度が出来たね〜最柳島へいつてお出か玉どうして〜早く此方
へ来様と思つて何様に急いだらふ卵の刻をうつ時分に目覺たものだから家の内室さんに叱られ
たヨはり「なぜだ〜一年に二度の宿下りだものを寅の刻に起ても能ぢやアないか玉「ナニそれでも
私がおわるいからだは子常住寢惚で居る者が今朝に限つて起されずに目覺たからそれでサはり「そ
りヤア當然だ子吃言をいふだけが野暮だ玉野暮といへば早速ながら七さんハエまだお出でな
いカ子はり「ナニ最早先刻から二階に待ておいでヨ玉「チャヤ左様かへなぜ私が来たのに無言で
お在だね〜寢てお在かねへはり「イ、エ今しがたまで三味線を弾てお在だヨ玉「左様か〜憎らし
い狸だヨ二階へ往ても宜かエはり「ア、宜どこぢやアない今日は終日お前と七さんに貸切だから
其様なことを言はずと七さんが待兼てお在だから早くお上りヨ玉「イ、エひよつと情人でも連れて

来てお出だと氣の毒だは子はり「チホ、最嫉妬の言初だね、かはいひのはお前一人だと恍惚
てお出だから受引賃をお呉なさいと言たら子受賃は先拂だとサとんだ手紙使だ子玉「チヤ能氣
だね、啞にも嬉しいト莞爾笑ひいそくして二階へ上る

玉「七さんなぜ無言でお在だお起なねへ七「ア、引寐むいくだれた玉「誰でもないもんだヨ
人の心も知らずに七「人の心と花の露か玉「アレサ洒落所ぢやアないヨモウく此所まで来る
のに何様に氣をもんだか知れないヨ七「先の情人が放さねへでか玉「チヤをかしな事をお言だ
ねへ何所に其様なものがあるへサアくお言なさいなお前さんこそ諸方へお出だからお樂みの
所は山々だらふけれど今日は志かたなしに義理で爰までお出たらふから誠に氣の毒だは其
様なことを言れると志んに悲しくなります七「コレ戯談だア延喜でもねへ元日だぜ玉「元日
からなぜ氣をおもませだたまくだから安閑と逢ふと樂しんでお里さんが柳島へ同伴に參らふ
と言のをやうく啞を吐たり何かして勿躰ない妙見さまへも參らないであくせくとして急いで
來たのにぢれたいねへ又今年中氣をおもませたらふ實にお前ぢやア命も續ない様に苦勞をい
たしますは七「なんの苦勞はお互だアトキニお前の言草ばかり聞て居るでもねへ此方にもいふ
ことがある玉「チヤ何が有りますユサアお言ひ被成ヨ何がいはれることが有りますへ七「マア志
づかに志ねへな澤山あるから段々に考へて言ねへければならねへトいへどもなにもこれぞ玉「なにを

私が落度がありますへサア早く言てお聞せ被成ヨ七「エマア何だア昨日の日記の文が今朝と
どいたぜ玉「チヤ左様でございますか新八さんは頼み甲斐がないねへうちへ歸つたらは思入恨
みを言つてやらふヤ七「ナニ其様にひどく言てはわりい玉「なぜござますこのこぼは女郎しゆの七「ナ
ニそりやア無理はねへ一昨日から度々持て來たそふだが間がわるくつて逢ねへのだ新公のわる
いのではねへから能禮を言がい、今朝も自家で起ねへ間に表へ來て待て居て戸が明と直に自家
の男に頼んだそふヨ玉「それぢやア詮方がない子實に抱への身分ほどはかないものはありませ
んヨ座敷が少刻遅いとをかしな顔をされて見番の帳をかぞへて見られたり又遅く歸つた朝は何
様に心配だか知れませんが此間はお前さんの内情も薄々眼付て居ますから實にものが仕にくふ
ござりますヨ七「夫なら當分辛防するがい、玉「否く左様してお前さんは他の情人を精を出
してかはひがらふとお思ひだらふ七「ばかを言ねへたどへ百日逢はずに居ても此方が心は變り
は志ねへ玉「とんだド、一だ子七「ド、一といへば斯言のがあるぜちよつと三味線を弾な玉「アイ
ト直に三味線をとつて爪弾をする口舌の中に色氣の合の手を交へ一向にとり極らぬが互に惚た
人情にて他見で看ば何の理もなきに泣たり笑つたりするが愚痴と思ふなるべし左様思ふ人は人
情に疎く萬事に早く老込で勸善懲惡の草紙もそしり給ふならんか玉「サアお唄ひなねへ七「マ
ア待ねへエ、引なんだつけく左様くト小聲にて

「はたのまやくりで口舌はすれどそれも恍惚る痴話のため
玉「ホ、嬉しい子 七「まだ斯いふのがあるヨ
「いきな男に浮薄なぞをかけて解たるまゆすの帯

「玉「ヤ氣障なねへ「七「な氣障でもあるめへ若其様な事があると唯は置ねへせ 玉「そりやア
モウ大丈夫でござりますヨ私の我慢者は他人が知つて居ますは 七「松こふに大そふ無法を云た
そふだの言事を聞いて遣ればい、餘程美男だせ 玉「イ、エたどへ業平さんとやらでも田舎源氏の
光氏とやらいふ好漢でも惚は仕ませんヨ浮薄で憎らしいと思ひながら前さんの事ぢやア勿躰
ないが親のいふ事も主人のいふことも無理と聞て居ますは 七「其様な自分勝手と思ふものぢや
アねへ親は大切主人は大事随分年季の明まで辛防をして勤めるがい、 玉「今にも年が明様にか
へ能氣なことをお言だねへ私をばたしなませて置てまた二丁目へお出のかへたどへ何と云てお
聞せでも私には逢ずに居る辛防は出来ないヨわるいものに見込れたと思つてかはひがつておく
んなさのヨ併お氣の毒でござります子 七「またお株で腹を立よマア左様は言たもの、此方だッ
てもお前ゆゑぢやア他人に面皮をかいた事も有様して暫時も逢ずに居られるものか此末ども
此方に恥をかゝせる様なことをしてくれぢやア恨だぜ 玉「それは最私に限ッては野暮なおかけ
にはかまひ人もなし何様いふ縁かお前様と斯なつてから戀路とやらの理も覺えたのであります

から他人が恍惚のを聞ても今ぢやア無理とは思ひませんが實に今迄は他人が情人の噂でもする
といやらしい氣障な事を云と思つて居ましたが男に惚て看とツイ恍惚たくなりませぬへ 七「イ
ヨ味くいふせそれだから衆人が戀情とするのだ 玉「ヤ衆人とは何で有ますエ 七「エお客が衆
人ひあきにするといふ事ヨ 玉「憎らしい言直しをしてからにマア左様なら堪忍して上ませうね
ト簪にて頭上を搔て居る 七「コウト明日は年禮に出なくつてはならず昨夜は夜通しだから寝む
くなつたチツト寝やうお前茶碗で呑ねへか此方は大そふに酔て居るから 玉「イ、エ私きやア否
昨夜は少しとろ／＼すると夜が明ましたヨ大晦日の節分は調度能様でありますねへ 七「左様よ
一年の日限で歳を重るから大晦日を年越に極て置たらよからふ 玉「あんりま表が賑で有まし
たから放生と見て居ましたら大神樂のお狐さんが來て既に捕る所でありましたは 七「左様か抱
付れへばよかつた 玉「今ツから其様な事でもあつてはいけませんヨ

これはむかしより年越の夜に大神樂來り狐の面を冠りて塵中を廻る此狐に抱付れると其年
の内に懷妊すると言傳ふまかし衆人御存じなれど遠國の看客に告奉るのみ

七「チャ／＼あの鐘はなんだモウ未の刻かノウ 玉「今日は別して日が短いぢやアありませんか
ねへ鐘を突人は寔に氣のきかない人ばかりかねへ七「アハ、また愚痴事をいふせ鐘を突ねへで
も日の暮る時は日が暮て夜の明る時には夜が明るはナ 玉「それでも時が知れると氣がせわしく

なつてなりませんものヲ寔に憎らしいほど日が短かい様だ明日はまた彈初で寅の刻から起きま
 すから少計寢度もんでございますねへ 七「サア〜御遠慮なしに爰へ寢なせへそれが否なら夜
 具を借て上様か 玉また人ぢらしが始まつた子憎らしい トまらぬの如きかあいなし 七「アイタ、悞
 つた〜 玉「チャ太鼓の音が仕します子太神樂が下へ來ましたのかへ 七「左様サ今に狐が上つ
 て來るぜ 玉「オヤ廊の内ぢあアあるまひし 七「ナニ外でも狐の面を持ってあるく太神樂が幾人も
 あるはナトいふ中に太神樂の太鼓の音。ドコドン〜イヤア御目出度ござあます。御祈禱〜
 子「も「獅、やア引イ〜 玉「チャ〜マア大そふに賑やかになつたそふだ 七「ソレ狐が上つ
 て來た 玉「アレサモウ驚かしちあア否だ子 七「ドレ狐に抱付れぬへ中に 玉「アレサ

表の方に春
 のあきんご
 △「初夢双六道中双六寶船〜

◎「本よふかん〜白酒〜引

辰巳 梅之春卷之一

江戸 爲永春水著

第一回

鶯の梅が枝唄ふ玉の春其東雲の慶び烏カラ〜カア〜若湯が出來ましたア引〜
 と五町の町をふれ歩行若湯と印の灯燈は揚阿町の浴屋より出る知らせにて若湯を揚る廓の吉例
 他所にはあらぬ戀が窟戀の彈初姫はじめそも〜二日の賑ひは是ぞ世上の元日にて 睦月の初
 日影まだ明やらぬ紫の雲の瑞もゆかりの君またひ曲輪の仲の町茶屋が軒並蒸籠は松と竹とが積
 上て竹付伊勢其光景のいさましさは筆に盡せぬ花の里さて兩側の家毎に唄ひはやすも閑麗に聞も
 目出度音曲は萩江の雛鶴菊慈童彼常盤津の老松に富本の嘉例の壽 江戸節一中節の風流より時
 節を得顔の梅の春は聲清元の當世か男女の藝者が相互祝ひかなづる賑はしさと頼て朝日の光照の
 ぼりはや遊女屋の禮まはり突出しあれば新造出し花をかさりし全盛姿抱への仕業衆先を拂ひ仕
 着施の布子をはれ着となしたる若者又不寐番なんぞ五六人づゝ附添ふはさも嚴重なる風俗なり
 軒に連ねし松と竹青々として竹藪の如く千里を遠しとせぬ三枚の駕ははつ買の客引も切らず虎
 の威を添ふるどがみ達打連れ入來る千差万別群集はいはん方もなし爰に何屋の二階なるかどり

わけさいめくおもしろさ表の方には招かれて二階を見上る大黒舞すでに名寄をはじめける
 作者曰大黒舞のせりふ花盡しの文句など二三十年以來次第に略して今いふところは片
 言のごとしされども氣短かなる人情につれてこれをどがめず爰にも略せし儘を志るして置
 のみかならず春水を難じたまふな

大「咲たり〜女郎衆のさいた簪は花かうがいの梅櫻ひらき初たる早咲は外にはあらじ此
 里のくるは女郎衆の初買。サア大盡舞を見さいナ御さかんは誰〜ヨイ誰〜エ引誰とはある
 かなりイサツサ」急とてうにござってヨイ玉屋にかくれなきこともあるかや。志ら玉の君さまを
 ドット賞ていはふたアサア大じん舞を見さいなアドットほめていはふた。東西〜。アノ白玉
 の君さまを大盡舞が花盡しにて賞まんしよ牡丹は花の太夫にて芍薬そくは菊の花。花が見たく
 は此御里へ中を通りし御君さま君さま繁昌と敬ひたてまつります。白玉さま御祝儀として新狂
 言二幕續曾我對面序幕はじまりさよふ。カチ〜〜
 是より曾我狂言よろしく察したまへさて狂言すみて例の書き
 大「千秋万歳千箇の玉をさ〜げんトいふ間に往來の見物」ワア引〜トどよめきまた〜大黒舞
 に付て行跡に二階は猶賑はまき女藝者。音松は毎度能ね〜男げいしや」チャお前惚込か。宮古
 さんよしておくれ情人に叱られるヨ宮「コウ〜初春早々のろけぞめか オぞ〜モシ旦那大そふ

な群集じやアございませんか 且左様ヨ大概な芝居ぢやア此くらゐ入はねへのオ」左様でござい
 ます宮「人群集なすこと蟻のごとしオ」チャ〜大分堅いことを云ノ宮「此せつ青表紙をはじめ
 ました且あんまり過たから貌の色が青表紙だらうオ」大方左様でございませう宮「また貴さま
 迄が禿みどりどん音吉の方を見たか禿イ、エまだ見ね〜ヨ宮「房さん音吉の方も呼でおくん
 なましヨはん新」コレサなんだヨ此子達は房さんには少許も遠慮なしたヨ宮「今に此方が大黒舞
 をして見せよふり新宮古さんと才藏さんなら其業者はだしヨ 且奥山の晝俄ぢやア大當をや
 らかしたの宮オ」ヘイ有がたふござおます且全躰宮古の先祖は山下へ出たといふ事だ宮「モシ且
 那恨みなことを被仰ますこれも私「の先祖と申ますは勿躰なくも オ」竹生島辨才天の御由
 來新造「アレサ宮古さん才藏さん早く来てお見せなましヨ 宮「イ、エいたしますめ〜旦那があん
 なことを被仰から女げいしや」チホ、きつい御立腹だチオ」立腹より一ツぶくして何ぞ始め様か
 宮「よからう〜ドレ〜お支度被成らふか女げいしや」ハイ才藏さん思ひござしたア オ」まづ〜
 お押宮「第一其盃は誰人からいたいたのだ 女げい」エこれか〜餘りお前方が多辯舌で在だ
 から私が宮古さんの前にあつたのを拾つてチチットはやらせ様と思つてサ オ」盃に氣の付こ
 とは染さんに限るチ宮「さかづきではね〜酒好だらうオ」マア一盃きこしめして憚りながら且
 那へ一ツ獻じませう且「サア〜宮古仲直りに肴を遣らふト才藏宮古の二人へ志 且才藏は仲人役だ

才宮「イヤこれは有がた且山や豆腐といふ洒落はよもやいふめいのオ」サア大變だ山吹色は猶古
 し有がた山猫且くはいらしいも今はねへせ宮「エナニございますかとも且清元の淨瑠璃にか
 宮「エ左様先くいを被成つちやア能洒落や地口は出ませんせオ」イヤ洒落も地口も今のよりか
 古いのが能ござります子マア昔から能人の口の端に且「コウ」又何か老人の言のを覺へてな
 らべたてられちやア御免だせ宮「左様」才藏が聞覺えて居ますのは谷中能所池の端。合羽で
 ざれや雪空オ「ナニ」まだ能のが幾等もありやす。エ、ふり新「アレサ其様な少事もわから
 ないことを言なんせすと早く何ぞお始めなんしヨ」オ「ヘイ」成程御尤だ此洒落の時分を此
 方も知つて居ると杖を突て歩行のだ宮「イヤ」左様でもあるめへ此方と違つて其所は餘程時
 代が古いからと此間左様言たぢやアねへか。まんぐあぐいの流行唄はおれが二十三四の時分に
 はやつたと聞いて聞せたぢやアねへか此方が老年に聞たらば四十年程以前に流行たといふから左
 様して見ると其方はモウ六十四五才になるせ且「アハ、夫にしては少し若いのオ」モシ「そ
 れは餘り宮「イヤサ餘りでもねへヨ随分年丈には見えるテ禿」そんな事はばかりいはずと何ぞして
 見せなましヨト新造禿はせり立る且「サア」仲間割を志ねへで早く何ぞ遣らッし「才宮ハ
 イ」「畏りました宮」まづ最初いたしますは旦那さまがた御存じ古めかしふはござります
 れど松盡しの所作事お初まり左様。サア「女子ども三味線弾ヨ」女げいしや「マア」大そう尊

大だねへ
 是より才藏宮古太夫兩人かけ合の可笑女藝者お染お民が三味線その賑はひは筆に盡せぬ里
 の春此家のみならで家毎にふし面白く笑ふ聲繁昌いはん方ぞなき其賑はしき風情をば現に
 見渡すことなれど裏表ある戀の樂屋はまさかちよいと知れ難かるべし

第二一回

爰に何屋の裏なるか貸長屋の隅の家の障子をあけて駈込藝者年のころ十七ばりまだおさなめくお玉
 「駈て来たから寔にせつないヨ茶碗を貸てお呉なトいへば此家に来て居た二七「今茶を呑でる所だ其所
 の引出しにあらア玉」アレサ出すのが面倒だからサ七「エ、ぶせうな女だノウサア詮方がねへ貸
 して遣らふ玉」アイありがたくもなんともないチアノ老女さんハエ七「今曉町まで往た玉」そん
 ならお前さんが留守居か「七「氣のきかねへ役だが其方故だと辛坊して留守居をして居るのだ
 玉」左様か「堪忍被成ヨさぞ淋しかつたらふねへト嬉しそふに莞爾笑つて男の顔を見る七「先刻
 呼に遣つて間があるかアなかつたか玉「イ、エお客は寝てままつて次の間で衆人と呑で居まし
 た所だから七「今日は「文字屋の仕舞か玉」ア、お店の七「お店とは玉」アノ路井のお店の衆て晝
 仕舞サ七「左様かあすこの家は路井のお客ばかりで他の客は斷りといふことだが能株だのウ

玉「ア、お店ばかりで澤山でございませすのサ左様して見と路五屋は大家でございませすねへ七そりやア日本一の商人だものヲ文嘉の神棚にやア路井大明神と崇めて朝晩燈明を上るといふことだそりやア左様と座敷の都合は能かノ玉「ア、長八さんの言には客人の寝て居る中泉湯へでも這入て支度でもしてお出といふから調度いと思つてお松さんヤ何かと同伴に其所まで来て家内へ歸る風俗をして又此方へかけて來たもんだから何様に胸がドキ／＼仕ますだらふそれにモウ揚阿町の裏へ這入るのは何だか氣兼でございませすチエ七「それぢやア安閑ちやア居られめへゴ「ナニ宜ございませすヨお光さんによく頼んで來ましたからあの嬢が宜時分には呼によこしてくれませすヨの相仕と見えたり七「それぢやア奇妙だ玉「それだから此間の相談を能極ておくんなさいましヨ何でもマア私が言た通りになる様に七夫だつて左様都合がうまく出來るものか玉「それでもマア意地わるのお初どんにいじめられるのが悔しくツてなりませせんものヲトいひながら涙をホロリと落す七「なんだ泣のか正月から其様な貌をするものぢやアねへ何のお初は何だ下女ぢやアねへかあいつが意地のわりい事を仕やアがればまた此方も仕様があらアナ玉「左様でございませすけれど此間中から私とお前さんのことを目を付きて居ますは憎くツてなりませんヨ七「左様かそれぢやア此座で咄しを仕て居ても心づかひだノ玉「左様サ二階へ往ませうぢやア有ませんか餘り端近だチエ七「此所とはし近いさまづ二階へドバンツ玉「とんだ大黒舞だヨ

七「コウ／＼此里で育つたお里が知れらア玉「なぜへ七「なぜといつて大黒舞ばかりを役者だと思つて居る様で外聞がわりいたと聲色が似ても似ねへでも芝居の偽をする節にやア音羽屋とか成田屋とか賞ねへナ玉「ハイ御免なさいませしお前さんの御無理は御もつともト言所へこの家の老女は歸り來りて老「七さん大きに有かたふございませすチヤ御玉さんお出だチ玉「おばさん先ほどは有がたふ老「アイ／＼間が悪かアなかつたかエ玉「イ、エよかつたヨ老「左様かへそれでも此所では心遣ひだから二階へお上りな又お初どんでも來るとわりいから玉「ア、左様仕ませうと七さんお出なさいな私やア先へ往ませすヨ七「コウ／＼まづかに上んねへナひどい足音だぜ生醉にでもなつて居るのか玉「何時お香せ被成たエ七「い／＼といふとヨ落こちねへ様に上んねへ玉「お前の外には階子からでも落こちたことばございませせんヨ七「アムウわるく洒落るぜ老女「お玉さん例の所にあるから出しておくんさいヨ玉「アイナニ今日は入らないヨト笑らひながら二階のより口から顔色にて七に早く上れといふ思ひ入れをして居る折から表ての方にて商人の聲

くわし賣「うまいの根元はくれでございとすウ引
 大きな籠を荷ひて諸方を歩行菓子賣なりそれは借置お玉と七三郎の始終はいかに次の巻より辰巳の段を讀て佳境に入るべきのみ

辰巳 梅之春卷之一 終

辰巳 梅之春卷之二

第三回

咲梅の花の薫りは新造の袖うらまでも染て色こき 玉「チャ大そふに能匂ひがするねへお前さん
 匂ひ袋を持ってお出被成のかへ七「なんのいやみたらしい其様なものを男が持つてたまるものか
 玉「イへモそれでも梅香の様な匂ひが仕ますもの 七「ハテナお前の髪油の匂ひぢやアねへか
 玉「ナアニ私の髪は櫻香でござるますものヲなんでも梅の匂ひに相違ござるませんヨ 七「ナニ相違
 ねへとは何の事だ男の言様な口のきゝ様だ素人作者の中本を讀様だぜ 玉「なんぞといふと憎ま
 れ口をおきゝ被成ヨ 七「他の者には憎まれても構はねへお前に爲かはひがられゝばいゝハナ
 玉「チャ其様な嬉しがらせをお云でない餘計に氣がもめますヨ 七「なせ〜 玉「二丁目のも其様な
 ことを言てかはひがられてお出だらうと苦勞になりますからサト莞爾笑ふ其笑くぼは喰付度ほ
 どかはゆらし 七「よく種々ないひぐさを考へて居るノウ 玉「それは左様と梅の匂ひが氣になり
 ますね〜 七「ほんにノウ能薫りがするノ又いゝ心持になりて〜様だドレ 玉「アレサヲホゝゝ
 、七「なんだ窓の障子が少し明て居るからゝるのだアナチャ〜 梅の匂ひは此所からだヨコレ

はぬかへす様な動氣だイヤこゝに能薬があるからやらふ 玉「ナニ薬はのまなくつても宜ござわ
 ます七」それぢやア針をして遣らふか 玉「ヲホ、否なねへトいふ中に七三郎は薬の紙包を
 出して 七「サア此丸薬を服用 玉「ヲヤ何の薬だか寔に能匂ひがいたします子エト口にふくみ
 玉「今しがた梅の匂ひのしたのは鉢植の梅計りぢやアございませんヨ此お薬の匂でございます
 は寔に氣が正然といたしますヨ何といふ薬でございます 七「エこれかこれア酒の酔を醒した
 り毒を消たりする妙薬で其外萬病に利良薬だからお前に所持して置ふと思つて買つて來たのだま
 ア第一匂ひ袋のかはりにもなるぜ 玉「それは有がたふ何所のでございます 七「其能書にくわ
 しく書てあらアナ此頃ぢやア通人も持て居れば御殿方の女中衆は不淨除だといつて貯へて置そ
 ふだお前なんぞは無理な酒も呑だり持病の癩もあるから絶ず懐中して居てくんな苦勞になるか
 らト薬包をお玉にわたす此節はさらに浮たる氣色なくさも信切なりわづかな所爲なれども如
 斯場が人情の秘傳なりまかし是よりか小遣ひに仕なヨと逢度毎に金を遣つて置が萬病の妙薬な
 らんなど批評する看官はいまだ眞の人情同志の寔にあらざ心ざしは松の累をも貰つて嬉しいと
 思ふが頼母しき人といふべし
 さてもお玉は七三郎が今にはじめぬやさしきに嬉しさいはん方もなくはなれどもなき戀の情な
 らふことなら此儘に此家が兩個の宅ならば朝夕斯して何様してと家根から近く黒烟染し狭き二

階の破疊それさへたらぬ薄縁に下は庭の交りたる三疊半を玉の床と樂しみながら裏借家をうら
 やむもまた哀れにて寔を盡す戀の情のはかなきこそ實意も見えて互に嬉しきかななるべし斯る
 所へ此家の障子の外へ拔足してひそかに伺ふ一人の女年齢四十歳近く少し四角な顔にて色黒く
 甲斐くしいといはれるを自慢にするのみ心に色情はあるとも相手になる物好の男もなく主人
 の方に久しく居るを鼻にかけて萬事を出過てさばぐ下女の功を經たる愚婦他の落度を口やかま
 しく誇り傍輩の非をかき出して告口をするをお株となしたる胸わろのお初かゝみやまとは引か
 へて親方思ひの主倒しといふ女なり出しぬけに障子をがらりと明てはつ「私どものお玉さんは此
 許へ來て居ります子ばど、イ、エはつ「ナニ居ませんことはございますまい此所に彼婦の駒下駄が
 ございますとぞぞ呼んで下さいませし座敷先から諸方遊んで歩行ちやアお客へ對して濟ませんと
 いはれてさすがに隠し兼氣の毒そふにてばど「ヲヤホンニお玉さんは今お出だつて何時の間に
 二階へお上りだかサアお初どん一ツぶくお上りトたばこを付けばど「今ちよつと小用場を貸て呉れ
 ると言てお寄だツけが大かた顔を直しに二階へ往なさつたらふといひつゝ二階の方へ向て聲大
 きくばど「お玉さん内からお迎だヨはつ「お迎ひもねへもんだお玉さん早く下なせへ客人に仕舞れ
 た骸で正月ひまから樂遊びもあきれらアとんだ鞠唄ぢやアねへかト悪口をいふ其中にお玉は
 早々二階から下て來りお初にむかひ 玉「ヲヤお初どん勘忍しておくれヨ今お直さんの所へ此間

頼んだ常磐屋へ進物のとで相談に寄つて子歸り掛に小用に寄つたのは一文字屋から人でも来たかへはつ「お直さんの宅にも小用場はあつたッけ其様言譯は後にして家業がかんじんだ早く往なせへ男と女の入籠の小用場もねへもんだへン男も男大金を出して抱へておく他家の藝者を我物にして餘りむしがいい。元日のことも大概知つて居らア今にみじめを見るだらうがサア早く往な近頃まで烟草盆の掃除を仕ながら袂から肉桂と李實を出して喰ながら衣類の綻びだの縫上が下たのど他に世話ばかりやかせた兒女の癖にやうく座敷一ツか二ツ賣様になつたどつて唄女顔も押が強へトはトまめるお玉は身にあやまりが玉お初どん其様なに耻をかへせずともいへぢやないかへ正月から延喜でもねへヨはつ「此様な所へ来て居るのも延喜がよくもあるめへそれともゑんぎが能のかむしのいへ玉ア、悔志いヨウト繻絆の袖をくはへるはつ「チヤ何が悔しいのだ其様に悔しかア宅へ歸つてから旦那か内室さんの前で此方がいふ事が無理かお前のいふとが無理でねへか理非を付やせうサアく玉今いくは子さふふしいはつ「へんおれが了簡しねへ日には随分此宅もさはがせるのサト落度を見込で遠慮なくお玉をばじめ老女も七三郎をも居たたまれぬほどにそしるぞ口惜しがるべしお玉はさすがに年も重ねば抱えられたる主人をおそれいは目下の只の下女にいとほしたなく言はるゝを堪へて下る水流板方なくく駒下駄をはく間もせり立下女おはつはつ「サアはやく往ねへかナのろつくせへ嬢だせそれとも座敷を断はつて

見番へ用事札をつけ様か玉お座しきへ行は子玉まとにやかましいヨはつ「いふがわるかアお座敷をよして旦那の前へあゆびなせエきゐた風な玉其様にいじをわるくすりやア此方も了簡があらアト小聲にいふはつ「なんだエ口小言をいはずと早く往がいへトせり立へ歸り行く
 ○前文にもいふごとく此お初はかえつて主人のためにならず是より七三郎の無念とお玉の悔しさ堪忍なりがたく主人をそまつにする氣のなかりしかどもさすがに戀もいぢづくにて此後いろく内談してお玉は終に辰巳へいたることゝはなりぬ

第四回

夕ざれば汐風寒み陸行の客の通ひ路もはや絶て一の鳥居のかげ物すごく折節聲のするものは茶飯豆腐の御膳籠その賣聲と佃より和歌町歸る素見の鼻唄いと淋しき真夜中を平氣でぶらぶら下から中裏の方へ行男其名は吉五郎大なる聲にて
 「お染はじつと顔を見てそりや何いはんす半兵衛さん伊勢の戻の相宿が結ぶの神の引合せ二人が鹽治の御家來で幼年時からなまなかに手習までも一ツ夜着枕ならべて寝たれども立し誓ひは破られず四海波風治りてやはらぐ國も異國もかはらぬ戀の路芝をたどりく来て來りける「二人の商人柴折にかしり此所明てもらひませう左様いふこそゑは白藤さんそもや二人

がなれそめは四ッ谷ではじめてあふた節好たが因果すへかけてかはらぬ中の 睦月に祝ひ

かなづる舞扇千代に八千代の壽こめて深き契りぞたのしけれ

吉「ア、引今夜は何だか淋しけれど」

「チイ、吉ッ子何所へ行た中裏の使か 吉左様ヨ沙留ま

で遅ウク遣られたア」

「左様かその代りに唄女衆の文なら高直とれるだらう 吉ナアニ取れても

夜は小遣へが入てならぬへ」

「アハ、そりやアおめへが天獄羅の立喰や何かをするからだ

吉「それだつて吞ず喰ずにも歩行ぬへものウ」

「左様ヨナア寒ひと猶小遣が入ナア 吉「最買喰

を今年止らア」

「トいつても其節になると又喰たくなるぜ

吉「それ其時のうろたへ者には誰がしたみんな私かたべるからッ

「アハ、相かはらず出たため濁るりがお株だよウ 吉「エ左様ヨ癖になつて止られぬへ

トまた雑交の淨るりを調子はづれにうたひつ、中裏の木戸へ遣入る一人は自身番の横町へ曲り

行されば路のかきがら老ろく光りて犬の聲も夜風にかすみまゝとふけわたりたる和歌町の

往來只一人の人影なし折から条本の二階にて

「ツイ染やすき廓の水」もしおらんへ〜といつたばかりで跡先は戀のくらやみ辻行燈の

かけで一夜はたちあかし「格子のもとへも幾度かあそばされるのは初めから」心でせうち仕

ながらもしやとおもふこけみれん晝のかせぎもうはの空鼻のさきなるほふかむり「吹け

ばとぶよな玉屋でもお屋敷さんのお窓下。中略「折もにぎはふ祭禮のだしのきやりも風につ

れ「いともかしこき御代に住むお江戸めぐみぞありがたき

●「由さんサアお前の番だヨ 櫻川由「イエ〜」まア御遠慮なしに數多お語んなさるまし ●「イエ

〜私ヤア否お凌の席ぢやアあるまひし數多お語りもよひね〜サア私が弾からお語りヨサア

トちやうしを合せて一 ●「サアお客よりお前に勤めて一中節を弾て上るハチ 由「何様して〜」一中ど

ころかまだ二中だからなか〜お座敷では ●「チャ〜」其様に外見でなひ今夜アお前の情人の

榮さんがお出でなひからおかしな聲が出てもよいハチサア〜且那「どうして〜」由次郎の一中

ぶしは越中と覺へた人の聞にはよからぶがマア今夜はお預に仕よう 由「モシ且那これは餘りな

御あいさつ子何か由次郎に御意恨でも 且「アハ、意恨ぢやアね〜異見をいふのだ此間此方が

お前の留守に寄ッたらばお前の所のお熊さんが左様言ッて頼んだものウ何様ぞお座敷でひよつ

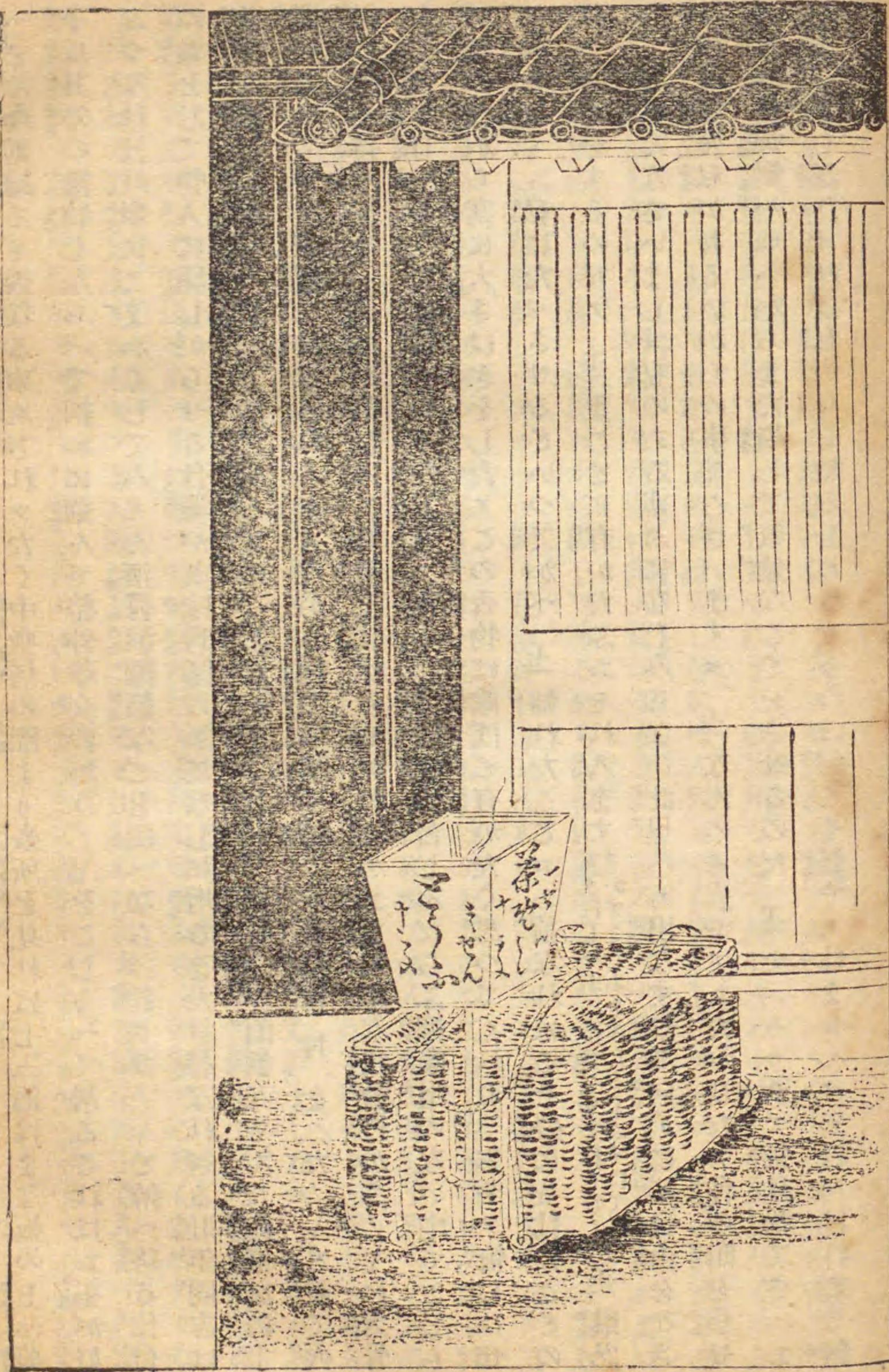
と一中節を語ると申たらばよウ御意見を被成て下さいましエ現在お前に惚て居る内儀さんの

取へさ〜小言同前に聞へると思はれるものチ ●「チホ、ハ、ハ、能氣味だね〜下笑ふ聲さ〜小

夜ふけて手にとる如く聞ゆる軒下 茶めしや御膳お豆腐でござぬ。こりやア淋しくなつて來た最

う今に丑刻だらふとんだことをたのまれて大きに苦勞をするやつサドレチヨツト下の方へでも

下ッて居様ト獨言いふ夜商人荷籠かたげて立上る折も此方の中裏より前後うかいひ欠出す女夜



目にも知る、唄女の姿小袂を高く取手も足も雪より白きうつくしさそれに似合ぬ、藁草履の新しきを音せぬ様にはきたるか但し見番にあづけ置駒下駄がとられぬ隠密の私用と見えたり茶めしや、「モシお玉さんとやらか子玉」チヤ誰人エ茶めしや、「ハイナニ河岸でお前さんが夜ふけに出るはづだから氣を付けて送つて来てくれると被仰ましたから先刻から此所に待て居りましたわづか一町か半町でも夜中には不用心でござぬます玉」チヤ左様かへ嬉しひねへそれぢやアちよいと見ておくれな茶めしや、「サアまゐりますト荷をかつぎお玉を先へかけたさせて後より見送り横丁の方をさしてぞいそぎけり。そもく路次より欠出したるお玉といへるはいかなる女ぞこれ則ち戀が窪の藝者なりしお玉なりいつしか彼所をいとまをとりて此里へ來りしなりもつども手輕き事にてはなしと知るべし玉七さんお前様何をしてお出被成ンだエ私やア此様に苦勞をして欠出して來るのにたい表を明て家内へ入たばかりで些もかまつてもおくれでないね、今夜ア來ちやアわるかつたかへ、七、左様よ今夜は少し待て居る女が來るはづだからそれで種々宵ツから氣をもんで居るんだアナトいはれて戯言とは思ひながら油斷ならずと氣にかゝるは惚た癖万一其様なことがありはしまひかと癪にさはるゆゑ玉」チヤそりやアわるかつたねへそれぢやア折角來たんだけれどもお邪魔になるとわるひから私やア直に歸りませうヨト火鉢の際を立て出口へゆけども七三郎は平氣でかまはず勝手元居るゆゑお玉はいよく悔しく表へ出んと思

へども今更歸るも否なるゆゑぢれつたく中敷居の際より臺所を見れば七三郎はまな板の上へ茄子瓜其外の漬物をならべて細かに刻んで格外雑交のかうくをこしらへて居るこれはお玉が好ぶつなれば町寧にこまかくしてみりん酒醬油鰹節などを側へならべ置やうくと捨へ終る仕付ぬ業をして情人に嬉しがらせる仕業が美味珍膳のもてなしに増るまた世帯なれざる壯年同志は此様なことが樂しみになりなぞするものならんか 七「ア、引ヤレ、面倒なもんだ此様なに手間がとれちやア商賣にはならぬへト言ながら蝶足の膳へ種々なる蓋物 井をこた、と載て火鉢の際へ持來り 七「サアお茶を入れてお飯を食様ぢやアねへかお前の好きな掛合のかうくに大骨を折たせ日中のうちに買あつめたり貰つたりして何様に苦しんだらふ練味噌のない宅でこしらへるのだから寔に大さはぎをしたアこの香物は餘ほど有がたく思つてくれねへぢやア悔しひぜ 玉「アホ、私にたべさせるといつてかへ 七「知れたことヨお前なればこそ夢にも仕たことだねへ所爲をするのだア 玉「まことに有がたふおそれ入ます トうれしそふにこりさわらひし 玉「堪忍しておくんないましましヨ私のあるゆゑになじみもなひ此里へお出なすつて何かに不自由をなさるのには不殘私があるいからの事てございませすヨ 七「なんのそりやアおたがひだア仲の町を引せてもおれが働がねへからまた斯して氣兼ねことをさせるのだ 玉「ナニそりやア最見捨てさへおくんないさらなひければ私が身をくるしめるぐらゐは何とも思やア仕ませんヨそれだけれども何

様ぞながく彼家の抱へにはなり度ないねへ 七「エそりあア案じねへがい、來月は仕掛の金と外に借た五兩を是非半金は返すはナそしてそれまでは雑用なしで座しきのを少しも取まひといふ對談で向ふにも徳を付けて置から金の利は安し今にほんたふの自業にしてやらアナ 玉「何様ぞ左様して安堵したいねへ寄場でも傍輩は衆人親切なりまたお前の事も大略知つて居るからかまはない様なもの、お部屋へ遠慮だから斯して來るにも何様に氣がねだか知れませんハ 七「左様だらふヨまた藁草履か 玉「アホ、餘り色氣が有ませんねエ 七「ナニわらじをはめて來たツて愛相が盡るものか 玉「アホ、憎らしひねへなんぼ私がばかだといつてわらじをはいて來られるものか 七「どふして、娘や若ひ女が夜ひとりで歩行にやアどんな形でもしてみちの用心をするがい、此方アお前が夜中に一人でくるのが苦勞で、ならねへから今夜ア豆腐屋を頼んで置たア 玉「ア、それだから私が外へでると聲をかけて後から送つてくれましたヨ 七「ナニありやア戀が窪に居た節から知己居る男だア此間の晩に林藏や磯八が來て遊んで居る節に洒落に豆腐を買といつて呼込とあの男ヨあつちに居る時分揚阿町の老女さんの家で心易くなつたアな 玉「左様でございませすか私やアまた隠れて外へ出ると出しぬけに大きな聲でお玉さんと呼ばれたからハツト思つて胸がドキ、仕ましたヨトいふ節土瓶の湯がチイ引アウ引 玉「アアお茶はへ 七「火鉢のまたの指箱にあるヨ

辰巳 梅之春卷之二終

淡々たる筆致で、梅の春巻の二巻を終る。主人公の心境や周囲の反応が淡々と描かれ、物語の余韻を残す。

辰巳 梅之春卷之三

第五回

再説於玉は思ひ合ふ七三郎と二個して戀が窪をばやうくと立退たれども彼是と金の入目の多ければ儘ならぬ身の上を無理に自業となりおふせ今は其名も玉八と土地に習ひし唄女の名目於の字名ならぬは殊更に婀娜めく風俗又一際媚もましたる美麗座しきは元來戀が窪の根強き仕込諸藝の丹練彼里にても惜まれし業を意氣なる和歌町の間程に合せし程のよさ只場所がらに移らぬ癖はお客へ對して挨拶の叮嚀なると人品の温順すぎたが疵なるべし

○ 曆より餘程間のあり花盛 春 騏

○ 短夜やありく残る筏の火 素 伯

玉「チャ／＼嬉しい何時の間にか聯が出来ました子昨夜も今朝も氣が付ましなんだハ、セ」その筈サ今しがた真河の東七さんが持してよこして呉被成たのだものヲ玉「チャ葉利眞の東七さ

んかへ 七「左様ヨアノ素伯さんの所からお呉被成たのサそれはいゝがお前の方で彼一件の金子
 が出来様かノウ 玉「エア、何卒してからこしらへる氣だが子淫情なしに借るのだからお客の方
 でも俠客の人でなければはなしても言無甲斐そのお客を待て居るが子是非今日か明日はお出の
 に違ひなひヨ 七「左様か何卒お出被成たらばよく頼んで呉ねへ約束は今日迄に三兩返すつもり
 だから今に催促が来やアがるだらふに今お前が此所に居る中に來たらば今日は留守だと云て呉
 なヨ 玉「ア、左様言ますヨト云ながら湯上りなれば鏡臺を出して化粧にかゝる 七「アノ玉付
 もねへ事を聞様だがお前は仙さんといふお客の座しきへ出た事があるか 玉「エ仙さんとへ何所
 のお人でありましたッけ子 七「アノそれは天満町の材木問屋の旦那ヨ 玉「ア、左様ノ氣の輕
 ひお人でよく戯言を云て居るお方かへ 七「ム、左様ヨ随分萬事に行届いて居ながら尊大なひで
 温厚い人サ 玉「ア、そのお方ならば此間山の松本で壽樂さんが引合して呉ましたはアノ何だと
 サ箭村下の山口へ多分遊びにお出でお筆さんといふ意氣な妓が馴染だといふ事御座いますは
 七「左様ヨ志かしあの仙さんも家内には美麗お内儀さんがあるし秋葉町のは實のある女だとい
 ふのに邪見らしく取扱ふお筆さんが慈愛といふは何様したものだか 玉「アヤそりやアお前様の
 お言の事だ各々の好不好で御座いますは子私が調度お前様に否がられて邪見にされるのを
 もひ切得なひで質濃慕ふと同意事てありますのサ 七「へん左様いへば此様も同様に氣が間違つ

て居るのだア今にも面白ひ人が出来てハイ左様ならといはれるかも知れなひのに本宅を捨て此
 地へ来て苦勞を餘計にするのも他人が笑つて居るだらふ 玉「アヤお前様マアなぜ其様な事を言
 つてお呉被成ので御座いますエお前様こそ廊にお出の時分から此地の唄女衆の事ばかり賞て
 お在被成たから此頃ぢやアモウ私をば否がつて詮方なしに世話をしてお呉被成ンでござります
 はそれにまた生質女にやさしいのがお前様のお株だから此地の唄女衆の中でもお前様を目がけ
 て居る奴が二個ばかりあるから油断がなりません 七「茶の湯の好きなひねった妓どもならばな
 んぞ遣ひ道があつて此身を用るか知らなひがマア人間並の女郎歌妓ならば相手になつては呉な
 ひから其様な取越苦勞を仕被成な 玉「オ、エ其様に安目をお言のが愛敬になつてなほ惚手が出
 来るから案じられてなりません憎らしい 七「憎らしくは最初に慈愛がつて呉れなひければい
 いのに今になつて憎らしいといふから他に慈愛人が出來たらふと氣にかゝるの ス 玉「なんとで
 もお言被成ヨ何様でお前様にいじめ殺されば本望だと思つて居ますから餘所他に何様ないゝ
 男があらふが振向て見様ぢやアなし少しも他見かざりを仕様といふ心配もなひから氣がもめる
 様でも實は樂でござりますは 七「それでわるかア止か餘り此身を見下るノ 玉「アレサ左様ぢや
 アありませんは子紅白粉を付て化粧を仕なひでもお前様は見すてゝはお呉被成まいといふ心持
 で居ますといふンでありますは子 七「何をいふか前後の言葉が種々に變るから安心して居られ

ねへ玉「チャ何様せう又白粉が濃付すぎたト眉はきを濡らして拭取る様にして氣をもむを七三郎は火鉢の灰を掻ならして火を積ながらちよひと見て七「コレサ落さずともいゝはな其様に濃つきは仕なひヨトいへば背後を振向て莞爾と笑ひ玉「チャそれでも此土地で衆女が付るのは此様なではありませんものヲ白粉が濃と笑はれますは七「それ見なせへ他人が何といつてもかまはなひといふ口の次から其様な氣がねをするでは無か他人は何と言ても此身が白粉の濃のが好だから能ではなひか玉「ハイ〱左様ならば今日は此儘で置ませう七「今日計り此身が言通りで後日はまたさからふのか玉「イエ（以下原稿一枚落丁）出来て頼んだり頼れたりするか知れな
いものさ子それだから私なんぞは敵の様に思ふ人でも顔を赤くする様な事は仕まひと思つて居るはそりやア左様と七さんは實正にお留守かへ玉「ア、今朝はやく餘所へ出たはは〱左様か子
それぢやア歸つて來なさるまで待て居様チツト退屈なわけだが詮方がねへ玉「チャお初どん何
の用だか知らなひが待て居ずともまたお出な何時歸つてお出だか七さんの歸りは滅多ではなひ
ヨは〱チャ左様かへそれぢやア直に歸つて往たらばお前がたの勝手には宜らふが私が方の都合
が悪ひからマア歸らずに明日までも明後日まで七さんの歸るのを待て居ませうヨそして玉
さん以前の様に私の事を殿付にしてお呉でない今ぢやア仲之町の奉公人ぢやアないヨ玉「チャ
〱左様かへ些も知らなんだヨそして當時では何所に居被成のだへは〱エ今かへ當時はマア七

さんの知つてお在の金貸の欲兵衛さんの所に居ますヨそれだから今日は夫の名代に七さんへの
貸を取に來たのだけはト言はれてギツクリお玉より蔭に聞居る七三郎呆れながらも息を堪らして
忍びける玉「チャそれではお前は欲兵衛さんのお内儀さんになつて掛取にお出のかへは〱左様
サお氣の毒だが今日は是非居催促をして行なひければならなひの日は玉「チャ〱それでも今
日は歸りの程が知れなひからマアふしやうして歸つてお呉な何れ此方から七さんを上様は子
は〱イ、エナニ何時になつても宜から待て居ませうヨ小兒どもの使ぢやアあるめへし留守だと
いはれてハイ左様ならばと歸られるものか子そしてまた七さんも餘りむしがいゝハ子他人の金
でお前の身を自由になる様に此様な家に二人仲能志て居ながら借た金は返すめへと其様な
勝手ばかり志ては他人が承知しなひハ子何でも今日は濟かたにして貰ひますのサトいはれてさ
すがに隠れて居ても堪へ兼たる短氣の生得七三郎は次の間を立いで七「チャお初どんか何しに
來たのだけ〱チャ〱先刻から隠れてお在のかへ大概左様だらふと思つて居ましたホンニ欲兵
衛が左様申てよこしましたといひながら懷中から證文と請取書の通ひ帳をどりいだしは〱今日
三兩およこし被成お約束だから請とつて來ひと申しましたトいはれて見れば證文ゆゑ腹立なが
らも人が違ふから掛合をせぬといはれもせず悔しながらもお初にむかひ七「チャ〱お前は欲
兵衛さんのお内儀さんになつたのかへそれはマア不躰ながら仕合な事た子トキニ欲兵衛さんに

左様いつても呉んなせへいづれ最二三日はつゝい、エ何様も左様は出来ませんヨ急に私の方でも
さし支へた事があつて私の知つた所へ無心合力にさへ遣るくらゐだから是非間に合して貰ひ
申ます五兩や三兩の金はち玉さんの顔で直にも出来そふなものだ慈愛御亭主の爲だから何様な
形容をしてもこしらへ被成がいゝのサトあくまでも二人を眼下に見下しあざける様子七三郎は
いよく悔しくセ、コウお初どんおんまり人を馬鹿にする様な事を言つておやんな欲兵衛どんに
借た金は相應に利を付けて置たのだア。ナニ五日や十日遅く成たと言つてむづかしいはれてな
るものかばつ、チヤ左様かチモシ其様ならば此證文は何様したのでございませぬ先月の晦日まで
にのこらず返濟が出来ずばち玉さんを渡さふといふ約束で判が押してありますせへん今日までは
モウ日が延過て居やす丈夫でも左様言つてよこしたから金が出来ずばち玉さんをつれて行やせ
うト齒に衣着せせず言出すを先刻よりして表の方に聞きたる七三郎の友達彼の俠客の噂ある眞
川の藤七俳名素伯は聞かねて其座へこそは立入ける

第六回

入相の鐘に花ならで人々散りて物淋しく花は志づかに色深く月あきらかなる彌生の中旬梅若塚
の念佛供養果て往來の稀なれどこゝに隅田の渡し船馴てはさして苦にせずや牛島かへる乗合の

中にまじりし一人の處女が前後を視かへりつゝ思ひありげに溜息を吐て涙をうかめし風情此方
の間より月あかりにすかしながめる者ありしが彼娘にむかひ 男、チヤお前はお柳さんぢやアな
ひかへト聲かけられて驚きつゝ同じく月かげに男の顔をすかし視てり、チヤ、七さんか、私
やアピツクリしよしたは、セ、私も最前からハテ似た娘が舟に乗ると思つたが何様も日の暮たの
にお前が一人で歩行わけがなひと思つて居たがよく、見ればお前らしいから言葉をかいたの
だり、左様でございませるかお前様は何所へお出のでありますへ、セ、エ私ア久しぶりで此地の方
へ来たがね急に寺島の別荘へ茶番狂言の手傳ひに頼まれて行のサお前はまた今時分何様して獨
身船へお乗のだへり、ア、ウ、私は子急に實正の宅へ行んでございませすが田甫道が淋しひから行
ませんはト左も困りし様に察せらるれば慈愛相に思ひしゆゑ、セ、左様かそれは大事だ、ウ、此方
が近所まで送つてあげ様トいふ中にはや船は須田の棧橋に付きおのがさま、別れ行、セ、ア、ノ
お前の實正の宅は堤を下りて直だッけカト云へども後背で返事をせぬゆゑ振返り見れば十間
餘り後にち柳は俯き居る風俗なれば七三郎は立戻りながら、セ、チヤ、何様したのだ足を痛
めたのか、チヤ、血が出るの何で切たのだト聞ばお柳は泣聲にてり、ナニ今切つたのでは有りませ
んヨ先刻母御が叱るとき私が立て居る足元へ腹たち紛れに手に持て居た双物を投付たのが此肉
へ當つて切たのでございませすヨト袂より紙を出して血を拭ふ、セ、ヤレ、非道事をしたノウド

レよく見せなヲ、これはマア餘程な疵だ何様して、汐時だから其様な事では行ぬへ待な斯す
 ると些たア能から斯しなトいひつゝ手拭を堅に引さいて疵口を巻いて遣るりう「ヲヤ新らしい手拭
 で勿躰なひそしては、かりでござぬます」ト「ナアニ手拭ぐらゐ惜くもぬへが、お前の母御も餘り
 無法なことをするヨノウリう」ト「ナニ私が悪ひから叱られるのでござぬますは、トいひながら片足
 をひきずる様に歩行」ト「ヲヤ疵口を強く結び付たから足の筋が縮るかのりう」ト「イ、エナアニ宜
 ござぬますヨト遠慮して堪へ歩行もかはゆらしく恥かしいのも忘れてか何心なく七三郎に手を誘
 引ながら漸と隅田堤の上のいたる」ト「サア誰も人が見て通らなひから脊中へ負なその方が足が
 いたくなくツて宜らうトいへば、柳は莞爾笑ひりう」ト「何様して其様な事が出来ますものか、そし
 重たくツて行ませんヨ」ト「ナニ其様なかはいらしい骸が重いものか、お前様の様な若ひ好漢の長右衛門があ
 りますものか、私がお半では田舎者がお半になつた様でござぬませう」ト「どふして、杜若其様
 除といふのだソレたま蹴瓜突ハナそれだから脊負といふのにりう」ト「それだツても小兒ではある
 ひし大人形容でからに脊負て御覽被成な他人が笑ひますは、ト「それは、いゝが何所が宅だツけ
 のりう」ト「アノウ蓮花寺から二丁ばかり先でござぬますがお前さんのお出の所が此邊ならば最早こ
 こから一人で参りまして、宜ござぬます」ト「どふして一人で遣られるものか、不用心な者かし、謹

花寺の先ならば向ふ越をして来た方が宜かつたらうのになせ、此渡しの淋しい方へ出て来たのだ
 ノウリう「ナアニ左様しますと跡から誰ぞ追欠て来たとき直に見付られますから所爲と他人にあ
 はない様に此路へ来ましたのでござぬますヨ」ト「エ左様かそれぢやア彼里の養家をば、逃出して
 来たのかへりう」ト「ア、餘りいじめられて兎ても彼養家には居られませぬものト」ト「左様サノウふ
 だん近所隣家でも左様いつて居たツけ何ぼ金のある家でも彼内儀に朝夕慣言付られぢやア男で
 も女でも辛防まては居られぬへ此度のお柳さんは能辛防して居る彼嬢のような温厚娘はなひ容
 儀はよし直ではあり最早お柳さんを慈愛がらなひ様では重て養子を貰ツても治ることはなひと
 噂をしたツけが案のごとくお前をもむづかおく叱言をならべて難義させたのかへ、ト「ト石橋が
 折てゐる其足で落様ものなら猶痛くツて大變だヲヤ、お月さまを雲が隠して途中がくらくな
 つたこれは難義だ、それに此通りは藪の垣根だから田浦よりかえつて足元が暗くツて歩行悪ひア
 レサ、餘り片脇を通ると溝へ落入るヨリう」ト「ホ、泥水へあつこちでは行ませぬねへ」ト「此身が
 好漢だと墮落て貰ふけれども左様うまくは行ぬへりう」ト「ヲヤ、お玉さんが墮落で今ぢやアお前
 様と夫婦になつてお在だ、ト「上阿町の家で聞きましたは、ト「ヲヤ誰が其様な事を言たのふりう」ト「アノ
 ヲ齋兵衛さんになつた磯八さんに聞きましたヨ」ト「ナアニ嘘ばつかり由放題を言てお前を欺かし
 たのだ、それは、いゝがお前は實家に兄弟でも多分とあるから、彼家へ貰はれて行たのかへ、ト「ト

此方へ曲るのたり、「イ、エ私と姉さんばかりで外に兄弟はありませぬは、七、左様かそれでは今
 行實家の跡繼はお前の姉上さんに聲でもとつてあるのかへり、「イ、エ實家には爺ばかりで姉上
 さんは和歌町へ唄女に行つて居ますヨ、七、ハア、引左様かそれぢやアお玉なんぞもこゝろ易く
 するだらう名は何と名號ノウリ、「アノウ實家に居た時分は於春といひましたが子當時ぢやア衆
 吉と名號ますヨ、七、エ左様か衆吉さんがお前の姉上さんかチャ、それぢやアお玉の居る宅と
 同じ所だサア最蓮花寺だ此所から何様行のたり、「チャお前さんおかげで早く來ましたわ是から
 は最早氣が丈夫でござぬますヨ、七、サア、其様なら先へ立て安行な思ひの外に早く來た我慢
 をして歩行たらふが足が痛くはなひかり、「イ、エ其様に痛みはしませぬヨトいふ時初夜の鐘の
 音ポチン、七、チャ春の夜とはいひながら最戌刻だそふだり、「ホンニお前さんのお出被成所
 へ遅くなりましたらふね、七、ナニ、それは止てもかまはないが婦多川へ歸るのが大變だ
 り、「アノウ私の家は爺ばかりで誰も氣のつまる者は居ませんから穢くつて宜ば御止宿なさぬな
 七、ナニ何様して氣の毒で其様な事が出来るものかマア、早く送つて行つてからの事サチャ
 其路かり、「この家の後の所が私の家でござぬますは、ト先に立たるお柳の姿まだ肩縫上の身幅さ
 へ狭き處女の心から錦の里を振捨て繼々しき母の折檻に合よりまさる古里の荆竹の根たどりの
 藪の下枝をかき拂ふ賤が伏家も實の爺の住が便りの胸の中妨嫌家へ七三郎を伴ひ行は歳ゆ

かぬ外見かざりなき處女の場合内知つたる我家の門苗種物の類品々と柴戸のはしらにかけたる
 札縁日歩行の植木屋の貧しき躰と推察たり

辰巳 梅之春卷之三終

梅之春二編之序

春もや、景色調ふ月と梅。籬の中の上品から。野の花も其薫りをば。袂に宿す夜半の月。隅田の渡しに乗合に。水棹の霏濡かど。看し羽生の種植木。縁日ものゝ根なし草と。思ひの外に幾筋も。路をつけたる花の頃廓の夜明の若湯から。説發したる初編の三冊。至極うけ地の評判と。聞て書次此卷は。春も朧の怪談に。茶番道具を假初に。遣ふも則ち勸善懲惡。古風な野邊の狐火に。新奇を綴る可笑は。三圍稻荷の神徳御利生。正直老父に孝行娘。婀娜な唄女に通好子男。強欲老婆に通人。凡そ北里と辰巳の里の。垣根の外を拴穿して。其香を移す梅の春。汐干の眺め彌生の櫻。仲之町あり仲町有。二人船頭四枚肩。まさりをとらぬ人情を。筆に差別は予が一流。三篇四篇の卷をかさねて。一部の趣向機關の大意。

看官推量の説をなすと能はじ。などと自讃をする節は。ひるきに反くに似たるべき歟

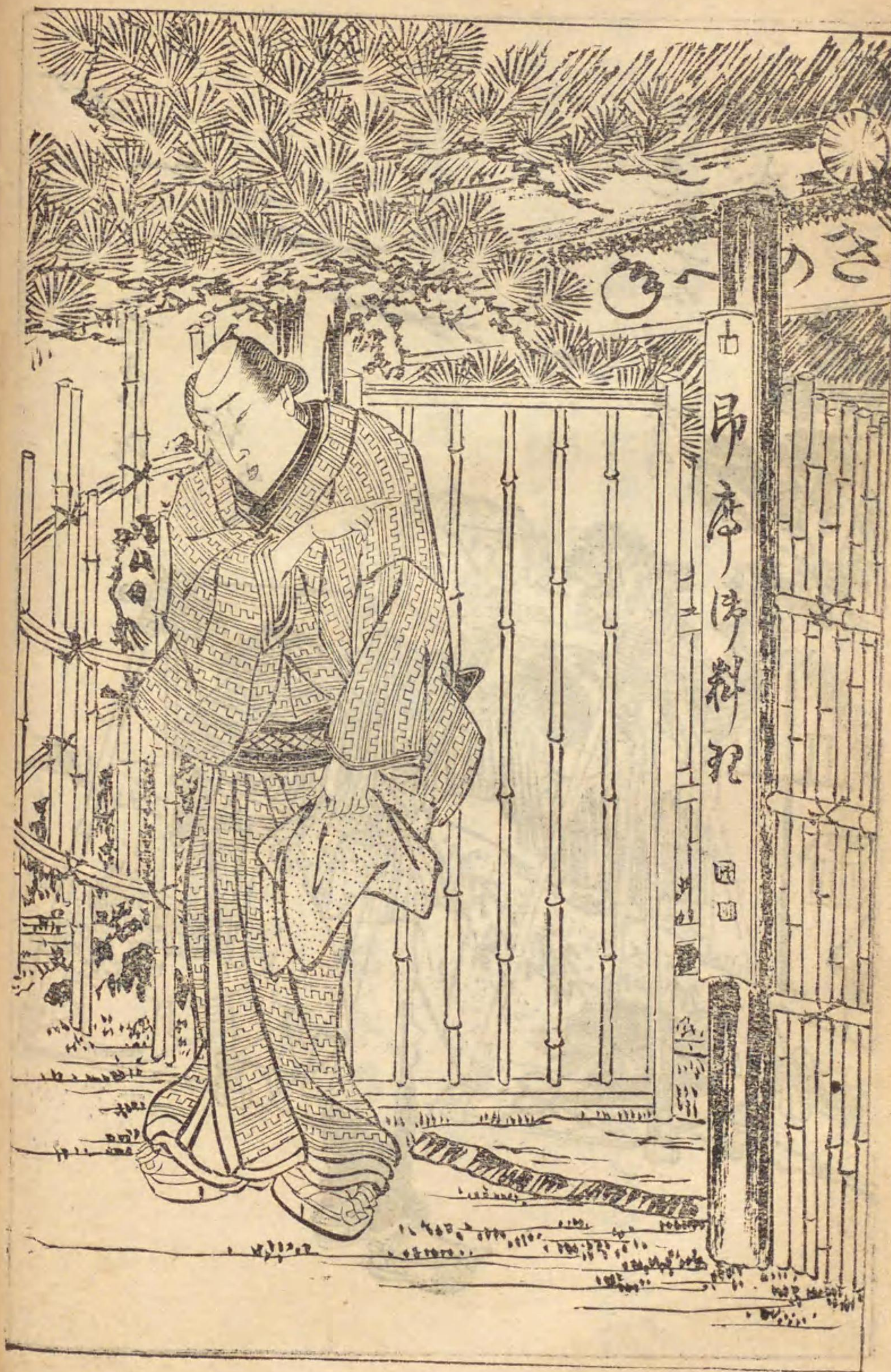
ある時はありのすさみにつらかりし

澤山さうに見給ふな。狂訓亭が古今の妙案。爲永一代の人情もの。前代後世未發の作意。豈一流と稱して可ならずや

于時天保十己亥三月

江戸戯作者 狂訓亭 爲永春水誌





辰巳 梅之春卷之四

第七回

再説七三郎はお柳を實親の家に送りといけ歸らんとするをお柳は押留りうアレサ七さんママお
 待被成ヨ今に爺が歸つて來ますから御遠慮被成ないで今夜は止宿てお吳被成ましよ私も久しく
 實家に居なかつたものだから勝手が違つた様で淋しくつてなりませんヨ何卒左様してお吳被成
 ナ 七夫だけれども私がおまへと差向ひで居る所へ誰ぞ來ると間があるいしそれに私も今夜は
 リうホニ茶番のお座敷へ行とお言ひなすつたつけねへ 七ナニモウそれは遅くなつたけれど
 も只歸りがけにおそくなつた分解を云てかへれば義理が濟からそれでいゝが是非宅へ子刻時分
 までに歸らないと都合のわるい事があるから何様しても歸らふヨお前も淋しからふが其中には
 爺が歸るには違ひもあるまひから氣を付けて待て居なヨト帯メ直して立歸らんと支度をすれば娘
 氣に只何となく悲しくなり涙を眼に浮めりうそれぢやア何様してもお歸ん被成のかへト少し泣
 聲になりて七三郎の顔を見るゆゑさすがにすげなくも振切つて歸りもされぬ世の人情色にも戀
 にもあらざれども常から知合互の氣質お柳は實父の貧しきゆゑに養女と成て戀が窪の鬼若松と

か聞へたる小格子同様なる後家の許へ三年前にもらはれたるが其後家お棚といふものより金
 を實父の正作に與へてお柳を養女とせしかば活業がらの癖として娘といへど金を出して抱へし
 女といふころが有のみならずお棚が生得邪見非道のもちまへにて鬼と呼れる綾簾の名目請繼
 しより夫にまさる強欲者あはれといふは露ほども知ざる悪婆なりけるゆゑわづか五人か三人の
 抱の女郎を責さいなみ娘お柳も氣にかなはぬ事などあれば打たしき悪口雜言傍に聞も氣疎き
 日毎の悪態隣家近所の人々もお棚を悪みお柳をあはれみ不斷噂は絶ざりしとぞさればお柳は此
 ゆゑに養子家を逃げ出し實家に歸來て視れど貧しき父は年老て其身一ツの活業に夜を更しても
 歸り來ぬ渡世のつらさを思やひりまた便りなき我身の上をはかなく案じて七三郎のやさしき心
 を頼母しく力となしたき胸中くよ／＼思へど言出す言葉も出来ぬは年行ぬ恍惚子乙女の情なる
 べし 七お柳ぼうお前泣ほど獨で居るのが否なら何様も詮方がないから爺の歸るまで居て遣ら
 ふが其代り澤山御馳走をしなヨト笑ひながらいへばお柳も涙の笑ひ顔りう眞正にかへ嬉しいね
 へママお茶をこしらへて上るから些其所へ横におなん被成なサア枕を上るからト戸棚をあけて
 探し出す油染たる小枕の更紗の切のさら／＼に色氣もわからぬ塵ほこり拂ふて折し當紙を幾度
 どなく折かへせよこれし反古の外なければ四邊を尋ねて茶袋のからになりしを引さいて紐を
 ゆるめて上に載せりうサアこれでもママ枕にして被下ましヨ行なくなつてありきすけれども紙

が何所にあるか知れませんからトさし出せば 七「ナニ〜寝ずともいゝヨモウ爺が歸るだらふ
 はナリ」ナニ子遠い所の縁日へ行と同じ活業の家へとまつて翌日になつて歸る事も有ますヨそ
 れだけれども今夜は是非歸るだらふと隣家の姑さんが言ましたヨトいひながら圍爐裡に鹿柴を
 折くべて自在にかけける土瓶の湯わかしてはやく茶を入れてと心をあせる其風情かはゆらしくそ見
 えにけり 七「ドレ〜此身が火を焚て遣らふお前の髪が灰だらけになると行ないト爐の側へよ
 ればり」ホンニ烟くつてなりませぬいね〜それに家内が薄ッくらくつて否でございませう子。
 アノウ芝居のくらやみ峠の家を見る様でございませうヨ 七「ナニ左様でもね〜が建場の太平次の
 家にすればさしづめお前はお米の役で故人 梅我よりも美麗が此身が行ね〜三升の太平次と
 も行ず高橋には向ずマア何方も詮方なしに壁の崩から竹鎗をもつて出様といふ役にでも遣つて
 貰ふのだり」チャ〜何様して私がお米の役が出来ますものかトはなしの折から夜風に傳へて
 耳ちどろかす亥刻の鐘ポチン引 七「チャモウ亥刻だそうだり」あんまり鐘が近く聞へて私きや
 アびつくりまましたは 七「左様サ世間がまづかだから耳を突抜くやうに聞へるヨそれはいゝが
 斯して居る所へ鬼若松からお前を尋ねて来て此身が居るのを見たらまた此身にむづかし言つ
 てかゝるたらふノウトいはれてお柳は氣の毒そうにり」ホンニ左様いたしたらば何様言ませう
 子ニ誰ぞ来る足音が去たらばお前さんには何所ぞへ隠れてお貰ひ申ませうかね〜ト當惑顔の其

所へ裏口の戸をがらりと押明けづか〜這入てお柳を捕へ 七「サアお柳さん直に廊へ歸んなせ
 〜母御が何様に腹を立て居なさるか知れやア仕ね〜サア〜同道につれて行のだト立かゝれば
 お柳はかなしく身を飛退て七三郎の背後へまはりり」アウノ今夜は此方の爺に用があつて来た
 のだから明日歸ると左様申てお呉なさいヨ 七「イヤ〜左様はならぬ〜私等アきびしく言付ら
 れて来たから何でも直に連て行ないければならぬ〜爺に用があるもよく出来た言分だア好男と
 二人で是から味く遠くへでも逃て行ふと思つてからにサア〜早く歩行なせ〜 七「モシお前は
 若松の使か知らね〜が夜中に娘子どもを連て来るのに一人で來なすつちやア途中が不用心だア
 殊に此家の親御も留守だから此娘をお前に渡しちやア上られね〜子 七「ヘン他人の娘を引出し
 て来てわたされね〜も虫が能やア何でも直に連て歸るからいよ〜此娘が惜くば表向で貰ひに
 來なせ〜ト言つゝ表の方へむかひ 七「ヤイ〜衆人が家内へ這入て此娘をかつぎ出して被下し
 腰押人が居るから直には動かね〜ト聲をかければ五六人どろ〜と押入て七三郎を突倒し
 お柳を肩に引かつぎ口に手拭押當て聲も出させず田甫道を後かまはずに駈出す七三郎はこれを
 見て若松よりの迎ひとはなな〜承知のならざる奴等たしかに様子をかが付た悪人どものなす
 所爲ならんいかにしてもお柳の難義見すてもならじと尻引ッからげ後をまたひて駈出す此時月
 は朧にて雨雲漸々におほひかさなりさツと降來る春雨の風がさそふていとほけしく田畑の間の

細道をいそげばすべる夜の足元逃るも追ふもはかどらず餘りに雨のつよくなればさすがに困る
 悪人ども彼方此方の百姓家の軒をたづねてかゝみ居る其中にしも輪をかけて悪事にするとき奴
 と見えお柳をかつぎて只一人仲間の奴等を出し抜て路を引かへくら紛れ濡るをいとはず一ツさ
 んに走り隠れる森の中さぐりく〜て藪の中を押分入て幸ひに荒はてたりける白屋の軒にお柳を
 押居て暫時雨の晴れるを待にお柳は口を手拭にてまばり付られ手を押へられ泣もなかれぬ悔し
 さは何にたどゆるものもなし ▲「コウお柳さんさぞ恐ろしい奴等だと思ふだらふが全く悪氣で
 お前を此所まで連れて来たのではねへせ宵に渡し船をわたつた時から仲間の奴が考を付て此仕組
 を志たのだアナ此身ア每晚素見にいつてお前の事も知つて居るから友達の間でだくみを聞てお
 前がかはひそふに成てわざとその中へ加はつてそれから雨を幸ひに衆人をまいて駈ぬけたの
 だ。ノよしかへ信切だらふ其所でまたお前に相談がありやすマア此手拭をとつてやろうヤレヤ
 レかはひそふに志かし口を利と彼奴等がまた来るから志づかにしなヨト手拭をとき ▲「さぞ口
 元が痛むだらふ非道イ事を仕やアがつた此身ぢやアないせ寔に色氣のぬへ情を知らぬへ奴等だ
 トいたわる風情はいよ〜ます〜氣味わるけれど声さへも立ぬお柳が心の中夢か現かわき
 まへず身をふるはして居たりしを彼悪人は猫なで聲欺しつすかしつお柳をどらへなほ得手勝手
 の理を付て既に漫りなる行ひにもおよぶべきありさまゆゑお柳は摺抜逃んとすればいとい手荒

く引ツとらへ ▲「エ、此女ア情の強いべら棒だアコレ能聞ヨ何様でうぬは若松を逃出したから
 には身に疵を付られて女郎にされるか他所へ賣て遣られるかするのだア其様ならばコレ一度や
 二度は他人のいふ事を聞ても能ぢやアねへか何様しても否と言はば此方も依古地だ何様するか見
 やアがれト手込になして立かゝる折しも此家の壁の音ドロ〜〜とくづれかゝり何やらによ
 つきり顔を出せばお柳はアツト倒れ伏すかの悪人も驚きながら崩れし壁の方を見てフワアト一
 聲一さんに逃て行こそ異しけれ

第八回

此時雨晴れ忽ちに雲間を出る月の影晝のごとくに光りかゝりやきしが彼白屋の軒下を逃出したる
 悪人はこわ〜ながらはるかに脊後を振り見れば崩れし壁の間より顯れ出し幽霊の顔は以前に
 見どめしが其おそろしさものすぢさ夫故にこそ逃退きて今また見れば手を上げて此方を招く姿に
 てもものこそいはね追來る様子悪事を働く奴にも似合ず臆病者にてありけるが是を見るより腰を
 振し尻もちついてふるへわな〜き這ずりながら片息にた〜ハア〜と泣ッ面命から〜逃て行
 また此方には彼幽霊が消るにあらで疊むがごとくなると思へば白屋から顯れ出る二個の男倒れ
 しお柳を抱起し×「チイ〜姉上さん〜コレサ氣をたしかに持なヨ此身達は今の野郎の仲間